

ポケモンの世界が思った以上に面倒だった件！

gpアナガキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界では、ポケモンという生き物がいる。オーキド博士の言うには、色々な場所に住んでいるらしいが俺から言わせてもらうと、家で引きこもりの幸せな暮らしがしたいのです。※この作品は転生ものや転移ものじゃないのでご了承下さい。

※52話目のタイトルを「アンタの負けだ。」に変えました。ストーリーも少し変えたので、途中まで読んでいた読者の方々にはご迷惑をお掛けします。ツイッターで感想を書きたい人はコチラ↓<http://mobile.twitter.com>

※メガシンカは一応入れる事にしました。

# 目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 常識とは囚われないもの        | 1  |
| フシギダネって不思議種?       | 7  |
| 誰のポケモンがたまたま勝ったって?  | 7  |
| (怒)                | 13 |
| ぶっ殺されたいのかテメエ!      | 20 |
| どんな覚え方したらそうなるんですか! | 26 |
| お前らバイオンマンか         | 31 |
| ドガース、だいばくはつ!       | 36 |
| それぞれの歩み            | 41 |
| それただのカビゴンだよ!?      | 47 |
| コダツクの馬鹿ヤロー!        | 53 |

|                            |    |    |
|----------------------------|----|----|
| あら? 頭はマンキー並みじゃなかったの        | ね  | 59 |
| 俺はマンキーから生ゴミにフォルムチェンジしたのか?  | 66 |    |
| モモンソーダ売ってない自販機なんて自販機じゃないわ。 | 73 |    |
| 生きてる中で初めてどうでも良い経験をしたよ。     | 78 |    |
| 番外編: secret memorys        | 85 |    |
| ユミ (オマケ付き)                 | 85 |    |
| それはレツドの目が節穴だからだと思っ         | な。 | 90 |
| 誰か俺の味方はいねえのか!?             | 96 |    |

納得してんじゃねえよ！

番外編　：コダックとナツメ

162

やっぱりお前は純粹な悪だよ！

そんな事を言っても良いんですか？

ジムリーダーって皆変人なのか？

165

114

だからわいは人間や！

ブルーさんを愛して真のヒロインになる  
為に！

170

絶対ぼつたりだよあの値段！

なんや、どいつが来るかと思つたら爆弾

俺なんか酷いことしたかな？

ボールやないか。

174

俺ってそんなに悪どいか？

ヘタレと童貞は関係ねえだろ！

180

へ、ザマアー！兄弟子（ダン）

マサキさん口だけの野郎になつちやつ

コイツ（ナツメ）確かテレビでも変態つて

た。

185

言われてたよな。

え？俺そんな奴いねえよ。

191

それ、犯罪ですよ。

うるせえ、ぶつ殺すぞ！

196

お試しでわいを使うな！

答えになつてねえよ！

201

157

152

146

141

136

130

125

120

107

102

やべえ、貰うの断れば良かった。

206

マサキさんは危ない目でイーブイを直視している。

211

ミニリユウがとても嫌そうな顔してんな。

217

何故アンコールを使うんだ？

223

この世界の男性は何処まで貧弱なんだよ。

229

どうやら俺のコダックは女性（若い人限定）にメロメロボデイが発動するらしい。

234

私の愛しの王子様（ブルー）

241

成る程、面倒だ。

247

私とデートしてくださいませんか？

253

まだ出会って数時間しか経ってませんけどね。

258

ブルー君がヘタレなだけじゃないですかw w。

264

エリカ先輩ってあく・ゴーストタイプじゃないのだろうか。

269

良い子の皆は虫除けスプレーを人の顔面に向けないでね。

274

どうも、侵入者です。

279

アンタの負けだ。

284

いくらなんでもトレーナーにやってはい

けない行為だと思う。 | 291

誰よりもエリカ先輩の目の色は濁つてい  
た。 | 296

私の負けですわ！ | 302

2人きりで仲良くしましょう。 | 309

勝手に始めんな！ | 314

哀れコダック、お前の事は忘れない。

319

あのクソ野郎、今に覚えていろ。

324

涙のオーダイル | 329

女子つて怖いな。 | 335

## 常識とは囚われないもの

この世界ではポケモンという生き物がある。各地に存在するポケモンは、色んな所に住んでいるらしいが、俺から言わせてもらおうと遠い所に行くのは面倒くさいからポケモンよりも家に引きこもって充実した生活がしたい。ポケモントレーナーの常識を押し付けて欲しくないのだ。つまり常識とは囚われないものである。つまりトレーナーにならないのが人生勝ち組！

「これはどう言うことじゃ？」

そう聞いているのは、歳を取った腐れジジイことオーキド博士だった。

「オーキド博士がポケモンについてどう感じるか感想文を提出しろとの事で俺は俺なりに考えて書きました。」

「あのなあ、」

今なんの会話をしているかと言うと、「トレーナーになってから何がしたいか」と言うのを30文字以上で答えた作文のようなものだ。レッドやグリーンも書いたらしいが俺はトレーナーに夢なんか抱いてないのでニートを夢見てそのまま書いてオーキド博士に提出したところ何故か俺だけオーキド研究所に呼ばれた。

「レッドやグリーンはポケモントレーナーを昔から目指していたが、お前さんはそのく  
だらな考えをまだ捨てずに成長したったとは、心底呆れた奴じゃわい。」

「別に良いだろ、俺は俺なりに考えて書いたんだ。」

「ブルー、君には妹もいるだろう。その妹にそのような考え方が似てしまう可能性もあるから、君を更生させると親御さんから聞いている。何故ポケモンに興味を持たない  
？」

「あのうるさい母さん直々に言っつてんのかよ、ハア。俺がポケモンに興味がないんじゃない  
なくて、ポケモントレーナーに興味がないんです。だって面倒じゃないですか、色々な  
街に行つてポケモンゲットしたりポケモンジムに行つてジムバッチとるなんてなんの  
意味があるんですか？」

「ブルー、君はポケモンバトルの熱い情熱やワクワクを知らないのか？」

「そんなのテレビでいつも見えますよ。確か昨日もチャレンジャーが四天王に負けたと  
か番組で流れてましたよ。」

「そんなまがい物でバトルの世界は収まらないのじゃ！」

「いきなり怒鳴らないで下さいよ。だいたい、ポケモントレーナーになってなんのメ  
リットがあるんですか？」

「ポケモンとの新しい出会いが待つとるぞ。前も言ったが、10歳になるとポケモント

レーナーの資格が手に入る。そこでヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネの中から初心者向けポケモンを選んで旅に出るんじゃない。わしが一番最初にゲットしたポケモンは、……」

「嫌、興味ありませんよ。それに初心者向けのポケモンって三体いるって事はマサラタウンに住んでいる同い年はレッドとグリーンだから、早い者勝ちじゃないですか!?!」

「ふん、まあそうじゃの。お!?!良い事思いついたわい。ブルー、ちよつと来い、見せたいものがある。」

そうオーキド博士に言われて連れられたのはオーキド研究所の地下倉庫だった。

「こんな所に呼び出してなんでですか?」

「これをお前にやってみたらおうと思ってるな。」

渡されたのはモンスターボールだった。

「慣れるより馴れるじゃ。中にポケモンが入っておる。そのポケモンでレッドかグリーンを相手にポケモンバトルをしてみたらう。」

「ポケモンバトル!?!」

「心配せんでもいい。初心者向けポケモンの中から選んでもらうだけじゃ。せつかくだからポケモンは最初に選んで良いぞ。」

「つたく、じゃあ適当にこれで。」

「ポケモンをモンスターボールから出してないのに良いのか? そんな選び方をして。」

「良いんですよ。別に名前がブルーだからって水タイプのポケモンを選ぶ理由もないし、それに人間の友達も選べる訳じゃないでしょ。」

「たまには良い事言うのう。本当誰に似たんだか。」

その台詞30回以上アンタの口から聞いたよ！

それからと言うもの、オーキド博士はレッドとグリーンを呼んでオーキド研究所の庭でポケモンバトルをやる事にした。

「相手はブルーが選んで良いぞ。」

「なあ、俺ポケモンバトルよく知らないから下手だぞ。今ならお前に負けるかもしれない。」

グリーンが分かりやすく台詞を棒読みで言ってきた。

「あ！ずりーぞグリーン。ブルー俺、俺にポケモンバトルをやらせてくれ。今度プリン奢るから。」

このど田舎にプリンを売ってるところはねえよ！

「どっちでも良い。ジャンケンで勝った方で良いよ。」

「最初は」

「グー」「パー」

「よっしゃ俺の勝ち。」

「おいずりぞグリーン。ジャンケンはグーから始まるのに、」

「今回のジャンケンはそんなルール言われてません。」

「ここら、喧嘩はやめんか。グリーン、不正を働いたのでレッドがブルーの相手じゃ。」

「な!?!」

「やった! やつぱりルール違反だったなグリーン。」

「ほれレッド、なんのポケモンにするんじや? この2体から選ぶと良い。」

オーキド博士がモンスターボールから出したのはヒトカゲとゼニガメだった。

「俺はお前に決めた、ヒトカゲ!」

レッドはそう言ってヒトカゲを指差した。

「では始めようかの。バトル開始!」

俺はモンスターボールからフィールドにフシギダネを出した。

「先ず俺からだ! ヒトカゲひっかく攻撃!」

「カゲ!」

「フシギダネ、なきごえをしながらジグザグに移動してヒトカゲを攪乱しろ。」

「フツシャー!」

フシギダネは俺の言った通りにひっかくをジグザグで動きながら避けてなきごえを出している。同じ事をしばらく繰り返していると、

「くそ、当たるまで何度もひっかくだ！」

「カゲ！」

「フシギダネ、ヒトカゲがひっかくで振りかぶった瞬間にたいあたり！」

「タネ！」

フシギダネは後ろに下がってヒトカゲのひっかくを避けた後に思い切りたいあたりをした。ヒトカゲはフシギダネのたいあたりで吹っ飛びレッドの体に命中してレッドの体はヒトカゲに耐えきれずに後ろへ倒れた。

「カゲ！」

「ぐは！」

「大丈夫かレッド、ヒトカゲ！」

オーキド博士が心配して駆け寄る時にはレッドとヒトカゲは一緒に目を回していた。

# フシギダネって不思議種？

俺はブルー、今家に帰って母さんから怒られている。

「ポケモンバトルする時はもうちよつと周りに注意してやりなさい！レッド君2時間くらい意識失ってたわよ。バトルする時は相手を思いやる事！」

「わかってるよ、んな事。」

「返事、しつかりしなさい。」

「はい。」

「短く！」

「ハイ！」

母さんはそう言うと、キッチンへ向かった。いつものように母さんから説教をくらい俺の心はヘトヘトだ。今日の中で一番の出来事はレッドが目を覚ますとヒトカゲから頭を齧られて「ぎゃー！？」と叫びながら目を覚ました事が一番今日の中で思い出に残ったな。グリーンの奴腹抱えてのたうち回ってたし。まあ俺も笑っただけどww  
「ブルー、ちよつと来なさい。」

そう母さんから呼ばれて猫背でキッチンの方へ向かう。

「何の用？母さん。」

「そういえば、今日庭でポケモンバトルしてたじゃない。もしかして、ポケモントレナーなる気になった!？」

「んなわけ無いじゃん。」

「つそ、アンタがまだそんな事言ってるとは呆れるわ。」

「それオーキド博士からも言われた。でもまあ、家でゲームするよりかは楽しかったかも。」

「本当!？やだ、初めて息子から涙の出るような言葉が聞こえたわ。」

「そこまでかよ!？」

「いつもいつも家に引きこもっているクソニートを更生させるべくオーキド博士に頼んどいて正解だったわ。」

「知らねえよ、そういえば父さんは、まだ帰ってこないの?？」

「そろそろオレンジを連れて帰ってくるんじゃない?？」

オレンジというのは近くのポケモンスクールに通う生徒で今年で8歳になる俺の甘えん坊で天然な妹だ。因みに父さんはスクールの教師兼オーキド博士の助手もやっている。

「ただいま帰ったぞ。」

父さんの声だ。いつも間の抜けた声で言いながら帰ってくる。どうやらオレンジも一緒のようだ。

「それじゃあ夕ご飯にしましょつか。今日は豪華よ、なんとブルーが初めてポケモントレーナーになりたいって言ったの!？」

「本当か!？」

「言ってねえよ！」

「言ったじゃない、”ゲームより面白いかも”って。」

「勝手に人の言葉捏造すんな!」つたく、今日はオーキド研究所でポケモンバトルをやったんだよ。」

「ほう、ブルーはスクールに来なくなったから将来心配したぞ。でもまあ、ポケモントレーナーとしての道を歩んでくれるなら越したことはないか。」

そんな会話を父さんとしていると、オレンジが……

「お兄ちゃん、ポケモンになるの?」

「ならねえよ!」ってかどうやってもなれねえよ。」

「そういえば今年で10歳だよねブルー。」

母さんがそんな事を聞いて来た。

「なんだよ、まさか本当にポケモントレーナーになれっていうんじゃないだろうな。」

「それも後で言うけど、バトルのポケモンは何選んだの、やっぱりゼニガメ？」

「ゼニガメか、ブルーがこれだからしつかり者だと嬉しいけど。」

「息子をこれ扱いするな！バトルに使ったのはフシギダネだよ。」

「フシギダネ？フシギダネって不思議種？」

「オレンジ、フシギダネはポケモンだよ。」

まあ別に不思議な種を持ってない訳じゃないんだろうけど、

「それじゃあ準備しなくちゃね。今年の夏にまでポケモントレーナーの準備を済ませるわよ！」

「え？母さん、何言ってるの？俺一言もポケモントレーナーになるって言ってるじゃないけど。」

「何言ってるんだ。フシギダネを選んだからにはフシギダネもお前がトレーナーだと認められた筈だ。」

んな訳ないだろ。そう考えると、家のチャイムが鳴った。家の前に立っていたのはオーキド博士だった。

「これはこれはオーキド博士、どうしたんですか？」

「ブルーのお母さん、すまないねこんな時間に。フシギダネがブルーに会いたいと聞かないもので、ブルーはいませんか？」

「ブルー、オーキド博士がフシギダネを連れて来たわよ。今すぐ玄関に来なさい！」  
「言われなくても聞こえてるよ。」

「おおブルー、ちよいとこのフシギダネがお前に会いたいと聞かなくての。」

「フシギダネ、確かにお前をバトルのポケモンに選んだのは俺だけど……」

「これを機にフシギダネを貰って旅に出ると良い。」

「それは良いわ！家からニートが更生して一人暮らししてくれるんならなんでも良いわ。」

良くねえよ！

「ブルー、お前はどうしたい？オーキド博士はこう言っているがどうだ？ポケモンを連れて旅立つのは良い経験だとお父さんは思うけど、ブルーはどうしたい？」

俺は、……………

「俺はフシギダネと一緒に旅に出るのも良いかもな。……今日のバトルもその、た……楽しかったし。／／／」

「よっし、言質とった！」

母さんはそんな事を言っつてグツと拳を握った。

おい!?

「予定変更、ブルー明日の朝旅に出なさい。後これ、ジョウト地方で流行っているポケギ

アって言う便利なものらしいからあなたにあげるね。」

「いきなりだなおい、どうせポケモンリーグに参加するまで帰って来るなって言うんだろ。」

「当たり前じゃない。テレビの前で応援しとくから、四天王からやられるブルーの姿をww」

「それを母さんが息子の前で言うとは思わなかったよ。」

かくして、俺のポケモントレーナーとしての道が半ば強制的に開かれた。

誰のポケモンがたまたま勝ったって？（怒）

（一番道路前）

翌日朝起きると、レッドとグリーンが俺と同じように旅の支度をして家から出てきた。

「本当にお前らも一緒に来るのか？」

「当たり前だろブルー、まだ俺はお前に負けた烙印が挽回できないのにポケモントレーナーとして旅立つ瞬間も遅れたらお前に大きな距離を開けてしまうだろ。」

「ふん、レッドは昨日あんなあっさり負けたから恥ずかしいよな。ww」

「まだブルーに勝ってないグリーンが言うかよ！」

「ふん、だから俺も一緒に旅立つんだよ。一瞬でお前ら二人を追い抜いて頂上から気長に待つてやるから精々頑張れよレッド君。」

グリーンはいつも通りレッドを挑発している。レッドもレッドで負けじと言葉を返しているが、旅立つ瞬間もレッドとグリーンはあまり変わらないな。

「こらーやめんか二人共、このままだと意外にもブルーが二人よりも先にポケモン図鑑を埋めるのが先かもしれないな。」

「な!?!」

「じゃ、俺が発するんであの面倒な両親によく伝えておいて下さい。」

「ブルーにはポケギアがあるだろう。」

「一回かけると絶対迷惑メールが溜まるんであまりポケギア越しで話したくないんですよ。」

「ちよつと待てよブルー!」

「なんだよグリーン、今から次の街まで行く予定だけど何か用?」

「昨日はレッドとポケモンバトルしたのに俺とはしないのか?」

「えー、面倒くさいからパス。レッドとでもやってれば?」

「お前、最近じゃポケモントレーナー同士の目と目が合ったら勝負ってテレビで流れるだろ。」

「現実でそんなのあったらただの当たり屋だよ。それとも何?俺とそんなに勝負したいの?」

「ふん、そうだよ。どちらにしろブルーを越すけど俺の第1戦目は手応えのある奴とやり合いたいしな。」

コイツ戦鬪狂かよ。

「わかったよ、負けても知らねえからな。」

「望む所だ！」

俺はグリーンとポケモンバトルを第2戦目のポケモンバトルをやる事にした。

「いくぞゼニガメ、からにこもる！」

「ゼニ！」

「フシギダネ、なきごえ！」

「ダネー！」

「最初は二人共様子見のようじゃな。」

「俺も早くブルーとバトルしたい！」

レッドとは昨日やっただろ！

「ふん、そっちが動くきのないならこっちからいくぞ。たいあたり！」

「フシギダネ、こっちもたいあたりだ！」

「ゼニ！」 「タネフツシャー！」

ゼニガメとフシギダネは頭をぶつけたまま押し合っていた。しかし、フシギダネのなきごえでゼニガメの攻撃力は下がっているのので少しゼニガメは押され気味だ。

「ダネー！」

せめぎ合い勝ったのはフシギダネだった。しかし、ゼニガメはダメージをあまり受け

ていないようだ。

「ふん、例え攻撃力が落ちてもこつちには防御力があるんだ。そう簡単にくたばったま  
まるか!ゼニガメ、たいあたり!」

「ゼニー!」

ゼニガメがもう一度たいあたりをする事によって、フシギダネはダイレクトにたいあ  
たりを受けてしまった。

「ダネ!……。」ガタン!

「もう終わりか? やっぱり俺のゼニガメの方がそのフシギダネより強かったようだな。  
やっぱりブルー君のポケモンはレッドにたまたま勝ったんだよ。wwゼニガメ、もう一  
度たいあたり!」

「ゼニー!」

誰のポケモンがたまたま勝ったって? (怒)

「フシギダネ、ゼニガメを誘うように走れ!」

「なんだ、逃げる事しか出来ないのか?ゼニガメ、端にフシギダネを追い込め!」

ゼニガメはグリーンの言う通りフシギダネを端に追い詰めた。

「それが目的だったんだよ。フシギダネ、ゼニガメの甲羅にめがけてたいあたりだ!」  
「何!?!」

「ダネ！」

「ゼニ!?」

ゼニガメは背中から後ろに倒れ、起き上がれない状態になった。

「何、早く起き上がれ。ゼニガメ！」

「もう遅い。フシギダネ、トドメのたいあたり！」

「ダネ！」

ゼニガメはオーキド研究所の方へ吹っ飛んでいった。

「ゼニガメ!」

「勝負は決まったようじゃな、ブルーの勝ちじゃ。」

グリーンは目を回したゼニガメをモンスターボールの中に入れてこっちに歩いて来た。  
た。

「もつとポケモンを強くして、お前をギャフンと言わせてやる。覚えてろよ！」

そうグリーンは言うのと、一番道路の草むらを走って抜けて行った。

「ふん、何が頂上で気長に待ってやるだ。」

「別にいいじゃろ、グリーンにとつても今日の負けはかなり良い体験になった筈じゃ。奴がボコボコされてる映像はこれで取れたわ、次帰って来たときはこの映像を見せてからかってやろうかのう。」

「マサラタウンの人達はみんな自分の子供に嫌がらせをすんのが趣味なのかよ。」

「言うのが忘れとったが、バトルに勝ったからと言つてもフシギダネは傷ついとる筈じゃ。このキズぐすりを使うと良い。」

オーキド博士はそんな事を言つて俺にキズぐすりを渡して来た。

「グリーンの方は良いんですか?」

「彼奴ならワシの研究所から色んな物を取つて行つとるから大丈夫じゃ。」

「グリーンは奴、そんな汚い手段を使つたのかよ!？」

「そういえばブルーそれにレッド、次に行くまでにこれも渡しておこう。」

そう言つて、オーキド博士が渡して来たのはモンスターボール×5個とタウンマップだった。

「ここから抜けた先にトキワシシティがある。ジムリーダーはそこにはいないようだから、チャンピオンを目指すならニビシティを目指すが良い。ニビシティに着くまでにトキワの森という迷路のような守りがあるから気をつけるんじやぞ。」

「分かりました。ブルー、ニビシティに行くまでどうせ行く道変わらないから一緒に行こうぜ。」

「別に良いけど、ニビシティでは科学博物館に寄るつもりだからそこでお別れだ。」

「嗚呼、早くポケモンゲットしたいぜ!」

そう言って結局レッドも一番道路を走って行った。あれ、これ俺も走った方が良い？

# ぶつ殺されたいのかテメエ!

トキワシテイ

俺達は一番道路を抜けた先のトキワシテイに辿り着いた。

「今日はここで一晚を過ごすか。」

と、俺が言うのとレッドが驚いた顔で反応してきた。

「え!? 早くないかブルー、まだ出発して2時間も経ってないぞ。」

「あのな、そんなに急ぐ必要はないんだよ。ポケモンリーグの開催までに時間はまだまだあるんだ。それに次のトキワの森ではオーキド博士によると迷路みたいな複雑な道があるって言うてただろ。今日はここでトキワの森を抜ける準備をして、明日は森を抜けてニビシテイへ行くんだよ。旅はどんな危険が待ってるか分からないしな。」

「ブルー、風邪でも引いたのか?」

「ぶつ殺されたいのかテメエ!」

「でも、普段ブルーはいつも面倒とか興味ないとか言っつてどんな事でも頭を使おうとしないだろ。」

「確かにそれはそうだが、今ここで決めるべきなのは俺が面倒臭がりな事よりもこの先

のトキワの森を攻略する事が大事だと俺は思うんだよレッド君。」

「あ、話逸らした。」

俺はレッドを無視してポケモンセンターへ向かった。

ポケモンセンターに入ると、ラッキーがドアの目の前に立っていた。

「ようこそ！ポケモンセンターへ、ここではポケモンの回復と一晩をフリーに過ごせるシステムがあります。どんな御用でしょうか？」

ラッキーが喋ってるだど!?

「あ、こんにちはジョーイさん。俺達ここで一晩泊まって行きたいんで、部屋を貸してください。」

レッドがそう言うのと、ラッキーの後ろから俺達の前へとジョーイさんが笑顔で近づいて来た。

「分かりました。お手持ちのポケモンも回復させましょうか？」

「お願いします。」

その日フシギダネ達が回復した後、俺達はポケモンセンターに荷物を置いて、トキワシテイの近くに生息するポケモンをゲットする事にした。

トキワシテイ西外れの草むら

「ここはどんなポケモンがゲット出来そうなんだ？ブルー。…ブルー、おいブルー！」  
「静かにしろ、あれを見ろレッド。ニドラン♂とニドラン♀だ。」

「あ!?!あそこにはポツポがいる。なあブルー、どれだけ凶鑑を埋めれたか競争しようぜ  
！」

「疲れるから良い。俺はポケモン凶鑑はゆっくり埋めて行く予定だからやるなら一人で  
やっておけ、俺はここらじゃゲットしにくいポケモンを探すよ。」

「ふーん、分かったよ。じゃあこつからは別行動だな。俺はあっちへ行ってくる。夕方  
になったらポケモンセンターで集合だ。」

「分かった。」

レッドはそう言うと、東の方へと向かった。

数分経つと、草むらの中に丸いフォルムの何かを見つけた。

「よく見るとポケモンの卵じゃないのか？周りにポケモンの巣らしきものはないのに何  
故卵がここにあるんだ？まあ、ポケモンセンターへこのポケモンの卵を届けた方が良好  
だろう。」

ポケモンセンター

「あら、そのポケモンの卵はどうしたんですか？」

「西の外れの草むらに落ちあつたんです。この卵預けて良いですか？」

「分かりました。何か変化があれば連絡するのでお待ち下さい。」

そう言われた後、俺は卵が生まれるまで待つてる事にした。気がつくまで寝ていて、時間を見ると17時を過ぎていた。

「やつと起きたかブルー、話は聞いたぞ。あの卵からどんなポケモンが生まれるんだろうな。」

レッドが見ているのは強化ガラスの奥にあるチューブに繋がれたポケモンの卵だった。

「さあ、ここら辺のポケモンの卵じゃないと思うけど……あの卵はどこから来たんだ？」

「さあ？ま、草むらにあるよりかはポケモンセンターに預けていた方が良いだろ。」

「あ、そうだ。ジョーイさん、ポケモンの卵が孵ったら俺のポケギアに連絡してもらって良いですか？」

「構わないわ。明日はニビシティを目指すの？」

「はい、ニビシティのジムリーダーに勝つ事が今のところの俺達の目標です。」

「そうなの！だったら岩タイプに対抗できるようにしといた方が良いでしょう。」

「岩タイプ？どうしてですか？」

「レッド知らないのか？ニビシティのジムリーダーは岩タイプのポケモンを扱うタイプっていうポケモントレーナーなんだよ。」

「タケシさんはニビ博物館の化石発掘にも協力しているらしいわ。寄ってみると、もしかしたら昔のポケモンの化石から復活出来るかもしれないって最近新聞に載っていたわ。ジム挑戦をやり終わった後でも寄って見たらどうかしら。」

「昔の化石から復活かあ。」

「昔のポケモンってポケモン図鑑に載るのかな、ブルー。」

「載るんじゃないか。今じゃカブトプスやオムスターが昔の化石から復活したと言うし、その情報も出される筈だ。」

「あの……すいません、この街のジムはどうしてお休みか知っていますか?」

そう聞いてくる同年代だと思える麦わら帽子を被った女子が聞いて来た。

「あ、私の名前はユミって言います。ニビシティから来たんですけど、ジムが空いてなくて……。」

するとレッドが……

「確かに謎だよな、どうして空いてないんだらう?」

「噂ではジムリーダーは悪の組織に属した人だとか噂があるぞ。」

「これじゃあいつジム挑戦出来るか分からないし、どうしよう。」

「そのうち来ると思ってたっしかなんじゃないんですか。」

「そうですね、実は私後ごことグレンタウンのジムだけなんです。もしかしたらポケモ

ンリーグで会うかもしれないね。」

「その時は負けねえよ。じゃあな、ユミさん。」

「はい、それでは……。」

ユミさんはそう言うながら自身の寝室へと戻って行った。

「それじゃあ俺達も寝るか。」

「ああ、そうだな。」

今の人、何処かで会ったような？

どんな覚え方したらそうなるんですか!

トキワの森

俺達はポケモンセンターから出た後、すぐにニビシティへ向かう事にした。しかし、オーキド博士の言う通りトキワの森には迷路のように道になっておりなかなかニビシティへの通路が開けない状態にあった。

「ここ何処だ? 一体後何分でニビシティに辿り着くんか?」

「俺が知るかよ。それよりもレッド、俺達なんか見られてないか?」

「なんかつて、気のせいじゃねえの?」

嫌、気のせいではない。丁度俺達の後ろから誰かが見ている。

「レッド、一回先行つててくれ。ちよつと野暮用が出来た。」

「ん? どうしたんだよブルー、下半身の方の野暮用は早めに済ませろよ。」

「嗚呼、分かっ……下半身、何故だ?」

「お前朝からトイレ行つてないだろ。」

「そっちの野暮用じゃねえよ!」

「分かった分かった、何？大きい方？」

「違うわ！」

「ま、何にしろ早く済ませろよ。」

そう言うのとレッドは前へ歩いて行った。レッドの奴言いたいだけ言いやがって、後で覚えてろよ（怒）

「おい、後ろの木の後ろに隠れてる奴……何の用だ！」

すると、木の後ろからユミさんが出てきた。

「あれ、トイレに行きたいんじゃないかなかったですか？」

「お前もそれを言うか!？」

「違いますよ。後ろからずっと追ってきたのは知ってたからレッドを先に行かせて、誰が何の為に俺達を付けてきてたのか聞く為にアンタを呼び止めたんですよ（疲）」

「それはご苦労様ですね。私は確かに貴方達を追っていました。正確に言うと、”ブルー君を”ですけどね。」

俺を？

「5年前の事覚えてませんか？私は貴方に会ったことあるんです。」

5年前？5年前と言うと、まだ父さんがタمامシの会社で働いていた時だ。あの時は父さんの帰りが遅くて俺が毎回母さんがポケモンスクールにお迎えに来てくれた頃

だったっけ。懐かしいけど、ユミさんのよう顔……あ!?

「もしかして、引越しと同時に入れ違えでポケモンスクールに編入したサクラちゃん!?!」

「誰ですかその人!?!違いますよ。それに昔からユミという名前は変わりません!」

「え?それじゃあ昼休みになると自分より可愛い女子を転校させまくったユミさん!?!」

「それ私じゃないです!?!それにその人の名前は上級生のエリカさんです!」

「ん、それじゃあジョウトから転校してきた子、ユミさん?」

「私は生まれも育ちもカントーです! ジョウトから来たのは少し年上のミカンさんですよ! ワザとやってませんよね? 流石に怒りますよ(怒)」

「え!?!ちよつと待って、マジで分かんないんだけど。」

「ハア、それじゃあこのメガネに覚えはありますか?」

そう言つて、ユミさんは赤いメガネを付けた。あ、思い出した!?

「まさか、そんな……、」

「やつと思いましたが。」

ユミさんは安心したようにホッと一息吐いた。

「隣のクラスでマミちゃんを虐めてたユミちゃん!?!」

「反対ですよ!?!私がマミちゃん達に虐められてたんです。どんな覚え方したらそうなる

んですか!」

「そういえばそんな子いたなあ。あの泣き虫メガネって隣のクラスで言われたような無いような、まあ本人もこう言っているしユミさんの事だったんだ。そういう事にしよう。」

「そう言えば、どうして俺について来たんだよ。昔のよしみって言っても、俺ユミさんに話したこと一回もないぞ。」

「確かに私は貴方に話しかけられた事は一回もありません。でも、お礼を言いたくって!あの時マミちゃん達が私を虐めてた時、貴方が止めてくれなければ私はそのままマミちゃん達に虐められてた。だから!」

「そういう事か。」

「お礼を言わなくても、あの時俺に突つかかって来たから追い払っただけだ。別にユミさんを思って行動した訳じゃない。」

「それでも、私は嬉しかった。誰かがマミちゃん達を止めてくれた事に!」

「でも、5年前の話だろ?タمامシからマサラに引越した後は俺ポケモンスクールにも行ってないようなニートだぞ?そんな奴に5年前のたまたまユミさんを救ったからって、お礼をする程でも無いと思うぞ?」

「それでもです!マサラに引越してゲームをしまくって母親を泣かせるようなブルー

君でも私は感謝してるんですー!」

「嫌、母さんはまだ泣かせてねえよ! って、なんだかもっと疲れたような気がするな。」

「ふふ、変なの。」

「事の発端はユミさんが俺をストーキングしてたからですけどね。」

「ストーキングはしてません!?! あれ? さっきまでお礼は言わなくても良いって言ったのって、まさか照れてたんですか!?! お礼をされる事が少ないから照れたんですね。意外と可愛いところもあるんですね、ブルーさんって。」

「違うわ! 照れてないし、お礼をされる事が少なくなかない訳でもないけど!」

「面倒な言い回しですね。結局認めてるじゃないですかww」

コイツ面倒臭せえ。

「あ、そういうえばブルーさんって前までマサラタウンに住んでたんですね。お礼ついでに挨拶してこようと思います。照れ屋なブルーさんの親の目を見に♪」

「勝手にしろ、もういい。あ、そういうえばユミさんってなんで……っでもういいか。また面倒な事になりそうだな。」

そう言いながら顔では少し俺は笑っていた。

## お前らバイオンマンか

ユミさんと別れた後、レッドからポケギアに電話で「ニビシティに着いたからタケシのジムバッチは俺が先に頂く！」と言って切られたがレッドの持っているポケモンはヒトカゲしか知らないから対策をしていないと早々簡単にはジムリーダーを倒せないだろう。俺はそう考えながらニビシティに着いた。

### ポケモンセンター

中に入ると、レッドがグリーンと話していた。

「あ！やつと来たか。ただだけトイレ我慢してたんだよブルー。」

「いい加減その話題から離れるよ！それと、トイレを我慢してたんじゃない、昔の知り合いが俺をストーリーキングしてたから話してきただけだ。」

するとグリーンが馬鹿にするように笑いながら言ってきた。

「お前ストーリーキングされる程知り合いいねえだろww」

「ちゃんといたからこんなに遅くなったんだよ！」

「へえ、その人どんな人だったんだ？」

そんな事をレッドは聞いてきた。

「タマムシに住んでいた頃に少しだけ見た事のある子だけど、」

そう俺が答えると、レッドはニヤニヤ笑いながら首を縦に振っていた。なんかイラつてくるなその動作。

「成る程、つまりその人女の子なんだね。」

グリーンはレッドの言葉で何か察したのか「へえ、成る程」と言いながらニヤニヤしている。

「なんだよ2人揃って気持ち悪い。」

「それはごめんなさいね、ブルー君みたいなのモテる男では無いんで」

コイツら腰をくの字にへし折ってやろうか（怒）

「なんだよ急に、」

「お前は確かストーキングされてるって言ってたよなあ。しかも、”女子から”！」

成る程、つまりコイツらは勘違いしてるという事か。あれ？ポケギアが鳴ってる。

「ハイハイ、母さん何の用？」

『ねえブルー、嘘よね。こんな可愛い子をどうして隠してたの!?!』

「え、なんの話？」

『惚けるんじゃないやありません！家にユミさんって名前の女の子が私に向かって「ブルー君

に昔お世話になったものです。」って言われたのよ!?! どう答えれば良いか分からなかったからオレンジと今話させているけど、アンタいつの間にあんな可愛い子を”落としたのよ”」

こつちもこつちでなんか勘違いしてるし、レッドはレッドで「へえ、ユミさんねえ。」と言いながらニヤニヤしているし、取り敢えず話を終わらせてからレッドを殺ろう。

「母さん、別に俺はその子を落としてもいけないし学生時代そこまで話してないから。ただの友達ってだけだから普通に接してて、詳しい事はその子から聞けば分かると思うしもう切るよ!」

『ちよつと、ブルー!?!』

「へえ、学生時代に”そこまで話してないのに”ブルーの家まで挨拶をするなんてよつぽどの事がないと思わないか。」

「今ユミさんの名前をブルーのお母さん言ってたよね、つまりそういう事? ww」

「んな訳ねえだろ、勝手に飛躍すんなアホ帽子と馬鹿成り上がり野郎!」

「誰がアホ帽子だ!」誰が馬鹿成り上がり野郎だ!」

頭の偏差値が低い奴らに詳しい事を説明すると「はー、」やら「ひー、」やら「ふー、」やら「へー、」やら「ほー、」やら言ってきた。お前らバイオンマンか。

「そういえば、この街のジムリーダーとはもうやったのか?」

俺がそう聞くと、グリーンとレッドは首を横に振り

「まだ誰もやってないよ、どうやら博物館にテロが起きたらしい。」

「それでタケシさんが応援に向かったんだとき。」

「へー、お前らは博物館に行かないのか？」

「興味ない。」

即答かよ。

「それじゃあ暇つぶしついでにその博物館にテロを起こした奴らを退治しようかな。」

俺がそう言うと、2人は「明日槍が降ってくる！」やら「馬鹿、風邪引いてんだよ。直ぐにポケモンセンターで休ませろ!？」とか言ってる。コイツら一回本当にしばき倒した方が良いかもな。

「もうツツコムのも面倒だから行くわ。」

そうやって俺はポケモンセンターにアホと馬鹿を残して博物館へ目指した。

ニビ博物館

博物館の前には目の細い青年が険しい顔をしていた。

「く、どうした事か。」

そう言いながら何か悩んでいるようだったが、俺は一目見ただけでなんに悩んでいるのか気付いた。何故なら青年の見える方向には男が誰でも見た事のあるかもしれない

ムフフ本の雑誌が三つあった。何故博物館にムフフ本があるのかは知らないけど、俺は見なかった事にして博物館へ正面突破した。中でテロを起こしていた奴らの衣装にはRという文字が大きく出されていた。

「む、何者だ!?!死にたくなければ直ぐに出て行け!」

「やだね。博物館は少しだけ興味あったから、テロなんか辞めて帰ってくんない?」

俺がそう言うと、テロ犯罪者は「ガキが舐めた態度を取ると痛い目合うぞ!」

と言いながら此方を睨んできた。仕方ないからフシギダネを出して、ボコボコにしようかなと考えていると、先程の博物館の前にいた青年が玄関から入ってきた。

「何してる、殺されたいのか? 相手はロケット団なんだぞ!」

「ロケット団? 何その変な名前。宇宙にでも希望抱いてるの? だったら辞めたほうがいいよ。そんな事したらほら、黒歴史しか残らないって。」

「テメエに俺の何が分かる!」と言って目の前のテロ犯はズバットを出してきた。

ドガス、だいはくはつ!

目の前にいるロケット団と名乗る謎のテロ犯は俺のフシギダネとポケモン勝負して一瞬で蹴散らした。

「お前、何者だ!？」

「名乗る程の者じゃないよ。」

「成る程、おいお前からコイツをやっちまえ!」

そうさつきポケモン勝負で倒したザコが応援を呼んできた。俺は、ニビ博物館に入ってきた青年に声をかける。

「早くここから出た方が良いでしょう。でないと、危険な目に遭うかもしれませんからね。」

「俺はこう見えてもニビシティのジムリーダーなんだ。舐めてもらっちゃあ困る。ここからは俺がロケット団を食い止めるから、勇気ある君は先に行ってもらって良いかい?」

「分かりました。」

俺は、ニビ博物館のオフィスへと移動した。すると、多くの下っ端と思えるロケット

団が迫ってきた。

「フシギダネ、ソーラービーム準備！」

実はフシギダネにソーラービームなんて覚えさせてないのだが、それを聞いた下つ端ロケット団達は後腐れもなく道を開けてくれた。そのまま進むと、裏口に繋がると思われるドアを発見した。中に入ると、さつきまでの下つ端とは違う雰囲気醸し出しているベレー帽を被ったテロ犯を見つけた。

「あらら？ 何故こんな所に子供がいるんでしょう。まさか、救援をお願いしたのですか？」

ガムテープで口を塞がれている白衣の研究者に向かってテロ犯は聞くと、白衣の研究者は首を小さく左右に振る。

「成る程、つまり貴方は私達ロケット団に向かって喧嘩を売りに来たという事ですか。困るんですよ、仕事の邪魔をしてくれると、ここは部下に模範となつて私が追い払いましょう。」

「ロケット団も大変だな、こんな口だけ上司に操られてちや近いうちに潰れるんじゃないの？」

「ふん、それだけ戯言が言えればやり甲斐のあるというものですよ！」

そう言って、テロ犯はドカースを出してきた。

「フシギダネ、いけー!」

「フシギダネ、同じどくタイプ同士なら遠慮はありませんよね。ドガス、だいばくはつ!」

「何?!」

その瞬間、ドガスはだいばくはつをして、フシギダネをノックアウトした。

「ふん、貴方のフシギダネがここに来るまで何回かバトルさせた筈です。そんなポケモンがだいばくはつで瀕死にならない訳がない。それに貴方の手持ちポケモンはまた通りだと一体しかないなさそうですね。どうしますか? 私はあともう一体ドガスを持っています。ここで降参した方が身の為ですよ。」

ちー!なんてせこい奴なんだ。これじゃあ何も出来ないじゃないか。

「お前からロケット団は何が目的なんだ?」

「ふん、まあ冥土の土産に教えてあげますよ。ロケット団は古代のポケモンを大量に捕まえてグレードアップを図ろうとしています。最も、こここの古代のポケモンだけじゃなくジョウトにも進出するつもりですけどね。」

すると、聞き覚えのある声が後ろから聞こえた。

「良いこと聞いたよロケット団。」

「誰ですか?!」

俺達の前に姿を現したのは、ジュンサーさんとアホと馬鹿のコンビだった。

「今すぐ人質を解放しなさいロケット団！もう貴方達は囲まれているのよ！」

「いつの間に！まあ良い、今日はここでおさらばしておきますよ。今のところはね！」

そう言うのと、煙幕を地面に置き声だけ残していった。

「少年、また会うことを楽しみにしていますよ。今度は勝てるの良いですね？」

アイツ、完全に俺を舐めてたな。

「おい大丈夫かブルー、まあお前が正面突破したお陰でジュンサーさん達が上手く入り込めたらしいぞ。」

そうレッドが言った後にジュンサーさんが「そうそう、」と言いながら大変おかんむりな状態で俺の前に来た。

「それより君！危ないじゃない、勝手に傷ついてないから良いものの、今度から危ない真似はしないでね！もう、ヒヤヒヤしたんだから。」

「すいません、どうしても見ときたい化石があつて、」

「見たい化石ってなんのことだブルー。」

そうグリーンが聞いてきた。

「ひみつのコハクって化石なんだけど、なんでもポケモンに復活させるとプテラになるんだとかつて話で見てみたかったんだよ。」

俺がそんな事を言うと、さつきまで捕まっていた白衣の研究者は俺の前に一つのモンスターボールを出した。

「それなら、これを持って行くと良い。これは君の見たがっていたプテラが入っている。この博物館でこのプテラだけが守れたのも、君が来てくれたお陰だ。」

「良いんですか!?! 古代のポケモンって今でも論文に出される程価値があるのに、」

「君が助けに来てくれた、それだけでもこのプテラをやるには丁度いい報酬だと思うよ。それに、化石はこの近くのオツキミ山でよく手に入るんだ。もしかすると、ハナダに行くまでにオツキミ山でロケット団が潜んでいるかもしれない。十分注意する事だよ。」

「分かりました、このプテラ大切にします。」

俺がそう言うと、グリーンが…

「いいなあ、ブルー古代のポケモンゲット出来て、俺もタケシさんとの勝負が終わったらオツキミ山でポケモンの化石を発掘しようかな。」

「当分の間は私達がオツキミ山を調査するから、発掘出来ないわよ。」

「そんな!?!」

「ざまあグリーン!」

## それぞれの歩み

〈その日の夜マサラタウンでは〉

私はユミと言います。最近ブルーという変わった方と出会いその方の実家の家に泊まっているところです。

「ユミお姉ちゃん、明日本当に出るの?」

オレンジちゃんが可愛いらしく首を傾げている、オレンジちゃんの困っている顔で聞いて来た。

「うん、やらないといけない事が」あの人」と会って増えたからね。」

「あの人ってお兄ちゃんのこと?」

「うん、そうだよ。」

「ねえ、私にも教えてよ。」やらないといけない事」って何?」

「聞きたい?」

「うん、聞きたい!」

「それじゃあ、ちよつとだけ教えてあげる。」

「全部じゃないの?」

「ごめんね、話が長くなるからまた来た時続きを話すから、」

「分かった。それまでオレンジ我慢するから、ちよつとだけでも教えて！」

「そんな焦らないの♪」

私はゆつくりとオレンジちゃんに話し始めた。

「最近知った事なんだけど、オレンジちゃんのお兄ちゃんブルー君はちよつと前にポケモンの卵を拾ったらしいの。」

「ポケモンの卵？」

「そう、ポケモンの卵。実は私実家がここの近くにある育て屋さんなんだ。」

「オレンジ、育て屋さん見たことある。確か、トキワシテイを抜けた辺りにアマネお婆ちゃんがいるところー！」

「実は私、そのアマネお婆ちゃんのお孫さんなの。」

「そうなんだ!? でもお婆ちゃんはユミお姉ちゃんの話はしないよ?」

「うん、私とお婆ちゃん今喧嘩しててさ。実は私家から飛び出して来たの。」

「え!? でもだつたらどうやってお兄ちゃんと出会ったの?」

「たまたま従兄弟がタマムシに住んでてさ、少しの間住まわしてもらったんだ。着くまでに歩いて行ったから大変だつたんだけどね。」

「へえ、でもその話とポケモンの卵の話はどう関わるの?」

「実は、……………」

「一方その頃、ニビシティでは」

ニビ博物館での時間も終わり、俺とレッドとグリーンはニビジムへ挑む事にした。中に入ると、サンングラスを掛けたオッサンが声をかけて来た。

「オッス、未来のチャンピオン！ここはニビジムだ。ジムリーダーは岩のタケシと言われている。苦手なタイプは対策済みか？因みにタケシさんの都合で1日に1人しかチャレンジャーは対戦できない。誰が行くか予約制だからな。」

予約制？

「予約制って前までそうじゃなかった筈だろ？なんで今は予約制で一日にチャレンジャーが1人しか出れねえんだよ！」

グリーンも納得していない様子で話している。

「嫌、ここ最近事件があつてジュンサーさんにロケット団の調査の協力をお願いされタケシさんは請け負ったんだ。それでジムを再開する時間がなくてな。そこでジムリーダータケシが予約制に設定し直したわけだ。此方も仕事上チャレンジャーを迎えたい気持ちもあるが、ニビ博物館の化石を取り戻すためにも此処は少し大人しく我慢してく

れ。」

「そっか、仕方ない。今日は予約して帰るかグリーン。」

「俺が先だからな！」

「どっちでも良いよ。俺は少し用が出来たから予約の順番は最後で構わない。」

俺がそう言うのと2人はニヤニヤして聞いて来た。

「また例の子絡みか？」

「そりゃあ俺達も蚊帳の外でしょうね。」

コイツらは後でポコポコにしよう。

「違うわ、ちよつと前にトキワシテイのポケモンセンターでポケモンの卵を預けていてな。もう少しで生まれそうだって情報が来たんだよ。」

「じゃあ予約まで時間あるから何が産まれるか見に行こうかな。」

そうレッドが面白そうな物を見つけた様な目で言ってきた。

「俺はパス、誰よりも先にチャンピオンになってお前らを頂上から見なきやいけないからな。」

相変わらずグリーンはブレないな。一応俺に負けという名の烙印を押されてんのに、後でオーキド博士に連絡してグリーンにをポコポコにして良いか許可を貰おう。

「よし、これで予約は完了。そののグリーンの兄ちゃんは明後日だ、どんなバトルをする

か期待して待つてるよ。」

「ふん、絶対的な勝利って奴を見せつけてやる。」

俺とレッドはグリーンの意気込みを流してトキワシテイへ向かった。

〈翌日の朝、マサラタウンでは〉

「おはようユミちゃん。また”バカ”にあつたら偶には家に帰って来いと連絡しといて。」

「叔母さんが電話で言えば良いのでは？」

「あの子の前だと本心では言えないもんなのよ。ほんと、なんでこんなに親って大変なんだらうね。」

「さあ、それじゃあオレンジちゃんもまたね。」

「うん！またあの話の続きをしてねユミお姉ちゃん！」

「うん、また今度来た時にね。」

「またね〜！」

さあ、やり残した事を片付けるため久々にあの人のところへ寄ろうかな。いつかまた、何処かで会いましょうね。それぞれの歩みを止めない程度にね☑

〈オツキミ山では〉

『ランス、状況はどうだ？』

「はい、順調に進んでおります。」

『それにしても珍しいな。最近良い事でもあったか？』

「いえいえ、面白い少年と遭遇しただけです。まあ、私の手にかかればどうという事はありませんでしたけど、古代のポケモンと一緒に、良い魚も釣れた様です。」

それただのカビゴンだよ!?

〈トキワシテイ〉

俺はレッドとトキワシテイのポケモンセンターに着くとすぐポケモンの卵の確認をした。

「ジョーイさん、卵は今どんな感じですか?」

「そろそろ産まれてくると思うけど、この子もしかしたら物凄いマツタリさんかもしれないわね。」

俺の質問にジョーイさんは笑顔でそう答えた。

「この卵、そろそろ産まれて来ると聞いたけどまだらしいなブルー。」

「まあそうだろうとは思ったよ。」

ジョーイさんは「そうそう」と言いながら俺達に話しかけて来た。

「ニビシテイの博物館で事件が起こったって聞いたけど2人とも大丈夫だった?」

「それが、……」

レッドは俺に気を使ったのか事情を説明しようとしているが、俺はレッドを遮る様に答えた。

「実はロケット団と衝突して化石を博物館の化石をほとんど盗まれたんです。」

「まあ、それは大変だったわね。」

「まあお陰で新しいポケモンをゲット出来たんですけどね。」

「それは、どういう事？」

俺は博物館で起きた事を全てジョーイさんに話した。

「へえ、でも良かったわね。プテラをゲット出来る事はなかなかないと思うわ。」

「はい、このポケモンはこれからも大事にするつもりです。」

「さあ、仕事に戻るとするわ。2人ともポケモンの回復させますか？」

「勿論」

その日の夜

「早く産まれないかな、」

レッドがベットの上でそう呟いていた。

「そう急かさなくても卵は逃げないけどな。」

「お前は良く待っていられるよな。普通ならポケモンが産まれる瞬間なんて一生に一度見られるかどうか怪しいって言われてるんだぜ。」

「それでもないよ、俺だって早く産まれるポケモンを見たいと思ってる。ただ、昼間もジョーイさんが言った様にすごくマツタリな性格のポケモンなんだよ。」

「ふーん、なんかお前変わったな。」

「急にどうした？お世辞なら良いぞ？」

「お世辞じゃねえよ、ただつい最近まであれだけポケモントレーナーになろうと思わなかった奴が今ポケモントレーナーとして旅立ってるじゃねえか。それに、最近ブルーは非常識的なポケモントレーナー生活を送ってるし少し羨ましいって思っただけだよ。」

「まあ、プテラを貰う事ってなかなかないしな。そういえばレッドはニビジム戦でどんなポケモンを出すんだ？まさかヒトカゲ一体だけって事はないんだろ？」

俺がそう聞くと、レッドは人差し指を鼻に擦りながら答えた。

「よくぞ聞いてくれた。実は最近ニドラン♀とピカチュウ、ポッポ、マンキーを捕まえたんだ。ジム戦ではにどげりを覚えているニドラン♀と格闘タイプのマンキーを出そうと考えている。」

「へえ、レッドもそんな対策を立ててるんだな。」

「俺も」って事はブルーもか？」

「今のところはな。一応フシギダネがいるけど、戦力としては乏しいからな。プテラはひこうタイプが入ってるから今回はお休みして違うポケモンをゲットしようと考えている。」

「ま、ジム戦はそんな簡単に勝てないから面白いって言われるらしいけど、8つ全てのジ

ムバッチをゲットした後、チャンピオンになった後ブルーはどうするんだ?」

「俺?俺は、取り敢えずポケモン図鑑を埋めようかなって考えている。」

「へえ、そりやあ大した事で。」

「レッドはチャンピオンになったらその後どうするんだ?」

「最強になる為強いポケモンを探そうかな。捕獲出来たら嬉しいし、旅の途中に持つてるポケモンを強化するつもりでもあるからチャンピオンなった後も俺の予定表はやる事でいっぱいだよ。」

「そっか、そろそろ明日のポケモンの卵から何が産まれるか気になるからもう寝るわ。」

「おやすみ。」

「嗚呼、おやすみ。」

俺達は電気を消して寝る事にした。

〈数時間後〉

なんかトイレ行きたくなくなったので、俺は一旦部屋から出た。すると、ポケモンの卵が管理されてる方から光が差していた。気になった俺はまたポケモンの卵が管理されている部屋に行くと、卵の表面には既にヒビが割れていた。慌てて俺はジョーイさん呼びに行つた。

「それは本当なのブルー君。」

「はい、あ!?アレは……。」

俺が目にしたのは、卵から孵ったコダックだった。

「まあ、こんな時間に卵から孵るなんて思った以上にマツタリさんだったのね貴方。」

そう言いながらジョーイさんはコダックの体を台車に乗せて移動した。

「少し待ってて、産まれたてのポケモンは凄く食欲があるの。ブルー君も見てみる?」

俺はジョーイさんに「はい、」と言い、産まれたてのコダックを見る事にした。

「コダツッ!コダツッ!」

ジョーイさんが言った通り産まれたてのコダックは物凄い勢いでキノミをパクパクと口に突っ込んでいった。

「凄い勢いで減っていくな。」

「普段はマツタリさんなんだろうけど、多分食事の事に関したらせつかちさんになるのかもね。」

それただのカビゴンだよ!?

「うふふ、この子食べっぷりがとても良いからキノミをお昼に収穫した甲斐があつたわ。あ!そうだね、ねえブルー君。良かったらこのコダック貰わない?」

「え!?良いんですか?」

「ええ、卵を見つけたの貴方だしね。」

それから俺はコダックをモンスターボールに入れるのに手間取った事はまた別の話。

## コダツクの馬鹿ヤロー！

## 次の日の朝

「うーん、よく寝たく。あれ？ブルー、まだ寝てんのか？ああ加減起きろ。朝だぞー！」

辞めろレッド、俺は今コダツクのお陰で寝不足なんだ。何故コダツク所為かって言う  
と、アイツモンスターボールから何度も勝手に出てメツチャうるさいイビキをかく事で  
俺の睡眠を邪魔しやがった。お陰で朝まで寝れなくてこのざまだよ。コダツクの馬鹿  
ヤロー！

「あれ？何でこんな所にポケモンがいるんだ？」

俺は昨日の夜に何があつたのかベットに横になりながらレッドに言った。

「へえ、それでブルーはまだ眠たいのか。それにしても、卵から孵ったポケモンがコダツクとはな、もうちよつと珍しいポケモンが出てくるかと期待したんだがな。」

勝手に期待してる癖に何て言い草だよコイツ、まあ俺も実は少しだけコダツクじゃなくて違うポケモンを見たかったが生まれてくる遅さにゴンベかと思っていた。ほんとコダツクが卵から孵ったのは予想外だった。

「仕方ない、どうせこのコダツクは朝ご飯をしつかり食べさせないといけないし起きる

か。」

「でも丁度良いんじゃないか? ニビシティのジムリーダーは岩タイプの使い手、みずタイプのコダツクには相性抜群じゃないか。」

「旅の間にトレナーの生活を支障をきたすポケモンがいてたまるか!」

俺がそんな事を大きく言うのと、コダツクが頭を抱えながら起きた。

「コダツク!」

そうコダツクはしゃべると部屋中にねんりきを使って色々なものが浮き上がった。浮き上がった俺のバッグからモモンのみだけを取り大きな口でモモンのみを食べる。コイツ仮にも卵の時から俺が見つけてやったのに随分と勝手に俺のバッグから平然とキノミを取って食うなコイツ。

「ブルー、朝ご飯食いにいくぞ。」

「え? 嗚呼、先言つてくれ。俺も後で行く。」

「分かった、遅れんなよ」とレッドは言うのと、ポケモンセンターの食堂へと向かった。

「コダツク、このままじゃ困るから今度出来るだけモンスターボールの中で生活してくれよ。じゃないと、朝飯と昼飯と夕飯を全て抜きにするからな。」

俺がそうコダツクに忠告すると、コダツクは「コダツク!」と声を出した。コイツには出来るだけ外に出さないようにしましょう。

〈数時間後〉

俺とレッドはポケモンセンターで朝食を終えた後、お互いのポケモンとバトルさせる事にした。

「おいブルー、俺のデビュー戦に勝った事後悔させてやる！」

「は！ヒトカゲを一撃で倒された奴が何を言うんだ。」

今回は対タケシ戦に向けたポケモンバトルだ。お互いタケシに出すポケモンを2体ずつ選んで2vs2のシングル勝負をする事にした。

「行くぞ！ニドラン♀特訓の成果を見せてやれ。」

「フシギダネ、今回も頼む！」

俺とレッドはそれぞれのポケモンを出しバトルが始まった。

「ニドラン♀、フシギダネの周りを走って様子を見る！」

「フシギダネ、ニドラン♀に向けて連続でやどりぎのタネだ！」

「ニドラン♀、周りの地形を使ってやどりぎのタネをうまく交わすんだ！」

ニドラン♀はレッドの言う通り、周りの岩や木を使ってやどりぎのタネを次々と交わした。

「今だニドラン♀、にどげりをかませ！」

「ニドラー！」

ニドランはフシギダネの後ろに周りにどげりを使ってフシギダネを後ろ足で吹っ飛ばした。

「ダネ!？」

フシギダネは近くの岩に吹っ飛び顔から突っ込んだ。

「大丈夫かフシギダネ!」

俺が心配すると、フシギダネは「ダネダネ!」と言いながら立ち上がった。

「フシギダネ、もう一度やどりぎのタネだ!」

「無駄無駄!ニドラン♀、どくばりを連続で飛ばしてやどりぎのタネを遮るんだ!」

「ダネ!」 「ニド!」

フシギダネとニドラン♀の攻防は激しかったが、どくばりで撃ち落としたやどりぎのタネが根を伸ばしニドラン♀の足に絡まった。

「ニド!」

「不味い!?これじゃあフシギダネが回復する。ニドラン♀、ひっかくでやどりぎのタネの根を切り落とせ!」

「させるか!フシギダネ、たいあたり!」

「フツシャー!」

フシギダネのたいあたりがニドラン♀の身体に急所に当たり、ニドラン♀はどうとう

瀕死となった。

「くそ、戻れニドラン♀よく頑張ってくれた。次はお前だ、マンキー！」

「ンキー！」

「フシギダネ戻れ。行け、コダック！」

「コダツ、ク!?コダー！」

コダックはモンスターボールから出てくるが、着地に失敗し体を地面に擦らせた。それを見たマンキーは両手を大げさに広げ「ンキー！ンキー！」とコダックを馬鹿にしていた。それも理解出来ない様子でコダックは頭を抱えながら立ち上がる。

「マンキーひっかくだ！」

「ンキー！」

「コダック、マンキーをねんりきで空に浮かばせるんだ！」

「コダツ！」

先に動いたのはなんとコダックだった。

「何!?!」

「いぞコダック、そのままみずてつぽうをマンキーに浴びせてやれ！」

「コダー！」

コダックはねんりきでマンキーを浮かばせながらみずてつぽうを飛ばし、器用に技を

使い分けている。

「コダック、みずてつぼうを辞めてねんりきでそのまま真下へマンキーを落とせ！」  
「コダック！」

コダックはしやがみながら頭を抱えて俺の言う通りマンキーを勢い良く地面へと叩きつけた。マンキーは流石に耐えきれなかったのか目を回していた。

あら？頭はマンキー並みじゃなかったのね

ブルー達がトキワシティに出発する頃

ニビジム

タケシサイド

「良いところまで行ったがまだまだ努力が足りなかったな少年。」

「くそ、俺はこんな所で負けていられないんだ！」　ダッ

グリーンというチャレンジャーは出口に向けて突っ走って出て行った。さっきのグリーンというチャレンジャーはどうして焦っているんだ？何を求めて強くなろうとしている。それが明確に自分で何が足りないのか理解しないと、グリーン君……君は強くなれないよ。

次の朝

ブルーサイド

トキワシティ近隣の草むら

「コダック、みずてっぽうだ！」

「コダー!」

今俺達はニビジムのタケシ戦に向けて特訓をしている。レッドはジムの予約が近くなったからと言い先にニビシテイへ戻った。今俺達がしているのは、野生のポケモンとひたすらバトルをしているところだ。

「休憩だコダック、ポケモンフーズ買うか?」

「コダック!」

コダックはポケモンフーズを皿に乗せて足元に置くと、凄い速さで完食した。

「コダック! (お代わり!)」

「お!?バトルの続きか? 良いぞ、今度はもつとみずてつぼうの威力を上げて違うみずタイプの技を習得するぞ!」

「コダー!コダック!コダック! (んな事言ってねえよクソ野郎! 頭の中に脳みそ詰まってんのかこのタコ!)」

「よし、この修行が終わったらいつもの4倍多くポケモンフーズ出してやるよ。」

「コダー! (流石ご主人様、太っ腹!)」

「ダネ、(変わり身早いなおい、)」

そんな会話?をしていると、早速草むらが揺れ始めた。

「コダック、あそこにいるポケモンにみずてつぼう!」

「コダツ！」

「ダネー！」

「え、フシギダネ？」

草むらから出てきたポケモンはフシギダネだった。

「ちよつと、私のフシギダネに何すんのよ！」

そんな声が奥から聞こえてきた。よく見ると、白いフードを被った同じ年頃の女の子だった。

「すまない、急にコダツクがみずてつぼうをしたいつて言うからさ。」

「コダツ！コダツ！（勝手にポケモンのせいにすんじゃねえよ！やつぱりコイツ頭おかしいんじゃねえのー！）」

「貴方がコダツクにみずてつぼうを司令してたのは聞こえてるのよ、言い訳はいいから謝って！」

「すみません、おたくのフシギダネさん。コダツクと俺を許してやって下さい。」

「ふふ、変わった人ね貴方。名前はなんて言うの？」

「俺の名前はブルー、君は？」

「私はリーフ、このフシギダネはオーキド研究所で選んだの。そこにいるフシギダネは君の？」

「うん、まあね。」

「へえ、じゃあ貴方が例の問題児?」

「何のことだよ。」

「オーキド博士から前ここから旅に出たこの中で私と同じフシギダネを選んだ人がとても面倒で頭が腐つてて問題児だって聞いたわよ。」

「頭は腐つてねえよ!」

「コダツ! (嫌、腐ってる。)」

「まあ、どんな人かなくて思ったらあまり想像した人とは違ってたわ。何て言うか、期待外れね。」

「テメエが勝手に期待したんだろぅが!」

「はあ、じゃあ俺とコダツクは修行に戻るか。いくぞコダツク、」

「コダツ! (テメエ後で覚えとけよ!)」

「変わった人達だったねフシギダネ。」

「ダネ、(全くだ。)」

その日俺とコダツクは次々と野生のポケモンを倒していつて、とうとうコダツクに勝てる野生のポケモンは周りにはいないようだった。

ポケモンセンター

「ほら、いつもの4倍付けたぞ、ちゃんと残さず食べるよ。」

「コダツ！（これは全部俺のものだ！）」

「……………」

隣にいるフシギダネとプテラはコダツクの食べるスピードが早すぎて唾然としていた。

「さつきぶりだねブルー君。」

そう話しかけてきたのはリーフだった。

「何の用だよリーフ、」

「何？その態度、せつかく君にオレンのみをおすそ分けしようと思ったのに要らないんなら帰るわ。」

俺はそんな言葉を聞いた瞬間左手にゴマを擦りながらリーフに駆け寄る。

「嫌、すいませんリーフさん。せつかくなのでそのオレンのみは貰っていいでしょうか？」

「やけに変わり身早いわね。ふーん、やっぱり気が変わったわ。明日の朝勝負しましよ、貴方が勝ったらこのオレンのみ全部貰って良いわよ。」

「よっしゃー！って言いたいところだけど俺が負けたら何があるんだ？」

俺がそう答えると、リーフは驚いた顔をした。

「あら?頭はマンキー並みではなかったのね。腐つてると聞いたらてつきり脳まで腐つてると思つてたわ。」

張り倒すぞテメエ!

「もし私が勝つたら、何でも言う事聞いて。」

「嫌だ。交渉決裂だ、早くガキは部屋へ戻つて寝てろ。」

「何よその言い方!明日の朝掛け無しで勝負しなさい!」

リーフは頭突きをしながら俺にそんな事を言つてきた。

「イツタ!?何すんだよお前、暴力反対!」

「良いから、バトルするの?しないの?」

リーフはそう言いながら次は俺の襟を両手で掴み聞いてきた。この公開側から見ると、ただの喧嘩してる馬鹿かはた迷惑なカップルだよ。

「分かつた分かつた、バトルしてやるから襟を離してください。」

「ふん、なら決まりね。明日の朝貴方をボコボコにしてやるわ!精々足掻いて見る事ね。」

「精々?コイツ見た目暴力女だけでもしかしてグリーンと似てる?」

「何じつと見てんのよ。気持ち悪いわね。」

リーフはそう言っていない胸を庇うように両手をクロスして守っている。

「誰がそんな貧相な体を好きで見えるか！罰ゲームじゃねえんだから。」

「ちよつと、今のどう言う意味よ!?!」

俺はマンキーから生ゴミにフォルムチェンジしたのか？

翌日

朝から起きると、ドアの前には当然のようにリーフが立っていた。

「何の用だ？」

「何惚けてんのよ、今日は朝からバトルするのよ。昨日の草むらで待つてるからー」

そんな事を言ってるリーフは玄関の方へと歩いて行った。俺はコダツクの食欲が腹8分目に調節して朝ご飯のポケモンフーズを出してお昼まで近くの草むらでゴロゴロと日向ぼっこをして過ごした。すると、俺の顔を靴底で踏んづける馬鹿者が1人現れた。

「おい、今すぐその足をどけろ。さもなければバトルの約束を破る事になるぞ。」

俺がそう言うのと、顔を踏んづける足をリーフは退けてくれた。俺がまた目をつぶった瞬間顔面に多大なる痛みが走った。

「ポニータ、後10回くらいその脳味噌の腐ったマンキー、嫌生ゴミにふみつけをして頂戴。」

俺は次の瞬間立ち上がりジャンピンググ土下座をリーフの前で行いポニータのふみつ

けを回避した。

「すみません、飯食ってたら約束忘れてました。後なんださっきの言い方、俺はマンキーから生ゴミにフォルムチェンジしたのか？」

「いいえ、そうなったらヤブクロンに申し訳ないもの。貴方は“生ゴミ”よりも各下のもはや生物ではない何かよ。それと、反省の色を出すなら、」

「そう言いながらリーフの手には木刀が握られていた。これ、やばいパターンや！  
「まずはごめんなさいからでしょ！」

「そう言いながらリーフは俺の頭に向けて木刀を上から下に勢い良く下ろす。俺は間一髪で、真剣白刃取りを行った。」

「やるじゃない、そのくらいの危機察知能力があるなら約束なんて忘れないんじゃないの？（怒）」

「あのすいません、今言う事じゃないんだけどトイレ行ってきて良い？」

「何行ってるの？約束破ってる生ゴミが口答えするなんて良い度胸じゃない。」  
「もう俺生ゴミなのね。」

そんな会話をしていたら、急に木刀を握る力が落ちた。リーフは許してはいないだろうが、木刀では意味がないと思ったのだろう。

「それじゃあ早速ポケモンバトルやりましょうか。」

「あの、リーフさん？俺トイレ行きたいんだけど。」

「ポケモンバトル。」

「嫌、トイ……」

「ポケモンバトル。」

「あの、リー……。」

「ポケモンバトル、やりましょ。」

怖！目が笑っていないのに口の広角上げるなよ、てつきり漏らすところだったろうが。かくして俺とリーフのポケモンバトルが始まった。

「ルールは簡単、貴方の一番強いと思うポケモンを出しなさい。」

「あの、忘れてた事謝るから機嫌直し……、」

「生ゴミがポケモンバトルに勝ったら考えてあげても良いですよ。」

つまり負ける気は無いのね貴方。

「分かったよ。行け、フシギダネ！」

「ダネ！」

「フシギダネ、手加減は無用よ。」

「ダネ！」

「結局リーフもフシギダネかよ。」

「喋っていて良いのかしら？ フシギダネ、くさむすび！」

リーフのフシギダネは俺のフシギダネに向けて草を操って転ばせた。

「くそ、先手を取られた。フシギダネ、あのフシギダネに向かつてやどりぎのタネ！」

「ダネ！」

俺のフシギダネは立ち上がり背中中の蕾からタネをリーフのフシギダネに飛ばした。

「フシギダネ、タネマシンガンをしながら後ろに下がりにさい。」

「ダネ！」

リーフのフシギダネは後ろにジャンプしながらやどりぎのタネを回避してタネマシンガンを打ってきた。俺はフシギダネにつるのむちを命令し、タネマシンガンを全てはたき落とさせた。

「フシギダネ、太陽の光が一番当たる所で待機！」

まさか、ソーラービームでも打ってくるのか？

「フシギダネ、リーフのフシギダネが止まった瞬間にやどりぎのタネ！」

「ダネ！」

「そんなの無駄よ！」

リーフのフシギダネはそのまま光を浴びながらやどりぎのタネを体に巻きつけた。

「フシギダネ、ソーラービームを放ちなさい！」

「フツシャー！！」

リーフのフシギダネがソーラービームを放った瞬間俺のフシギダネからソーラービームは左へ逸れた。それどころかソーラービームを途中で中断した。

「フシギダネ!?!ちよつと、どう言う事よ!！」

「フシギダネ、連続でリーフのフシギダネにつるのむちを当てろ!！」

「ダネ!！」

リーフのフシギダネは連続で両頬につるのむちで交互に叩かれ膝をついた。

「今だフシギダネ、たいあたり!！」

「ダネ!！」

「フシギダネ!?!気をしっかりして、くさむすび!！」

しかし、リーフが命令した頃には俺のフシギダネがリーフのフシギダネを吹っ飛ばした。しかし、リーフのフシギダネはそれでも立ち上がった様だ。ただだけタフなんだよあのフシギダネ。

「フシギダネ、よく耐えたわ。タネマシン……!！」

リーフが言い終わる前にリーフのフシギダネは倒れてしまった。やはりさっきので立てたのは無理をしていたからだだったのか。

「俺の勝ちだな。良くやったフシギダネ、これからもよろしく頼むぞ!！」

「ダネ！（任せろ！）」

「どうして！」

「何が？」

「どうしてあの時私のフシギダネはソーラービームを当たらなかつたの！あの時貴方のフシギダネに当たっていれば勝敗は！」

「無理だよ、」

俺がリーフにそう言うと、「なんでよ！」と言ってきた。当然だ、唯一の勝率を無くす可能性が否定されるのだから。

「何故あの時俺がフシギダネにやどりぎのタネを命令したかって言うと、もしフシギダネが急所に当たってもいまひとつだった筈だ。」

「それなら貴方の命令したつるのむちだつて！」

「覚えてないのか？やどりぎのタネは毎回相手の体力を奪うんだ。どれだけダメージが低くてもリーフのフシギダネはもうその時点で体力が尽きていた筈だ。今回リーフが俺に負けた敗因はソーラービームに頼りすぎて後の事を考えてなかつた所だな。」

「じゃあなんで私のフシギダネのソーラービームが貴方のフシギダネに当たらなかつたのよ！それに途中で中断したのも…、」

リーフは涙目になりながらも怒鳴りながら聞いてきた。俺はリーフの言葉を遮るよ

うに答えた。

「簡単な事さ、俺のフシギダネがやどりぎのタネでリーフのフシギダネを絡ませた場所の一部に蕾が入っていた筈だ。」

「まさか、」

「そのまさかだ、たまたまやどりぎのタネに当たりソーラービームの軌道が変わってフシギダネの放った体勢では維持できなくなったんだ。」

リーフは目の前が真っ暗になりポケモンセンターへ走っていった。

モモンソーダ売ってない自販機なんて自販機じゃないわ。

俺はリーフとのポケモンバトルの後ポケモンセンターに行き御手洗いを済ませた後、その日はトキワシティのポケモンセンターで止まる事にした。

「なんか周りからの視線が痛いのは何故だろう?」

「誰かさんが私を半泣きさせたのを誰かから見られて広まったんじゃないの?」

そう言いながらジト目で俺を睨みながら夕食をリーフが持ってきた。

「そもそもあれはリーフが俺にポケモンバトルを吹っかけて来たから返り討ちに俺がしただけの話だろうが。」

「喧嘩を売ったような言い方しないで、それにあの時は私でも異常だっと思って思える程怒らせた原因はブルー君だっけ事分かってるの?」

まだ根に持ってたのね。

「すみません、そろそろ許してくれると嬉しいですよ。」

「さあ、どうしようかしら。向こうのモモンソーダ奢ってくれるならいいけど。」

リーフはニヤニヤしながら販売機の方に顔を向けてそんな事を言ってきた。

「じゃあ一生許さなくて良いよ。」

俺はそう言うのと、リーフは「あ、そう。」と言ってまたジト目で俺を睨んできた。

「ブルー君は明日どうするの?」

「俺の予定を聞いて何を考えてるかは知らんが、俺から言えるのはニビシテイへ向かうとだけ言っておく。」

「ふーん、そうなんだ。」

俺はポケモンセンターの炊事場を後にして2Fの男湯の湯船に浸かることにした。いつも思うが、ポケモンセンター便利過ぎないか?俺は湯船に3時間浸かり少し湯冷めした状態で自動販売機を向かってジュースを飲む事にした。向かってる途中でリーフが自動販売機の前で嫌そうな顔をしていた。

「あら?こんな所で奇遇ね、もしかしてモモンソーダ買ってくれる気になった?」

「悪いがそんな事思っていない。ただ単純にジュース買いに来ただけだ。それより買わないならそこどいてくれるか?」

「この自販機選べるもの少ないわよ。癒しのオレンジジュースやモモンソーダがないんだから買えるものと言ったらキー茶くらいしか無いわよ。」

「まじかよ、マサラでもオレンジジュース売られてるのに……。ここには大人用でも飲めない失敗作と思える色々なブランドをごちゃ混ぜしたグロイMIXジュースしかない

のかよ。」

「我慢してキー茶でも買つとけば？モモンソーダも売ってない自販機なんて自販機じゃないわ。」

「それ全国のモモンソーダを売ってない自販機への冒涇だぞ。」

「何よそれ、前から思ってたけどブルー君ってやっぱりかなりの変人だね。」

「約束破ったくらいでポニータにふみつけを人間に使わせるリーフが人の事言えると思ってるのか？」

「思ってるわよ、生ゴミ以下の存在よりはまだ人間の方がマシでしょ。」

「そういえば俺人間じゃなくて生ゴミだったけ？」

「もういいや、キー茶でも飲もう。あ、間違つて多くお金を入れてしまった。仕方ないから一つなんでも好きなもの選んで良いぞ。」

「その分かりやすい棒読み。まあいいわ、モモンソーダじゃないけど今日の件は許してあげる。」

「やけに上からだな。」

「だって貴方より年上ですもの。」

ん？

「今なんて言った？」

「分かりやすい棒読み？」

「その後！」

「だって貴方より年上ですものだけど、」

「嘘つけ！見た目俺より年下じゃねえか。まだ俺の昔の知り合いの方が体の成長……ぶ  
！」

リーフは俺が言う前に俺の股間を思い切り蹴ってきた。

「それ以上言うんじゃないわよ！もう、せつかくいい感じだったのに最悪じゃない。」

「デメエ、覚えてろ！」

俺はその場で蹲り悶えながらラッキーマシンが来るまで瀕死の状態だった。

翌朝

たく、アイツのお陰で寝ることさえ不可能な程の痛みだったから次会った時は絶対復讐してやる！俺はそう思いながらニビシティへ向かった。ニビジムでの予約は丁度今日のお昼だ。お昼までにニビシティにつけば何ら問題は無い。そう思ったのもつかの間、草むらからガーディが出てきた。

「そのの貴方、止まりなさい。つてあら？ニビ博物館にいた少年じゃない。どうしたのこんな所で、」

そんな事を聞いてきたのはジュンサーさんだった。

「ニビシテイのジムが予約制になったので時間をトキワシテイで持て囃していただけですよ。それよりもこんな所でジュンサーさんはどうしたんですか？」

「実は、ここだけの話ロケット団の服を着た何者かがこの道を通りかかったようなのよ。そこで、一応パトロールをしているの。全く、ニビ博物館の次は何をしようってんだから分かんない奴等だわ。この先のニビシテイの方にもまだロケット団がいるかもしれない。気をつけてね、」

「分かりました。忠告ありがとうございます。それでは、」

俺はジュンサーさんを後にしてニビシテイに着いた。早速ニビジムへ向かう事にした。

## ニビジム

「ようこそ未来のチャンピオン！予約制で少し不満を持ったかもしれないがタケシさんは約束通り奥の方で待っているぞ！苦手なタイプで攻めても鉄壁のタケシさんを見事に打ち勝ったチャレンジャーが来たぞ。君もそのチャレンジャーに負けないよう見事なバトルを期待している。」

前のサンングラスを掛けた人が言い終わると、俺は扉の奥にいるタケシのいる部屋へ向かった。

生きてる中で初めてどうでも良い経験をしたよ。

奥の部屋に待っていたジムリーダーはビックリした顔を向けて来た。

「ブルーとは君だったか、勇気ある少年。」

「少年って言うてる割にはジムリーダーもあんま年変わらないんじゃないんですか？」

「まあそうだな。今回はそんな事を話す事でここに来たわけじゃないんだろ？ここに  
来るチャレンジャーは皆強く俺を成長させてくれるが、君がここに来るまでどれだけ特  
訓して来たのか見せてくれ！」

「言われなくてもな、行くぞコダック！」

「コダ！」

「イシツブテ、出番だ！」

「イッシ！」

「先手必勝だ！コダック、みずてっぼう！」

「コダ！」

「イシツブテ、ころがるでみずてっぼうを受け流すんだ！」

「イッシ！」

イシツブテはタケシの言った通りコダツクのみずてっぼうをころがるで受け流している。なんて技術なんだ、こんなの発想したことない！

「今度はこっちからだイシツブテ、そのままころがる！」

「コダ！」

イシツブテのころがるはコダツクに四方八方へと移動して、回転しながら攻撃している。このままだとコダツクの体力が持たない、そうだ！

「コダツク、ねんりきでイシツブテを持ち上げるんだ！」

「コダ！」

「何!?!」

「そのままフィールドにみずてっぼうをぶち撒ける！」

「まさか、」

「そのまさかだよタケシさん、今あるのはいわタイプならではの岩のあるフィールドだ、そこに水溜りでもあればころがるはみずてっぼうで作られた水溜りの泥で動けなくなるだろ！」

「なかなか面白い発想をしているな、ブルー君だったか、その名前は覚えておこう。だが、負けるつもりはない！イシツブテ、水溜りのフィールドにがんせきふうじでフィールドから水溜りを無くすんだ！」

「させるかよ！コダック、ねんりきで水溜りに向かってイシツブテを飛ばせ！」

「コダ！」

すると、イシツブテの体が水溜りに勢いよく飛ばされ泥からイシツブテの腕がはまり動けなくさせた。

「イッシー！イッシー！」

「何?!イシツブテ、早くそこから出るんだ！」

「もう遅いよタケシさん。コダック、イシツブテに向かつて最大火力のみずてっぽうをぶちかませ！」

「コッダーーーーーー！」

コダックのみずてっぽうは腕が埋まっているイシツブテを壁にまで叩きつけた。

「イシツブテ、よく頑張ったな。行け、イワーク！」

ジムリーダータケシが次に出したのは巨大な岩蛇ポケモンだった。

「このイワークは通常よりもでかくて昔から愛用しているんだ。そう簡単に勝ちを譲ってくれないぞ！」

そう良いながらタケシはシャツを脱ぎ上半身裸の状態で胸の前に両手をクロスさせている。

「そんなの、言われなくても分かってますよ！コダック、みずてっぽう！」

「コダ！」

しかしコダックの口からはみずてつぼうが出なかった。

「な!?!」

「さっきのみずてつぼうでPPが尽きたんだろう。当然だ、なにせいしつブテを倒す程の威力なんだ。そう簡単に何度も打てるはずがない。イワーク、しめつける攻撃だ!」

「イワーク!」

イワークは秒もかからずにコダックを体で締め付ける。

「コダ!コダ!」

「コダック、目の前のイワークに向けてみずあそびだ!」

「させるか!イワーク、そのままフィールドにコダックを叩きつけろ!」

「イワーク!」

そのままイワークにコダックは叩きつけられ瀕死になった。

「コダック、ありがとな。大将の出番だフシギダネ!」

「フツシャー!」

「セオリー通りにいくと良いな。」

「いくんじゃなくていさせるんですよ!フシギダネ、やどりぎのタネ!」

「ダネ!」

「イワーク、しめつけるでタネを飛ばさせるな！」

「イワー！」

しかし、イワークはフシギダネのやどりぎのタネに捕まり水溜りのステージで尻尾が水溜りにはまった。これはチャンスだ！

「フシギダネ、連続でつるのむちだ！」

「ダネー！」

「イワーク、フシギダネにずつき！」

「イワー！」

「何!？」

今起きているのはヤバイ、何がヤバイかって言うといワークが鋭いずつきをする事でフシギダネは急所に当たり怯ませている事がヤバイ！

「イワーク、そのままフシギダネを捕まえてしめつける攻撃だ！」

フシギダネはイワークに締め付けられ苦しめられていた。しかし、イワークだって生き物だ。やどりぎのタネで体力を吸い取られて力が鈍っている筈、今が好奇！

「フシギダネ、どくのこなを周囲に撒き散らせ！」

「フツシャー！」

「なんだと!？」

「イワワー……！」

流石のイワークもどくのこなを至近距離で受けるとフシギダネの拘束を解除したようだ。

「これで最後だ、つるのむちー！」

「ダネー！」

イワークはつるのむちを一回受けただけで横に倒れ瀕死になったようだ。

「イワーク戦闘不能！ よって勝者ブルー選手！」

俺はそう宣告された後、疲れが廻ったのか尻餅をついた。この地面石や岩でコーティングしてるからメツチャ痛え！

「大丈夫かいブルー君、良いバトルだったよ。」

タケシは手を差し伸べた。俺はその手を掴み起き上がると、タケシから俺の手よりも小さい箱を渡された。

「俺男には興味ないんだけど、」

「プロポーズじゃねえし中に指輪なんて入ってねえわ！」

タケシのツツコミはあまり聞かないものだから少し笑ってしまった。

「冗談だってwwもしかしてタケシさんってあんまりボケられた事ないだろ。」

「俺の前でボケるような奴は君くらいしかないかもな。生きてる中で初めてどうしても良い経験をしたよ。」

番外編：secret memorys ユミ（オマケ付き）

○月○日

数年前

ーまだ私がブルー君と会ってなかった頃ー

私は祖母と一緒に育て屋さんを経営していたが、両親が会社の出張先で事故死だとお婆ちゃんから言われた。しかし、ある日の朝に私は新聞を郵便受けから取り出した時の事だった。その内容は、とても残念な現実を物語っていたのだ。それは、ロケット団の手で両親とも思われる人を亡き者にされたという記事が新聞に載っていたからだ。

「復讐なんて馬鹿な事は考えるんじゃないよ！」

「でもお母さんとお父さんが、殺されたんだよ！ロケット団の手で、絶対に許せないよ……。」

「じゃあユミ！お前のお母さんとお父さんは復讐なんて望んでるとでも言うのかい！馬鹿な考えは辞めなさい。」

「嫌よ！絶対に復讐は果たしてやるんだから！お婆ちゃん、お願いだから止めないで、私

は私の手で復習を遂げたいの！」

私は育て屋さんから出たきりお婆ちゃんとはこれ以降一度も合っていない。

### 数年後

ーポケモンスクールを卒業して数日が経ったある日ー

今となつては何をやれば良いんだろう。ポケモンスクールに通つた後ポケモントレーナーとして情報を探りながらロケット団を潰すのも一つの手だが、あまり育て屋さんのお婆ちゃんとは顔を合わせたくない。今でも心配してくれてるかもしれないけど、これは自分で決めた事なんだ。これ以上ないチャンスを手放してはいけないんだ。私はそんな中、あるチラシを見つけた。その内容は、オーキド研究所で開かれるハウエン地方の初心者用ポケモンの見学会だった。何もしないよりはマシだと思い、私はポケモントレーナーへとなりロケット団に復讐をする第一歩を踏み出したんだ。

### オーキド研究所

オーキド研究所に来ると、見学会に来たのは私一人だったとオーキド博士から言われた。まあ最近じゃハウエン地方のポケモンも珍しくないからね。

「君はなんて言うのかな？」

「ユミです。ハウエン地方の初心者用ポケモンを見に来ました。確か、キモリとミズゴロウ、後アチャモでしたよね。」

「君は物知りじゃな。最近じゃハウエン地方から初心者向けポケモンを連れてきても時代は伝説だの幻だのを追う輩達のお陰で自然に暮らしているポケモン達を見る人達が減ってきたんじゃない。まあ研究者のワシとて伝説や幻のポケモンというのは少し気になるのが、まさかハウエン地方のポケモン見学会が、ユミちゃん一人しか来ないのも末じやの。」

「そんな事ないですよ。それより早くポケモンを見せて貰って良いですか!」

「そう焦らんでも良い。そういえばどうしてユミちゃんはこの見学会に来たのかな?」

「父親が元々ハウエン地方の生まれだったんです。そこでポケモントレーナーをやっている時の最初のポケモンがミズゴロウで、早く見てみたかったんです。」

これは本当の話だ。しかし、本題はここから話さなければならぬ。

「オーキド博士、少し頼みを聞いて貰って良いですか?」

「なんじや?」

「私、生まれも育ちもカントー地方なんですけどハウエン地方のポケモンとどうしても旅を試みたくて、そのミズゴロウを譲っていただきたいのです!出来ることは何でもしますから、お願いします!」

私はそうオーキド博士にお願いをし、頭を深く下げる。

「ふむ、なら少し研究を手伝って貰うとするかの。ユミちゃん、君が”どんな状況”に置かれているかは知らないが、取り敢えず頭を上げなさい。」

私はそうしてオーキド博士に泣き寝入りを成功し、オーキド研究所で数週間手伝った後ミズゴロウの持ち主であるオダマキ博士に譲って貰った。

数ヶ月後

「もう出発するのなの？」

「はい、お世話になりました。このミズゴロウも大分私に慣れてきてくれたらしいし、これでトレーナーとして旅に出ることが出来ます！」

「ふむ、それでは旅の始まりとしてこのタウンマップとポケモン図鑑をプレゼントしよう。ホウエン地方のポケモンであるミズゴロウはまだページに掲載されないが、カントー地方全域に及ぶポケモンならそのポケモン図鑑が役に立つ筈じゃ。」

「ありがとうございます！それでは、」

「いつでも戻ってきて良いぞ！」

私はこうしてポケモントレーナーの第一歩を踏み出した。

現在

「今日はここまで、今日は遅いからもう寝よつか。」

「えー！先が気になるよ。ユミお姉ちゃん続き続き！」

私は今日もそんな駄々を捏ねるオレンジちゃんを私は頭を撫でながら「ダーメ！」と言つてその日の夜はオレンジちゃんの部屋の隣にあるブルー君が使つていた部屋のベッドを借りて今夜は寝る事にした。

「あの頃は懐かしかったな。今頃ブルー君は何してるんだらう？」

私はそんな疑問を眠気で押し退け今日もマサラで1日を過ごした。

〈一方その頃〉

『まだオツキミ山でやり残した事とはなんだランス？』

「ちよつとした後片付けを終えてなくてね、そつちは順調ですか？」

『マルマインは6体揃つたわ。後あの計画を実行するだけよ、貴方も本部に早く帰つて来なさい、ランス。』ガチャ ツー、ツー、ツー、

「ふふふ、待つてますよ、ブルー君。オツキミ山でまた君と出会うのをね！」

それはレッドの目が節穴だからだと思うな。

俺の名はブルー、いまオツキミ山で迷子になっています。

遡る事2時間前

ジムリーダータケシに勝ってバッチを貰った次の日の朝、俺はオツキミ山へ向かう事にした。勿論ジュンサーさんからは許可を貰ったうえでだ。しかし、本当にロケット団がオツキミ山にいるのか？黒い服を着た厳ついおっさんがオツキミ山で迷子になっているだけじゃねえのか？俺はそんな事を考えていると、オツキミ山の前にあるポケモンセンターに立ち寄る事にした。

ポケモンセンター

ポケモンセンターのジョーイさんがいるカウンターの所に見覚えのある帽子を被った赤い少年が一人目の前にいた。

「ん？おおブルーじゃねえか、お前もタケシさんに勝ったんだな。」

「嗚呼、グリーンの奴はどうしたんだ？」

俺がそう聞くとレッドはとても嬉しそうに答えた。

「グリーンは奴この中で一番最初に挑んだ癖に負けたりしないぜ。タケシさんに次勝つ為にまだニビシテイで特訓してるんだとき。」

「へえ、グリーンは奴ゼニガメを連れてつたからタイプ相性有利で地味にずる賢いから勝手にバッチゲットしてたと思つてたけど、まあ直ぐ俺達の所に追いつくだろ。アイツなら、」

「それはどうかしらね？」

俺とレッドが話してる横からこれまた聞き覚えのある女子が此方を見ながらニヤニヤ笑っている。

「久しぶりだねリーフさん。」

「レッド君久しぶり、身長少し伸びたんじゃない？」

あれ？

「なあレッド、この暴力女と知り合いだったのか？」

「え？リーフさんは暴力女なんかじゃないと思うけど。」

「それはレッドの目が節穴だからだと思ふな。」

「節穴なのは貴方の方でしょうか！」

「なんだよ煩いな。生ゴミ以下の存在にはまず目玉が存在してないと思うけど？」

「だったら口から何も話さなければ良いじゃない。どうせブルーの口から出るのは変態

「よりも悪質な声なんですもの。」

「俺をなんだと思ってるんだよ。」

「それより、リーフさんが来るって事はタケシさんに勝ったんだね。」

「レッドがリーフに聞くと、リーフはさも当然のようにグレーバッチを見せてきた。」

「当たり前でしょ。弟が負ける相手に私が負けないわけないじゃない。」

「確かにプライドの高さと落書きのようなニヤニヤは似てるような気がするが……え、弟!」

「そういえばブルーは知らなかったよな。ブルーがマサラに来るまではリーフさんマサラに住んでただけど、ジョウト地方のお嬢様学校に留学してから同じ時期に丁度ブルーがマサラに引っ越して来たんだよ。」

「え、お嬢様? なんの冗談だレッド。この暴力でしか解決しないこの女がお嬢様学校に留学してた? ちゃんと証拠はあるのかよリーフ。」

「ほら、これが卒業証書の写真!」

「リーフが見せつけるようにポケギア越しで見せてきた。」

「これ偽造したんじゃないのか?」

「アンタの中で私はどんな奴なのよ。」

「そりゃあ……やっぱいいや。」

「ちよ!?! なんなのよ、教えなさいよ!」

言ったら殺されそうなんで一生言わないでおこう。

「それよりも、どうやってお嬢様学校に入れたんだよ? そもそもリーフって頭良いのか?」

「良くないと入れないわよ。ここに行けたのはほんとにお爺ちゃんのお陰なんだから。」

成る程、確かにオーキド博士のコネならジョウトの学校にも顔が効きそうだ。って言うか、ポケモン博士で世界的に有名だって毎日テレビである程だからな。

「それよりも、早くハナダシティに行きましょ、ハナダの洞窟って場所にとっても強いポケモンがいるって噂だし。」

「じゃあここで用意をするかレッド、」

「うん、そうだな。」

俺達はリーフの話を見殺しにしてオツキミ山に行く事にした。

オツキミ山

「思ってたよりも暗いな。ポケモンセンターで懐中電灯をレンタルしてて正解だったな。」

そう言いながら俺は先頭を歩いていたのだが、

「おいレッド、リーフ? ちゃんと付いて着てるか?」

「……………」

「何も反応がない、ただの屍のようだ。」

俺がそう馬鹿な事を言ってもツツコミが来なかった。という事はあれだ、俺迷子になつてゐるやん。

―そして今に至るのであった。―

「出口はどこかな?」

「出口がないのならこの山で一生立て籠もっていれば良いのでは?」

「無理無理、流石に山で立て籠もるような奴じゃないし俺。」

俺は何処の誰かも分からない人の声に反応して答えた後、その次の瞬間俺は落とし穴にハマつて地下へ落ちていった。

「ふふふ、これで3人目も確保。楽しんでくださいね、ブルー君。」

オツキミ山地下1F

俺は何かの罠に引っかけたり地下まで落ちたらしい。思いつきり尻餅していてえなつて思つたけど下にクツションのようなものがあつたらしい。

「おいそこどけよブルー、いつまで座つてんだよ。」

「嗚呼、ごめんレッドか。それより此処は?」

俺は立ち上がりレッドに聞くと「さあ、知らねえな。」と答えた。ちつ使えねえな。

「そういえばリーフさん見てないか？気づいたら離れてて、ブルーと一緒にいると思ってたけど、」

「嫌、俺も気づいたら1人だった。という事は、リーフも1人の可能性がある。まあ、あれでもポケモントレーナーだし大丈夫だろうけどね。」

「その貴方達、此処で何やっているの！」

目の前にいたのは、ジュンサーさんだった。

## 誰か俺の味方はいねえのか!?

私はリーフ、気づいたら2人とはぐれていた。自分用の懐中電灯を落としてしまったので、ポニータを出す事にした。

「ポニータ、出てきて!」

「ニータ!」

すると、後ろから「そこで何をしているの!?! 止まりなさい!」という声が聞こえた。きつとジュンサーさんの声だ。レッド君は無事かな? ブルーはどうしたって? あんな奴ほつといてもしぶとそうだから大丈夫でしょ。(暴論)

〈一方その頃ブルー達は〉

「ジュンサーさん俺です、ブルーです。」

「ブルー君? ま、丁度良いわ。此処からはロケット団が支配しているらしいの、気をつけて!」

「? わかりました。」

「どうしたんだよブルー、」

「嫌、ジュンサーさんってサングラス掛けるっけ？」

「別どっちでも良いだろ。それよりもリーフさんだ。無事だと良いが、」

しばらく3人で歩いていると、行き止まりだった。するとレッドが聞き覚えのある台詞を言ってきた。

「どうする、」 此処で本当に一生を過ごす”なんかごめんだぜ？”

「お前本当にレッドか？」

「どうしたんだよ急に、俺は俺だよ。一番最初にヒトカゲを選んだレッドだよ。」

怪しい、ジュンサーさんにしてもそうだしレッドなんか語尾に「だぜ」なんて俺の前で言ったこと一回もない。となると、……。

「コダツク、あの2人にみずてっぼうだ！」

「コダ！」

「キヤー！」 「ちよっ！」

2人はどんどんピンク色の物体に変わっていった。懐中電灯で照らすとメタモンだった。成る程、だから2人とも言動や行動がおかしかったのか。それにしても、2人は本当に何処なんだ？

「謎を最初に解いたのはブルー君、君が一番最初だよ。おめでとう、」

そう言つて拍手で迎えてくる奴はあのだいたいはつをドガースに使させたロケット団幹部のランスだった。

「おい、2人は今どこにいるんだ、今すぐ此処から出せ！」

すると、ランスはニヤニヤしながら答えた。

「君の相手は私ではない。私の部下を楽しんでくれたまえ。」

ランスはそう言つてロケット団の下つ端達に背中を向けて奥へと進んでいった。こりやあ大変だ、レッドかりーフが応援に来てくれないと数で押し倒される。

「ひとまずお前ら全員を相手にして勝てれば良いんだろ！行つてこいお前ら！」

俺はプテラとフシギダネを出した。頼む、誰か来てくれ、じゃないと俺が死ぬ！

へ一方その頃レッドは

俺は途中でリーフさんとジュンサーさんに合流した。ブルーの奴何処にいるんだ？

「それにしても、変よね。ブルー君ったら何処にいるのかしら？」

「本当よ、こんな女の子を置いて1人にさせるなんて。もう絶対許さないんだから！」

あれ？リーフさんつてこんな人だっけ。絶対違うよな、てか別人だよな。さつきまであんなに2人とも嫌悪してたのに心配する筈がない。となると、

「ピカチュウ、でんじはで2人を麻痺らせろ！」

「ピッカ！」

「キヤアー！」 「イヤァー！」

2人とも実は本物でしたって落ちなら最悪だなあと思いながらもピカチュウに命令すると、2人はどんどんメタモン化していった。嫌、元々メタモンだったんだ。じゃあこれはロケット団の罠？ レッドとリーフさんは何処にいるんだろう。探しに行こう！

〈その頃ブルーは、〉

ちくしょう。流石に1対5はねえよ。まだ3対5なら別だけど俺相手に何人係で来るつもりなんだよ！ 両手両足縛られて動けやしねえこの状態で後は誰かが来るまで待つしかねえじゃねえか！すると、誰かの足音が奥から聞こえて来た。

「ポニータ、ふみつけであの生ゴミを踏んできて！」

そんな理不尽な声と同時に俺は人生二度目にしてポニータから顔面を前脚で踏まれた。

「デメエ、人質に何しやがる!？」

「人質だから罠かどうか確かめてやったんでしょ、それにしてもアンタがそんな簡単に捕まってちゃ負けた私が顔に示しがつかないじゃない。」

「勝手に喧嘩売って勝手に負けて勝手に逃げて行く奴が何言ってるんだよ！早く助けろ！」

「ピカチュウ、ブルーに向かってでんきショック！」

「ピッカー！」

今度は後ろからレッドのだと思われるピカチュウのでんきショックを食らった。俺  
じやなかったら死んだだぞ絶対！

「あれ？メタモンじゃないって事はまさか本物!？」

そんな声の先にはレッドが現れた。コイツ絶対ワザと俺に当てただろ！

「良いのよレッド君、コイツほつといても復活しそうだし。」

「それもそうですね。生命力だけならコイキングくらいあるかもしれませんね。」

「好き放題言いやがって2人とも！後でお前ら泣かしてやる！」

俺達の会話を聞いて戸惑っているロケット団達が少し哀れな目で俺を見てきた。お  
い！俺は人質だよな、そうだよな。悪役ですらこんな仕打ちは絶対ないだろ！誰か俺の  
味方はいねえのか!?

「ポニータ、あの生ゴミとロケット団共々ふみつけでやってしまっつて！」

「ピカチュウ、あの連中にでんこうせっかでトドメを刺せ！」

おい、リーフはともかくおいレッド！テメエ長い付き合いだろ、なぜピカチュウに俺  
まで攻撃対象にしてんだよ。ぶっ殺すぞ！

数分後

「これで悪人はいなくなったわね。生ゴミ以外」

「まあまあ、ブルーは最初にロケット団を引きつけてくれたからそこまでにしてあげましょうよ。」今日は「」

「おい、今日はってどういう事だ!?!また似たような展開があつたらまた俺を虐める気だな!お前から絶対ピンチな状況で助けてやんねえからな。」

「わかったからアンタは口を閉じてなさい。でないと紐をポニータの炎でアンタ事燃やしてやっても良いのよ。」

これじゃあどっちが悪人だかわかりやしねえ!

納得してんじゃねえよ!

俺はなんだかんだ言いながら結局はレッドとリーフに縄を解いて貰った。

「つたく、ロケット団の奴らもうちよつと人質は大切にしろよな!」

「お前誰視点で言ってるんだよ。」

「そんな奴はほっておいて行きましょ、レッド君。もうすぐハナダシティに着くと思うわ。」

そんな会話をしている途中で、歩いている途中にRと書かれたモンスターボールが1つ落ちていた。

「これは、……なんだ?」

レッドは首を傾げながらそのモンスターボールを手を取った。

「Rの文字が書かれているって事は多分ロケット団が無理矢理捕まえたポケモンをその中に入れたんじゃないの?」

「でもこのモンスターボールの中身カラですよ。」

「それじゃあモンスターボールからポケモンを出したのかしら?」

それだとわざわざモンスターボールにポケモンを入れる必要がない。それどころか

むしろ化石のまま運べば良かったんじゃないや……、嫌待てよ。前ニビ博物館でテロをロケット団が起こした時は既にロケット団は復元されて普通のモンスターボールに入れられた古代のポケモンを持ち去って行った筈だ。とすると、そのモンスターボールは何かのフェイクか？それとも元々カラの状態にする必要があったとか？くそ、どうでもいい事を考えるのは嫌いなのにどうしてここまで考えてしまうのだろう。

「どうしたのブルー君、いつもより顔が変になってるけど」

「顔は余計だ！」

「それよりどうする？このまま行っても良いけど、さっきあったロケット団の罠に引っかけたお陰で場所がどこか分からないぞ？」

「別にこのまま進んでも構わないと思う。」

俺がそう言うのと、リーフは「どうして？」と答えてきた。

「そのモンスターボールは見てわかる通りロケット団によつて作られたものだろう。そして、ロケット団は何故このオツキミ山に立て籠もつてると思う？」

「化石を掘り出してもつと古代のポケモンを復活させる為？」

「嫌、違う。それだとニビ博物館でロケット団は化石諸共持ち去って行く筈だ。だけど、そうじゃなかった。ロケット団はあの時モンスターボールに入っていた古代のポケモンだけを持ち去って行った、という事は此処で化石を発見する必要はない。」

「じゃあなんなのよ?」

「此処で誰かを足止めさせる為とかだつたりしてな。そこにいるロケット団幹部のランズさん?」

俺がそうワザと大きな声で聞くと、奥からまたランスが現れた。

「お見事ですブルー君。ですが点数を付けるなら80点ですかね。」

「お前らの考えている事は大体予想がつくよ、どうせ今頃はロケット団本部に偽装したトラックなんかを使って移動させてる筈だ。まあそうだよな、ジュンサーさんだけならともかくニビシティのジムリーダーであるタケシさんまで動いたんだ。お前らの行動を把握されたら折角奪った古代のポケモンが取り返されてロケット団の計画が御破算になつちまう前に動く筈だ。」

「へえ、ブルー君つてもしかして頭が良い?」

「嫌、違いますよリーフさん。類は友を呼ぶって言うじゃないですか。」

「成る程!」

納得してんじゃねえよ!おいなんだよ、俺ちゃんとロケット団の真相を暴いた筈なのになんでこんなに全然褒められねえんだよ。それどころか碌でなしの人間って遠回しに言われたよ。

「ふふふ、私もブルー君はこつち寄りの人だとは思っていたがここまで来るとロケット

団にスカウトしたいぐらい貴方は悪に優れている。ブルー君、ロケット団に入りませんか？」

「おい、余計な事は言わんでいいからはよお前は帰れ！」

コイツとんでもねえこと言いやがった、何が悪に優れているだ！後ろの2人が「確かに！」って言いながら首を縦に振ってんじやねえか！ちよつとは否定しろやボケ！

「今回は私自ら手を出そうとは思いませんでしたが、気が変わりました。貴方は後で私達の1番の敵となるでしょう。その前に仲間共々あの世へ送ってあげますよ！」

「やらせるかよ、行けコダック！」

「ドガース、行きなさい！」

「さっさと蹴り付けるぞ。コダック、ねんりき！」

「ドガース、どくガスです！」

その瞬間コダックはもろにどくガスを受けながらもねんりきでドガースを一撃で仕留めた。

「な、私のドガースが一撃!？」

「タイプ相性を知らねえのかよ、どくタイプはエスパークタイプに弱いんだよ！」

「ふん、ならばこれはどうでしょうか。私はまだドガースを持っています。この意味が分かるでしょう?」

「まさか、止めなさい! ここにはまだ貴方の部下だっている筈よ。それに貴方自身この山の中で生き埋めに……!」

「負けるくらいなら死んだ方がマシですよ! 行けドガース、だいはくはつ!」

「な! おいブルー、このままじゃ崩れるぞ! どうすんだよ。」

俺は2人の慌てようを見て少しニヤついていた。なぜなら俺には「打開策」があったからだ。暫くすると、ドガースは何もしなかった。

「あれ? 何故だいはくはつをしないのですドガース、まさか!」

「馬鹿め、そのまさかだ! コダック、ねんりきであのドガースにトドメを刺せ!」

「コ、コダック!」

コダックは毒に苦しめられながらもドガースをまた一撃で戦闘不能にさせた。

「テメエの考えている事くらい分かるんだよ。同じ事を何度も食う訳ねえだろ!」

「……フッフ、ハハハハ!」

あれ?

「まさかだいはくはつを止めたとはなかなかやりますねブルー君。これはお礼ですよ、  
と言いなながらランスはモモンのみを投げてきた。

「私を殺せなかつた事を後悔すると良いですよブルー君。さらばだ!」

負け犬はそう言った後、煙玉で姿を消した。

やつぱりお前は純粹な悪だよ！

俺達はランスとの戦いの後、モモンのみをコダックに食べさせてから直ぐにハナダシテイに向かった。オツキミ山を抜けた辺りにレッドから質問をされた。

「そういえばブルー、どうやってドガースのだいはくはつを止めたんだ？」

「なんだと思う？」

「そう言うのは良いから！」

そんな会話をしていると、リーフが呆れ顔でレッドに教えた。

「コダックの特性でしめりけつて特性があるんだけど、その効果はだいはくはつを防ぐ事が出来るのよ。」

「しめりけ？つて事はブルー、まさか分かつて俺達の慌てようを楽しんでたんじゃねえよな？」

俺はニヤニヤしながら答える。

「だとしたら？」

「お前良くあんな場所でタチの悪い事出来るな。やつぱりお前は純粹な悪だよ！」

「それには私も同感だわ、なんと言つてもこの男の本性がここまで腐つてるなんてね。」

「お前らおかしいだろ、なんで命の恩人に礼も言わずにボコボコに言われなきやいけねえんだよー!」

「それは違うわ、命の恩人はコダックであつて貴方ではないもの。」

「むしろ騙された俺達が被害者だよ。ポケモンセンターに着いたら飯奢れよ?」

「ふざけんな! 何が飯奢れよ? だ! コダックのトレーナーは俺だから命の恩人は俺の筈だろ!」

「それは無い、絶対無い。」

2人は真顔で否定してきた。泣いて良いかな?

ハナダシテイ

俺達はハナダシテイに着くとポケモンセンターへ向かった。

「ようこそ、ポケモンセンターへ! ポケモンをお預かりしましょうか?」

「「お願いします。」」

それからポケモンを回復してもらうと、俺はレッドとリーフを置いて行き、ハナダジムへ向かう事にした。

「ようこそ、未来のチャンピオン! ここはみずタイプのポケモンジム、くさタイプやでんきタイプが弱点だ。間違つてもいわタイプやじめんタイプは出すなよ!」

「OK、対策はバッチリだから心配しなくても大丈夫だ。俺のポケモンは皆強い事を早

く証明してやるよ！」

俺はハナダジムの心優しい男の人に向かって同じリズムで返した。

「へえ、随分と強気なのね？ 負けた時の事を考えてないの？ ちゃんと考えて言葉を選ばないとこのジムで地獄を見るわよ。」

すると、奥の部屋から入ってきた女子が俺に向かって言ってきた。

「此処に負ける覚悟で来る馬鹿は此処にまず来ねえだろ。それと、地獄を今から見るのはジムリーダー、アンタだよ。」

「ふーん、私の事ジムリーダーだって気付くんだ。まあ当然よね、それより私の名前はアンタじゃなくてカスミ！ ジムリーダーの名前くらい覚えておきなさい。」

「言われなくても、早速試合を！」

「待ちなさい、そう焦んなくても奥にフィールドがあるからそこでバトルをするのよ。案内するわ、着いてきなさい！」

俺は言われるがまま着いて行くと、フィールドはなんと25メートルの大きなプールの上に半径4メートルくらいの丸い板が2つ浮かんでいた。

「なんだこのフィールド？」

「此処はみずタイプのジムなの。つまりはフィールドも水のフィールドになっているのよ。」

「それチャレンジャーの方が不利じゃねえのか?」

「あら、もう弱音? 帰っても良いのよ。」

と、分かりやすい挑発をしてくるジムリーダーカスミに俺は「んなわけねえだろ!」と言いつつ挑発に乗っかってやった。

「ふん、なら負けても後悔しないでよ。行きなさいヒトデマン!」

「シユワ!」

「コダツク、お前の強さ見せてやれ!」

「コダツ!」

「貴方ふざけてるの? みずタイプのジムにみずタイプのポケモンで来るなんて命知らず始めて見たわ。」

「言ってる。コダツク、プールの中に潜れ!」

「水中戦であえて来るのなら、地獄を見せてあげるわ。ヒトデマン、プールの中に入って!」

「シユワ!」

「行くぞコダツク! ねんりきでヒトデマンの周囲の水を上を上げろ!」

「コダツ!」

「何をするつもりかは知らないけど…ヒトデマン、そのままバブルこうせん!」

「コダツク、ヒトデマンをプールサイドに叩きつける！」

「嘘、ヒトデマンをプールサイドにぶつける事でダブルこうせんを無理矢理止めた!？」

「コダツク、みずてつぼうでヒトデマンを集中攻撃！」

「コダツ！」

「ヒトデマン、サイケこうせんのみずてつぼうを押し返すの！」

「シユワ！」

みずてつぼうとサイケこうせんをぶつけあった結果サイケこうせんが勝ちコダツクは俺の方へと吹っ飛ばされて壁に埋まったまま目を回していた。

「な!？」

「ふん、どうかしら私のヒトデマンは！次のポケモンで最後よ！」

「ゆけ、フシギダネ！」

「ダネ！」

「みずタイプの子の恐ろしさをもう見せてやるわ。サイケこうせん！」

それみずタイプの技じゃねえよ！

「フシギダネ、サイケこうせんをプールに飛び込んで交わすんだ！」

「ダネ!？」

「あら、もう諦めたの？くさタイプのフシギダネじゃプールに突っ込んだところで……

！」

すると、フシギダネはギリギリサイケこうせんをジャンプでかわしながらプールへ飛び込んだ。すると、プールに浸かったフシギダネの体が光り出した。

「嘘でしょ?そんな馬鹿な!」

「フシギダネ?これはまさか!」

「ダネ!?ダネー!」

フシギダネは蕾の所がどんどん変化して行きフシギダネからフシギソウへと進化したのだった。ただし、プールに浸かった状態で

「ふん、ちよつと強くなった所で私の方が有利なのは変わらないわ!サイケこうせん!」

「フシギソウ、やどりぎのタネ!」

フシギソウは蕾をヒトデマンに向けてやどりぎのタネを発射させた。すると、命中したヒトデマンの体にはタネからツタがヒトデマンに絡まらずにそのまま爆発した。ヒトデマンは、爆発と同時に後ろの壁に吹っ飛び目を回していた。

「あれ?もしかして、やどりぎのタネを忘れてタネばくだんを覚えたのかお前。」

「ソウ!」

フシギソウは頷きながら答えた。

「……………やどりぎのタネの方が強くな?」

「ソウ！（タネばくだんの方が強いわぼけ！）」

ジムリーダーって皆変人なのか？

「おい、ヒトデマンは倒したぞ！これで1対1だ。」

「ふーん、やるじゃない。まあ、私のポケモンはヒトデマン以外にも強いポケモンがいる事を証明してあげる！ゆけ、ギャラドス！」

「えっ！」

ジムリーダーカスミが出したポケモンはギャラドスだった。ギャラドスがプールにダイビングする事でフィールドの水がどんどん溢れてきた。

「こつちから行くぞ！フシギソウ、タネばくだん！」

「ギャラドス、りゅうのまいで防ぐの！」

すると、ジムリーダーカスミのギャラドスはプールに浸かりながらりゅうのまいをする事でギャラドスの体にプールの水が吸い付くように纏わり付いている。フシギソウのタネばくだんはギャラドスのりゅうのまいで纏わり付いたプールの水が壁となりタネが爆発してもギャラドス自身にはそこまでダメージが与えられなかった。

「ギャラドス、もっと早くりゅうのまい！」

「ブオーン！」

どうする、どくのこなをしたところでギャラドス自身に届かなければ意味がない。最悪、あの纏わり付いているプールの水さえどうにか出来れば、プールの水？ そうだ！

「フシギソウ、タネばくだんをギャラドスの真上に飛ばせ！」

「ソウ！」

「な、しまつ……！」

上に飛ばしたタネばくだんはギャラドスの頭にぶつかり爆発した事でギャラドスのりゅうのまいが止まった。

「ギャラドスのりゅうのまいは確かにこのフィールドには打って付けだな。だが、いくらりゅうのまいでも頭までは守りきれないのは誤算だったなカスミさんよ！ 今だフシギソウ、どくのこな！」

「くつギャラドス、アクアテールで押し切るのよ！」

「無駄だ、いくらりゅうのまいでスピードとパワーが上がってもどくのこなは避けられない！」

ジムリーダーカスミのギャラドスは俺の言う通りどくのこなに間に合わず毒状態になり苦しんでいた。

「今がチャンスだフシギソウ、タネばくだんをギャラドスの顔面に向けて総攻撃！」

「ソウ！」

「耐えてギャラドス！」

「ブオーン！ブオーン！ブオーン！」

ギャラドスはとても苦しそうに暴れながらもタネばくだんを顔面に何度も受けてそろそろ倒れそうだ。

「そうだ！ギャラドス、あばれる攻撃！」

すると、ギャラドスは苦しみながらもフシギソウのタネばくだんを強引に弾いて尾びれを思い切りフシギソウに叩きつけた。

「ブオーン！」

「くそ、大丈夫かフシギソウ。」

「ソ、ソウ！」

フシギソウはなんとか立てたもののギリギリのようだ。あれ？フシギソウが変な緑のオーラ出してるな。

「ヤバイ、ここでしんりよく!？」

しんりよくって、確かフシギソウが体力ギリギリになったらくさタイプの威力が上がるって言われているあのしんりよく!?!でも今のフシギソウはなんか中の草から異様な匂いが出て来てるんだけど、まさかフシギソウのしんりよくってくさタイプの技が強力

になる代わりにフシギソウ自身も臭くなるのか!?

「いけフシギソウ、強烈なタネばくだんをギャラドスに浴びせてやれ!」

俺は鼻を指で摘みながらフシギソウに命令した。

「ソウ!（喰らえコイ野郎!）」

フシギソウのタネばくだんでギャラドスの体力は無くなりやつと倒れてくれた。

「全く、勝負の途中で進化したりギリギリのところまで返り討ちにあつたり、今日はいいい勉強になったわ。ところでそのフシギソウ早くモンスターボールに戻してもらつて良い? 近くに来るほど匂いがきつくて、」

「フシギソウ、そういう事だ。戻れ!」

俺はモンスターボールにフシギソウを戻すと、ジムリーダーカスミからブルーバッチをゲットした。俺はその後急いでポケモンセンターに向かつてポケモンを回復してもらうと、カスミからみずタイプのコダツクの修行を手伝うと声をかけてくれた。俺はカスミの待つているハナダの鴨へ移動した。

「待つてたわよブルー君、突然だけどコダツクを見せて頂戴。」

「分かった、コダツク出てこい!」

俺はモンスターボールからコダツクを出すとコダツクは目の前にいるカスミにジロジロと見られコダツクも負けじとカスミをぼくとした目で見つめ返す。すると、カスミ

が突然コダックに抱きついた。

「この子、私のポケモンにして良い？」

「ダメに決まってるだろ！」

何考えてんだコイツ？ジムリーダーって皆変人なのか？タケシさんもニビ博物館で最初に会った時博物館の中にあつたムフフ本の表紙だけで鼻を伸ばしていたし、これじゃあ四天王とチャンピオンがもつと変人の可能性があるな。

「ごめんごめん、この子が私の事をじっくりと見る姿が可愛くてつい／＼／」

「ついじゃねえんだよ！」

「まあまあそんな怒らないで、この子には私のギャラドスのアクアテールを習得させてみせるから。」

「アクアテール？」

「そう、まあ見せた方が早いわよね。ギャラドス、出番よ！」

と言いかスミはギャラドスを出した。

「ギャラドス、アクアテールをあの木に向かって攻撃して！」

カスミが指した方向には一件の家の隣にある木を指していた。あの家大丈夫かな？ギャラドスは尾鰭に水を纏い木に向かって攻撃すると、俺の予想通り隣の家も一緒に巻き込まれて家の中に入っていたポケモンも一緒にギャラドスの餌食となった。

「ちよっ!?何してんのギャラドス！」

「アンタの不注意だよ！」

「ウチの家こんな風にしてタダで済むと思うなよ我！」

そんな声が聞こえた先にはニドキングしかいなかった。

だからわいは人間や!

俺の耳はおかしくなったのだろうか?今ニドキングが喋ったような気がしたのだが、カスミさんはカスミさんで「ごめんごめん」と両手の手の平を合わせながら顔の前に出しながらそんな事を言っている。

「そういうえばブルー君知らないよね、紹介するわ。この人はマサキさんって言って昔は人間だったの。」

「おいカスミちゃん、その言い方やと今はポケモンって聞こえるやないか。俺は今でも1人の人間や!」

「1匹のニドキングじゃなくて?」

俺は尋ねるように聞くと、

「違うわポケ!」

とニドキングは答えた。このツツコミとポケを切り裂く反射神経、この人もしかして俺のテンションについて来れる人!?

「わいをからかっとなら地獄見るぞ!」

「まあまあそう言わずに、あれ?ポケモンだからモンスターボールに入る筈ですよ?

何故入らないんですか？もしかして野生の!？」

「ハイハイ野生のマサキです。て、な訳あるかポケ！さつきから人間やって言ってるやろうが、ここまでポケてくる奴は久し振りに会ったさかい血圧が上がるから年上にはもうちよい優しくする事を学ばんか！それとわいの体は二ドキングやけどトレーナーの下に着く気はないわポケ！」

「すいませんマサキさん、家を壊してしまつたからお詫びにこれを渡しますね。」

カスミは少し申し訳なさそうに紙袋をマサキさんに渡した。

「おおきにカスミちゃん。ほら、こんな大人を思いやる気持ちを持てる最近の子がええ大人に育つんや。分かつたか坊主？でカスミちゃん、なんで袋の中身がポケモンフードしか入ってないんや？」

「あれ？モモン味にちゃんとしといた筈ですけど？」

「だからわいは人間や！」

マサキさんがそう言いながらポケモンフードを地面に投げつけた瞬間俺はモンスターボールをマサキさんの額にぶつけた。

「え!？」

マサキさんがそう言ったのもつかの間、3回左右に揺れた後モンスターボールはカチッと音が鳴った。カスミは「え、嘘!？」と言いながら近づいて来た。俺がモンスター

ボールの中に入っているマサキさんを出すと、「急に何するんや我!」と奴は怒鳴り散らしてきた。

「すみません、目の前に生きのいいニドキングがいたからつい。」

「そうや、こう見えてもレベル30にもいつてない強さやけど舐めたらあかんでつてんなわけないやろ!何やらせとんのじゃボケ!」

「嫌、久し振りに面白そうだから波に乗って見ると、まさかマサキさんをゲット出来るとは思つてなくてつい。」

「ついでわいをゲットするな!それだとわいは只の200円で売られているモンスターボール如きに吊られたもんやろうが!」

「違うんですか?」

「違!………くない。ハア、もう疲れたわ。」

「ブルー君、幾ら何でも酷いわよ。家の修理代も含めて払い反省しなさい。」

「それ反省すんのはアンタだろ!」

「あれ、バレちった?」

それから俺とカスミはマサキさんから事情を聞いてなんだかんだありマサキを人間に戻す事になった。

「おい、なんだかんだって説明雑やろが!もつと状況を分かりやすく教えんかい!」

ナレーションにまで口出しすんなよ自称人間（仮）

「なんや自称人間（仮）って！」

そんな事がありながらもマサキさんの家の残骸の方へ行き元に戻る装置の方へと案内してもらった。

「ほら、この装置を見てみい。」

そう言つてマサキさんが見せてきたのは大きな筒型の機会が2つ長いコードで繋がっているものだった。

「わいはこの中に入るからこのボタンを押してくれ！じゃあ頼んだぞ。」

マサキさんはそう言いながら機会にはいると、俺は指定されたボタンを押した。すると装置の中が光り出し、同時に機会の中から1人の中年男性とニドキングが出てきた。

俺は早速マサキさんの方に声を掛けた。

「マサキさん良かったですね。」

「それわいじゃなくてニドキング！」

え?!俺は自分の目を疑った。見た目は年の離れた中年男性に見えるがやはりニドキングからは戻らなかったようだ。

「もういいわい、付き合つてくれてありがとな。後カスミちゃん、家の事は業者に依頼すればなんとかなる。心配せんでもええよ。」

「モンスターボールに入って寝る事が出来ますしね。」

「うっさいわポケ!元々の元凶犯がお前の癖に何を言うてるんじや!」

「まあなんにしても、あ!コダツクのアクアテール覚えさせる為に来たんだけど忘れてたわ。ごめんねブルー君。」

「良いですよ、この人弄るの楽しかったですし。」

「余計なお世話や!」

「あ、そうだ!マサキさん俺のポケモンとして旅しませんか?」

「するかアホ!それにしたとして何かメリットがあるんか?」

「ありますよ、旅してる間に元に戻るかもしれないし!」

「は!そんな都合の良い展開待ってるわけないやろ、坊主世間舐めすぎや!」

「じゃあ一生そのままが良いんですね?」

「何やと!」

「ここで機械を弄っていたらいつ元に戻るか分かりませんか?それよりかは俺の役に立って下さいよ。」

「結局それがお前の本音やろうが!」

俺はこんな形でニドキングごとマサキさんをゲットしたのだった。



「まあそう言うな。最近じゃポケモンに乗って移動するトレーナーが多いと良く耳にするからプテラにでも乗ったらどうや?」

「それはプテラが可哀想だからマサキさんの少しトゲトゲした背中では我慢しますよ。」

俺がそう言いながらマサキさんの体によじ登り、おんぶのような形で乗った。

「兄ちゃんこれでもわいは30越えたオッサンやで、どうせおんぶするなら可愛い女の子が良えわ、あそこにいる嬢ちゃんのような可愛い子にわいは頼られたいんや。」

マサキさんが言った方向を見ると、見覚えのある女子だった。しかも、タمامシのポケモンスクール時代にいた頃の転校生の顔だった。確か名前はミ……ミジンコだった?  
?

「なあマサキさん、あの女の子ナンパして来れば?もしかしたら釣れるかもよ?」

「それは辞めとくわ。よく見てみい、あの子はジョウトのジムリーダーとして活躍しているミカンちゃんや。ファンクラブが20000人以上いて、話しかけるだけでファンクラブの人達から消されるって噂やで、しかもわいはもう良い年のオッサンや。確かにミカンちゃんは可愛いけど流石に手を出す程わいは腐ってないわ。」

あ!?! 思い出した、あの女の子の名前はミジンコじゃなくてミカンさんだ。でもファンクラブが20000人以上いて声かけただけで消されるなんてジョウトのチャレンジャー勢は可哀想だな。

「なあマサキさん、俺声かけてくるわ。」

「辞めとけ、いつ何処でファンクラブの奴らが見てるか分からんぞ?」

「そこまでいったらもうストーカーだよ。そうじゃなくて、昔の顔見知りなんだよ、降ろしてもらって良いか?」

「嗚呼、世間話してからはよ帰ってこい。じゃないとわいまで消されるかもしれんな。」

そうマサキさんは了承して俺を降ろしてくれた。俺は記憶の片隅にあるような無いようなよく話したことの無いミカンに声を掛けた。

「あの、すいません。ミカンさんですよね?」

俺がそう尋ねようと話した瞬間紫の影が無数に現れた。俺はそれを気にせずにミカンに向けて聞くと、ミカンが俺の方を振り向いた瞬間紫の影は一瞬にして消えた。

「はい、そうですが……私に何か用ですか?」

「嫌、実は俺ミカンさんの通っていたタママシのポケモンスクールでミカンさんの後輩をしていたブルーと言います。もしかしたらと思って声を掛けてみたところですよ。」

「まあ、そうですね!?でも私、ブルー君と話した思い出一切無いんだけど。」

「はい、俺はミカンさんに声を掛けた事が今日初めてやりましたしね。単刀直入に言いますが、(ここからは声を小さくして下さい。誰かに付けられますよ。)」

「え!？」

「(声を小さく!)」

「は、はい。」

「(実はここ最近聞いた話ですがミカンさんのファンクラブの人達の誰かがミカンさんに声を掛けるだけで消されると噂が広まっているらしいんですよ。)」

「(ファンクラブ? 私そんなの作ってませんよ。)」

「(多分ミカンさんを崇拜する為勝手に作られた迷惑な団体なんだと思います。)」

「(え!? そんな、でも心当たりが無いわけではありません。この道の先にヤマブキシティがある筈です。詳しい話はヤマブキ道場に付いてから聞く事にしましょう。)」

「分かりました。それでは、」

「はい、それまでどうか気をつけて。(物理的に)」

俺はそう話終わるとマサキさんの方へ向かった。

「えらい長かったやないか、普通なら長時間話しただけで話しかけた人が救急搬送されると噂される程ミカンちゃんに声を掛けるのは勇氣いるのに良くやるな兄ちゃん。まさかこれか?」

そう言つてマサキさんは小指を上げてきた。

「違いますよ、少し世間話をしただけです。(いざ襲われたらマサキさんを盾にしよう。)

もし攻撃されても体が頑丈なニドキングなら熱心なファンクラブ相手でも死なないだろう。」

俺はそう考えながらヤマブキ道場へ向かった。

ヤマブキシテイ

ヤマブキ道場

俺はヤマブキシテイに辿り着くとヤマブキ道場へ向かった。ヤマブキ道場にいたのは畳の上で正座をしている空手大王とその弟子だと思われる2人とミカンさんが座っていた。俺が入った瞬間空手大王が立ちながら声を張り上げて俺の前に歩いて来た。

「ようこそ、ここはヤマブキ道場だ。私の名前は空手大王、ここに土足で入るならまず空手大王である私の弟子を倒してから先へ進みなさい！」

空手大王の弟子が勝負を仕掛けてきた！

俺なんか酷いことしたかな？

俺はブルー、目の前の空手大王の弟子に今ポケモン勝負を仕掛けられた。出して来たのはゴーリキーだ。

「じゃ、行くよマサキさん！」

俺はモンスターボールから既に出しているマサキさんを勝負するポケモンに選択した。

「え!? わいバトルなんて出来へんで、」

マサキさんが喋った瞬間周りの人達が騒っている。まあ喋るポケモンなんて中々目にしないしな。

「物理技なら大抵の人はいける筈です。のしかかり！」

「ゴーリキー、相手の様子を伺え！」

「やれば良いんやろやれば、行くで！」

「リッキー！」

先に攻撃を開始したのはマサキさんだった。

「おらー！ ニドキングの重さは62キロや、喰らえ！」

マサキさんは62キロの体重でジャイアントプレスをゴリーキーにしているが、ゴリーキーはその後マサキさんをお姫様抱っこで直ぐに立ち上がった。

「あら?」

「今だ、ちきゆうなげ!」

「リッツツッキー!」

ゴリーキーはそのままマサキさんを真上に投げて大きくジャンプして両手でキツチリとマサキさんのトゲトゲの体を掴んでマサキさんを頭を地面に勢い良く当たり、一瞬でマサキさんの意識を刈り取った。

「な!?!」

「良くやったゴリーキー、次のポケモンは何で行く?」

くそ、こんなマサキさんが弱かったなんて知らなかった。今後特訓が必要だな。このモブ野郎、俺に勝負させた事を後悔させてやる!

「行くぞ、プテラ!」

「デイーラー!」

「ゴリーキー、いかなだれでプテラを地面に落とせ!」

「プテラ、低空飛行でつばさでうつつ攻撃だ!」

「デイーラー!」

ゴリーキーはモブ野郎に言われた通りいわなだれをプテラに向けて使ったが、プテラは圧倒的な速さをゴリーキーに見せつけて、今度はゴリーキーが一瞬で意識を刈り取られた。

「参りました。クソクソクソ！仇を取って兄貴！」

空手大王の弟子と思われるモブ野郎1号君はその隣のモブ野郎2号君に縋った。

「任せる弟よ、今度は私が相手だ少年。悪いなこの勝負私が勝つ！」

「俺をあんまりがっかりさせるなよ？バトルするなら言った言葉に責任を付けなきゃいけないからな！」

「ふん、そんな事百も承知で……そのプテラに待たせてる物はまさか!？」

「そう、お守り小判。そのモブ野郎1号はまだお金を払ってないだろ？さあ、お守り小判付きならいくらお金を出してくれるのかな？」

俺が大声で煽るように笑いながら聞くと、モブ野郎2号君は「下衆め、そこまで落ちていたか!」と言つて来た。俺は元からこんな性格だよ！

「さあ、アンタもあのモブ野郎1号と同じ運命を辿るのかな？」

「ふん、今回は運が悪かったな。俺が出すポケモンはコイツだ、ニョロボン！」

「ニョロボン！」

げ?!水と格闘を掛け持つ面倒なポケモンじゃん。プテラとは相性五分だな。それな

ら……

「ん、何してるんだ？もしかしてニョロボンにびびってポケモンを変えるのか？」

「嗚呼、相手がニョロボンだからな。俺は負けるのが嫌いなんだ。それこそ、相手が俺のポケモンに勝つて見栄を張られると面倒だしな。」

「ブーメランという言葉を知っているか？その言葉そのままお前に返すぞ下衆め！」

よし、準備完了！

「こい、フシギソウ！」

「ソウ！」

「どんなポケモンで来ても同じ事だ！ニョロボン、れいとうパンチ！」

「フシギソウ、ニョロボンを壁まで引き付けろ！」

「どんな作戦立ててるのかは知らんが無駄だ！吹っ飛ばせニョロボン！」

「ニョロ！」

フシギソウが俺の言った通り壁までニョロボンを引き付けた。

「フシギソウ、そのまま壁に沿ってカーブ！」

「ソウ！」

フシギソウは間一髪のところまでニョロボンの攻撃を避けた。対するニョロボンはれいとうパンチで壁を殴りニョロボンの拳が壁に氷で抜けなくなっていた。

「今だフシギソウ、至近距離でタネばくだん！」

「ソウ！」

フシギソウはニヨロボンの真後ろにしゃがんで三発同時にタネをニヨロボンの背中に爆発させて、ニヨロボンを吹っ飛ばした。ニヨロボンは吹っ飛んだ勢いで抜けなくなった手の氷が砕けて壁に埋まってしまった。

「ニヨロボン！大丈夫か!？」

モブ野郎2号君が様子を見ると、ニヨロボンは目を回しながら埋まった壁から床に落ちた。

「ニヨロ、」

「ほら、賞金下さい。ちゃんとお守り小判があるから増量してね。」

「何、まさかあの一瞬でお守り小判を付け替えたのか!？」

「正解、それじゃあ1人当たり50000000円で許してあげるよ。」

「払えるか!！」

俺は結局モブ野郎達から50000円しかゲット出来なかった。あれ？向こうにいるミカンさんがめっちゃ気まずそうな顔してる。俺なんか酷いことしたかな？

「2人ともまだまだ修行が足りんわ!！」

後ろにいた空手大王はそう大きな声を上げてモブ野郎1号2号にゲンコツを食らわ

せた。

「すいません師範！」

「全く恥をかかせやがって、次の相手はこの空手大王だ！弟子を倒した事は褒めてやるがトレーナーとしてのレベルの差を思い知らせてやるわ！」

空手大王さんって大王って言うからにはお金たんまり持ってそうだな。

俺ってそんなに悪どいか？

「ふん、そのざまなら私のエビワラーには後のポケモン全部を出しても勝てないぞ？」

俺はこの空手大王を舐めていた。

〈約20分前に遡る。〉

「ふん、大王って言うからには金はたんまり持ってそうだなオッサン！精々恥はかくなよ、プテラー！今回もお前に決めた。」

「デイーラー！」

「そんな簡単にひこうタイプのポケモンを選ぶのか？エスパータイプでないと君は負けるぞ。」

「忠告どうも、どうせかくとうタイプにかみなりパンチやれいとうパンチ覚えさせてる程度で言ってるなら空手大王の実力はこれまでだな。」

「ふん、無駄口を叩く余裕があるならバトルフィールドに早くプテラをスタンバイさせるが良い、私はこれでいく。ゆけ、エビワラー！」

やはりエビワラーか、サウムラーの可能性も考えていたがエビワラーもエビワラーで防御力が高い。注意しないと本当にかみなりパンチやれいとうパンチでやられてしま

う。

「ふん、先行は貰うぜ！ プテラ、つばさでうつつ攻撃！」

「遅い、マツハパンチだエビワラー！」

「エツラー！」

「なんだと!？」

エビワラーのマツハパンチを顔面にプテラは食らって壁に吹っ飛ばされた。俺は舐めていた。エビワラーにはマツハパンチがある事を、だがスピードだけじゃ俺のプテラには勝てない！

「プテラ、つばさでうつつ攻撃を再開しろ！ 所詮はかくとうタイプだ。どれだけ攻撃されてもお前なら耐え切れる！」

「デイーラー！」

「それはどうかな？ エビワラー、みきりだ！」

「エツラー！」

プテラのつばさでうつつ攻撃はエビワラーのみきりによって回避された。

空手大王の実力は俺が思っている以上に強かったらしい。だが、まだ秘策は残っているんだ！

「プテラ、がんせきふうじをエビワラーの周りに落とせ！」

「エビワラー、スカイアッパーでがんせきふうじごとぶち壊せ！」

「エツラ！エツラ！」

「そのスカイアッパーを待ってたんだよ！プテラ、空中でつばさでうつつ攻撃！」

俺がそう言った瞬間に空手大王は口角を上げてニヤついていた。

「エビワラー、その攻撃を受け流してカウンターだ！」

エビワラーは空手大王の言う通りに左手を使って攻撃を受け流して右手で拳を握り床に叩きつけた。プテラは目を回しながら「デイー……ラ。」と言った。

「ふん、そのざまなら私のエビワラーには後のポケモン全部を出しても勝てないぞ？」

確かにそうだ、俺はポケモントレーナーとして舐めていた。エビワラーの一つ一つの攻撃の選択にどうしてカウンターを思いつかなかったんだ。それにあのエビワラーはつばさでうつつ攻撃を食らった癖にピンピンとしてやがる。あのエビワラーとは俺のフシギソウでも生半可な気持ちで挑んで負けているはずだ。俺はある事を決めた。

「空手大王、俺はまだこの世界でポケモントレーナーとしての経験が少なすぎる。少しの間だけ俺を一人のポケモントレーナーとして鍛えて欲しい！」

「ふん、その修行の果てに何を望むか。」

ふん、そんなの決まってる！

「俺は周りに上から物を言う権力とこの世界で一番を目指す為最強を手に入れる為に修行をする！ここで俺を鍛えて下さい！」

「良かろう！」

「いいんかい！」

若干ミカンさんも引いているようだ。すると、俺のモンスターボールからマサキさんが現れた。

「おいあんた！まだ早い、辞めといた方がええよ。こんな奴修行さして本当に権力と最強の座を譲ってしもたらこの世は終わってしまうわ！」

酷い言い草だな。俺ってそんなに悪どいか？

「ふん、このポケモントレーナーは修行をする理由がどうであれ強くなる事を願っている。そんな者に手を差し伸べない事をする訳がない。良かろう、名前はなんて言う。」

「ブルーです、一応今年で10歳になります。」

「ブルーか、少しの間だけよろしくな。」

「はい、あれ？なんか忘れてるような、無いような。」

「あのお、そろそろ良いですか？」

ミカンさんはそう言いながら、俺達の前に来た。

「そういえばミカン殿はここで待ち人として来ていたのだったな。もしかしてブルーと

待ち合わせしてたのかな？」

「はい、実は私を追いかけるストーカーの事について聞きたくて。」

「それなら大丈夫ですよ。このニドキングは少しの間好きにして良いぞ忍者娘！」

俺が言った瞬間マサキさんの方をみんな向くとマサキさんの頭上からダイビングしてくる忍者娘の姿が顔を表した。

「あ、貴方は！」

「よう、久し振りだなミカン姉ちゃん。私だよ、アンズ、覚えてない？」

「嫌、ただなんでアンズちゃんが私のストーカーなんてしてたのか分からなくて、」

「ストーカーじゃないよ。ミカン姉ちゃんがどこの馬の骨とも知らない男に取られたらすっごく私悲しいから父上に修行の旅をするって置き手紙残してずっとミカン姉ちゃんの近くに隠れてたんだ。」

と忍者娘のアンズはマサキさんを抱きしめながら言っていたが、コイツの頭正常か？  
ミカンさんの近くに隠れるって事はジョウトまで飛んで尾行してたって事だよな。怖  
!?

「理由がなんであれストーカーはダメだよ。今からキョウさんに連絡するから大人しく待ってるように！」

「そんな!？」

## へ、ザマアー！ 兄弟子（ダン）

忍者娘はあの後ミカンさんが呼んだキヨウというセキチクシティのジムリーダーによつて回収されたと思いきや、ジムリーダーキヨウは「修行の為だ、そこまでしてジユウトにも行ったのなら色々な所へ行き経験を積んでから帰って来なさい。」と忍者娘に言いその場を去って行った。あの人絶対親バカだわくと俺は思いながら俺はヤマブキ道場で今日から3日間ポケモントレーナーとして修行する事にした。

「おい、仮にも俺はお前の教育係を務める事になった。バトルの事は一旦水に流して一緒に修行をするぞ！」

俺にそう言つて来たのは最初にポケモンバトルしたモブ野郎1号君だった。

「あの、名前教えて貰つて良いかな？」

「口を慎めよ、良いですか？だ！仮にもお前の兄弟子なんだ。弟弟子のお前は俺より強かったとしてもそれだけは変わらねえ、因みに俺の名はダン、もう1人の弟子の名前はガンという。必ず敬語を使うように！」

そんな事をダン<sup>負け犬</sup>は言う<sup>負け犬</sup>と後ろから空手大王が来て、兄弟子の頭を片手で握った。兄弟子は握られた瞬間「あ…あアアア！」と言いながらすごい顔で呻いていた。へ、ザ

マァー!兄弟子ダ

「調子に乗るな、例えお前が兄弟子だろうとブルーに劣っている事には変わらないんだ。ブルー、兄弟子達には敬語など使わなくても良い。勿論私にもだ、師としては駄目なのだろうが私には敬語で言われても慣れなくてな。後、明日の夜この町のポケモンジムの相手を掛けたバトルが始まる。興味があるなら見に来て良いぞ、場所はここだな。」  
「え!?でも、この町のジムリーダーって確かエスパパータイプのナツメさんって人じゃないんでしたっけ。確か本人もエスパパー少女って言われててカントーのジムではとても強いと言われているとテレビでありました。」

「言いたい事は分かる、確かに私の使うポケモンはかくとうタイプだ。だが、私にもかくとうタイプで戦う信念があるのだ。どれだけ弱点があると言っても私は私なりの方法で戦うまでだ。それに、対策もちゃんとしている。」

対策?どんなポケモンを出すんだろう。俺は疑問を浮かべその日はダン雑とガン魚を指で数えられない程倒して賞金を手に入れた。2人共「今月の家賃が!」や「今月の給料が!」とか喚いていた。そこまで金があるなら「そこら辺の野次馬に喧嘩吹っかけて勝てば稼げんじやねえんじゃないの?」と俺は言うのと、2人は血相を変えて外へ出て行った。例え何が起こっても俺は関係ないと、ジュンサーさんに言っておこう。

次の日の夜

とうとうこの日がやってきた。ヤマブキシテイのジムリーダーの相続に掛けた試合がまさか見られるとは、でも観客が少ないな。現ジムリーダーであるナツメさんの方には1人の中年男性は畳の上に正座で座っていた。空手大王の所には俺以外の弟子が2人座っていた。俺は今回特別に弟子入りしているから観客席に座らなければいけないらしいが殆ど客がないので盛り上がりには少ししかける気がする。仕方ないので盛り上げ役としてマサキさんを出す事にした。

「何や? いきなり呼び出して、」

「今からこの町のジムリーダーを賭けてバトルするらしいので一緒に観ませんか?」

「ふーん、でも今回はいくら空手大王が頑張ってもタイプ相性で負けるやろうはずや。」

「俺もそう思ったんですが、そろそろ始まりますよ。」

空手大王とナツメさんは互いに礼をしてポケモンバトルが始まった。空手大王の出したポケモンは見た事がなく、俺のポケモン図鑑で認証しようとしても情報が入って来なかった。一方ナツメさんのポケモンも見た事がないポケモンだ。多分どちらもカントー以外の地方から手に入れたポケモンなのだろう。

「マサキさん、あのポケモンの詳細分かる?」

「ん? 嗚呼、空手大王の出したポケモンはイツシュ地方に生息しているズルズキンって言うてかくとうタイプとあくタイプを持ってんねん。だが今回は相手が悪かった。ナ

ツメはんの出したポケモンはシンオウ地方に生息しとるチャーレムつつうポケモンや。かくとうタイプと同時にエスパークタイプも持つとる。多分ナツメはんは空手大王がエスパークタイプに強いあくタイプのポケモンを出す事が読めていたんやろうな。」

成る程、つまり空手大王の対策ってズルズキンってポケモンだったのか。だが、ジムリーダーナツメさんもちゃんとその対策を取ってきたように見えるな。

### 空手大王視点

「ふん、どうやらチャーレムを持ってきて正解だったようね。」

「バトルはここからだ。ズルズキンは一旦戻れ!」

「へえ、何を出すのかしら?」

「ふん、この日の為にこのポケモンも捕まえたのだ。出てこいヘラクロス!」

「へえ、むしタイプね。確かに私のエスパークタイプはむしタイプに弱いけどそんなじゃ私の対策なんかにならないわよ。チャーレム、ほのおのパンチ!」

「ヘラクロス、こらえるで受け止めるんだ!」

「何をする気かしら。チャーレム、ほのおのパンチを中止していばる!」

「レム!」

「ヘラクロス!くそ、このまま続ける。メガホーン!」

「ヘラ!」

ヘラク罗斯は混乱しているが、なんとかチャーレムへツノを向けるが、………

コイツ（ナツメ） 確かテレビでも変態って言われてたよな。

「チャーレム、そのまま受け止めて！」

何をする気だ、エスパー<sup>ナ</sup>少女<sup>メ</sup>。

「気をつけるヘラクレス、すぐ後ろへ後退するんだ！」

「そんなスピードじゃ遅いのよ。チャーレム、カウンター！」

「レム！」

チャーレムのカウンターがしっかりと決まりヘラクレスは壁に吹っ飛び、床へ勢い良く倒れた。

「ふうん、まだ戦闘不能じゃないなんてやるじゃない。」

「こちらにはこらえるがあるからな。と言つても今は混乱状態、また返させて貰うぞ。」

「忘れて無いわよね？この勝負は2vs2のポケモンバトル、ズルズキンを出しても痛い目を見るだけよ。」

「それはどうかな？そのチャーレムはいばるとカウンター、それにほのおのパンチを覚えていた。俺の読みが正しいなら最後の一つにサイコネシスかとびひざげりのどち

「らかを覚えさせているはずだ。」

「まあ、貴方ももしかしてエスパー人間？」

「ただの勘だよ、本物のエスパー人間なら俺の出すポケモンはもう対策済みのはずだろ  
う？」

「それは、私を挑発してるのかしら？ だったらその言葉通りズルズキンもヘラクロスも  
私のチャーレムだけで倒してあげる！」

「そう簡単に行かないのがポケモンバトルの醍醐味なんだよ。」

「ズルズキン、きあいパンチ！」

「ズル！」

「チャーレム、とびひざげりで仕留めるのよ！」

「レム！」

「悪いがズルズキンにはパワフルハーブを持たせている。この意味が分からない君では  
ないだろう？」

「まさか!？」

「ズルズキン、特大のきあいパンチをチャーレムにぶつけるんだ！」

「チャーレム、きあいパンチをとびひざげりで相殺させるの！」

ズルズキンとチャーレムの攻撃が交わった瞬間俺とナツメのポケモンは相打ちで終

わった。

「どうやらヘラクロスのメガホーンが効いていたらしいな。」

「流石に焦ったわ、今回はチャーレム一体で勝てることは難しいようね。でも、私の優勢な事には変わらないわ。行くのよ、エルレイド！」

「エル！」

「ヘラクロス、少ない体力でお前の力を見せてやれ！」

「ヘラー！」

「貴方のヘラクロスは混乱の時に使ったメガホーンとこらえるを覚えさせてる事は明白、なら後はかわらわりときしかいせいと言ったところかしら？」

「それはエスパー少女としての実力か？それともただの勘か？」

「今回はただの勘よ。こんな公式戦で私だけ力を使うのはレツドカードじゃない？」

「ふん、だがどれだけ技が知られているところで俺のヘラクロスには勝てないぞ、きしかいせい！」

「悪いけど私はヤマブキジムを簡単に開け渡す事はしないの。エルレイド、サイコカッター！」

「悪いが、ヘラクロスの体力は僅かの状態のきしかいせいを耐えたポケモンは俺の前では一匹もない！」

「なら、私のエルレイドがそのきしかいせいに初めて耐えるポケモンだわ。」

「何を世迷言を！」

「実は私のエルレイドにはきあいのタスキという物を装備させてるの、その意味が貴方には分かるはずよ！」

「まさか!?!」

ヘラクロスのきしかいせいを受けてもなお立ち上がるといふ事だ。ヘラクロスがきしかいせいでエルレイドを真上に吹っ飛ばした瞬間、エルレイドはヘラクロスを睨み腕からサイコカッターを放ちヘラクロスに直撃した。

「つまり貴方の負けよ空手大王さん。残りの体力が低いヘラクロスは元々弱点の大きいエスパータイプの技を食らうと倒れるわ。」

ブルー視点

「凄い試合やったなブルー、聞いてるか？」

「え? あ、嗚呼!?! そうだな。」

「何や? 辛気臭い顔しやって。ほら、空手大王の所に行くで!」

マサキさんは俺の手を取って空手大王の所へ俺を連れて行く。俺はこの試合を見て思ってしまった。あの2人は強<sup>次元が違</sup>すぎる事に、あれで四天王よりも下と考えると俺は本当にチャンピオンになれるのだろうか?

「どうした？ さっきの試合で当てられてしまったか？」

俺にそう言ってきたのは空手大王だった。

「そんなに落ち込むな、確かに俺やナツメはブルーよりも強い。だが、それはお前よりも早く旅に出て、ポケモンの育成やトレーナーとしての経験がブルーよりも多いだけの話だ。今はただどのように強くなりたいかを考えるだけでいい、そしたら自ずと分かってくる筈だ。トレーナーとしての自分の成長がな、」

俺は気づいてしまった。確かに俺は2人のポケモンバトルを見て焦っていたんだ。強くなる事だけに拘るのではなくて強く思う気持ちも大切だという事がどれだけ大切なのか理解出来たような気がする。

「はい、なんだかすいません。最初舐め腐った口を聞いてしまつて、」

「その事はもう良い。明日からこのニドキングを修行させるのだろう？ 俺も手伝つてやるよ。」

俺はもしかすると、ポケモントレーナーとして良い師匠ナツメに出会はえたの負かもしれけない。  
俺はポケモンセンターに泊まる為ヤマブキ道場ジムから出ると誰かから声を掛けられた。

「君、空手大王の新しい弟子？」

ヤマブキジムのジムリーダーであるナツメが俺の顔を不思議マジマジと見てきた。

「あの、なんですか？」

「貴方、エスパータイプの技を持つてるポケモンがない？」

「え？ 嗚呼、一匹だけコダックというポケモンがいます。食いしん坊ですぐキノミがなくなるので通常はモンスターボールの中に入れてますが、それがどうしたのです？」

「その、ちよつと見せてくれないかしら？」

俺は思い出した。コイツナツメテレビでも変態って言われてたよな。

それ、犯罪ですよ。

俺はエスパ<sup>ナ</sup>ー少女<sup>メ</sup>に言われるがままコダックを出した。

「あの、俺のコダックに何か？」

俺がそう聞くと、コダックをムツとした顔で見ているエスパ<sup>ナ</sup>ー少女<sup>メ</sup>は「このコダック、貰って良いかしら？」と聞いてきた。

「コイツは俺が卵の時からポケモンセンターに預けて色々苦労しながら孵<sup>ヒ</sup>らせたポケモンです。そう簡単には渡せませんね。」

俺がワザとコダックへの思いを誇張<sup>嘘</sup>して言うと、エスパ<sup>ナ</sup>ー少女<sup>メ</sup>は「それは嘘ね。」と言ってきた。

「何故そう言えるんですか？」

「確かにこの子は貴方が卵の時から見つけてポケモンセンターに連れて行き孵<sup>ヒ</sup>らせたのは本当<sup>真</sup>のことなんでしようけど、色々苦労しながら頑張ったのはトキワシテイのジョーイさんとラッキーであって貴方ではないわ。つまり、貴方は嘘を付いていた事は私の前では明白なのよ。」

「へえ、テレビで聞いた以上に貴方<sup>エスパ</sup>の力は厄介<sup>厄</sup>だな。」

「今はその話は置いておくとするわ。それよりも、コダックを貰って良いかしら?」  
 「それは無理な相談ですね。」

「そう、それは困ったわ。この子は私が腕によりを掛けて育てたかつたけれど、貴方がそう言うならここは目をつぶっておくわ。」

このコダック、前にもお転婆娘から欲しいいつて言われてたよな。今回はエスパーク少女ときた、今度は一番会いたくない人にフシギソウが声を掛けられる可能性があるよな。あんまり関わりたくないんだけど、どうしよう。

「もし、一番会いたくない人を避けたいのなら良い案があるのだけど聞いてみる?」

「アンタ人のプライベートルにズカズカと入ってくるんだな。」

「あ、ごめんなさい。どうしても癖で他人の頭の中を見てしまうの。」

「それ、犯罪ですよ。」

「そう、ごめんなさい。どうしましょう、こんなに愛しいポケモンはなかなかいないわ。出来れば明日から一緒に生活したい所だけど、貴方がそう言うなら仕方の無い事なのだろうけど…。(まあ、この子自身の本当の親に出会えるまではあまりこの子に介入しない方が良さそうだろうけど。)」

「それで、聞きたい? 貴方が顔をバレずに回避する方法。」

「是非聞きたいです!」

「なら、少しお願いがあるのだけど、」

「一日だけならコダックを貸しますよ。」

「せめて1週間！」

「無理です。そんなにこの町で滞在する期間は後2日なので、」

「!?仕方がない、それでは、ポケギアに私の番号を教えるのでその時に伝えるわ。」

「分かりました。互いの利益の為、このコダックは明日の夜この場所で返してもらえれば構わないので、その時にお願ひします。」

「分かったわ、互いの利益の為…ね。」

俺はその日コダックの入ったモンスターボールをナツメに渡してポケモンセンターで寝泊りをした。

次の日

俺は朝早くに珍しく目が覚めてしまった。暇なので朝ご飯の前にヤマブキ道場<sup>ジム</sup>へ向かった。

「おはようございます、空手大王。」

俺は元気な声?で言うと、空手大王が大きすぎる声で返してきた。

「<sup>兄弟子達</sup>ダンとガンはどうしたんですか?」

「少し野暮用があつたと言ひ昨日の夜にこの町を出た。まあ、それは置いて早速修行を始めよう。ブルーはポケモンに何か持ち物を持たせた事は無いか？」

「俺が持たせてるのは基本的にお守り小判くらいですかね。1日のお金はそれで賄つてるようなものですし。」

「成る程、でもそれだと公式のバトルの時にはポケモン達の本領を發揮できないのでは無いか？」

「確かにそうですね。そう言えば空手大王は昨日のバトルで赤いハープをズルズキンに持たせてましたよね。アレは何ですか？」

「嗚呼、それはパワフルハープの事だな。パワフルハープはきあいパンチやソーラービームなどの少し時間をかけてためる技を直ぐに出せるアイテムなんだ。ヘラクロスにはウタンの実という食べるとエスパータイプの威力を一回だけ弱めてくれるキノミを渡していた。ポケモンに持ち物を持たせる事はその状況をひっくり返す事も出来るんだ。」

「成る程、ポケモン勝負は技や特性でポケモンバトルが決まると思つてましたけどアイテムにもポケモンバトルの勝敗が反映させるんですね。勉強になります。」

「それじゃあ一回このきあいのタスキをブルーのポケモンに渡して俺とバトルしてみよう。」

俺はマサキさんをモンスタールボールから出してバトルをしようと思ったのだが、何故かパジャマを着たマサキ<sup>ニド</sup>キング<sup>グ</sup>が横になって眠っていた。俺はそいつを起こす為に目覚ましタネ爆弾をする事にした。

お試しでわいを使うな！

俺はマサキさんを起こした後きあいのタスキを持たせた。

「なあ、こんなんで本当に一撃を防げるんか？このタスキには裏があつて難癖付けて売られていたんじゃないか？」

「大丈夫だつて、それにこれはお試しで使うだけだから。」

「嫌、お試しでわいを使うな！」

俺達がそんな会話をしていると、「そろそろ良いか？」と空手大王が聞いてきた。

「はい、マサキさんも準備満タンみたいですし！」

「んなわけ無いに決まつてるやろ！わい、そこまで強く無いから出来るだけ手加減して貰いたいんやけど……」

「それじゃあ、このポケモンを最初に相手してもらおうか。出てこい、カイリキー！」

そう言つて空手大王はカイリキーを出してきた。俺は勿論……

「任せたよ、マサキさん。」

「任せたよ、じゃないねん！わいの覚えている技わい自身知らんから戦うにも戦えないんや！」

「だったら手当たり次第に攻撃するぞ、マサキさん。にどげり!」

「くそ、こうなったらやけや!」

「ふん、ではこちらはばくれつパンチで行くぞ。カイリキー!」

「リツキー!」

結果は、マサキさんがドロップキックのように蹴りを入れようとしたがカイリキーの3本の腕で止められて右上の腕でマサキさんの顔面にばくれつパンチを放った。あれ食らったらメツチャ痛そう!

「ぐへ!、もうダメや。ギブ!ギブ!」

「大丈夫ですよマサキさん。きあいのタスキのお陰で体力がちよつとだけ残るらしいのでまだ戦えますよ!」

「悪魔か!こんな体張ってるのにまだ行けつて言うんかお前は!」

「当然!」

「もつと自分のポケモンを考えてくれるトレーナーにゲットしてもらいたかった!」

「ほら、コガネ弁が抜けてますよマサキさん。良いから早く立って下さい。敵は待つてくれませんよ!」

「あークソつたれ!イラつくわあのカイリキー、まだメスならボコボコにやられてもムカつかんがオスにやられるとイライラして力がたぎつてかるわ!」

もしかして、マサキさんの特性ってどうそうしんかな？同じオス同士だから力と特殊攻撃が上がる特性ならいまは好機だ。

「その怒りをぶつけるマサキさん、暴れる！」

「喰らえ！わいの力を良く味わえ！」

「リキ!？」

マサキさんはカイリキーと手を掴みカイリキーの下の両手から骨がボキ！と折れた音がした。

「今度は上の両腕や！」

マサキさんはカイリキーの4本の手を使い物にならないようにして、最後に両腕をぐるぐると振り回してカイリキーの頭や肋に攻撃した。すると、攻撃が効いたのかカイリキーはマサキさんの最後の顔面への頭突きで後ろへと目を回しながら倒れた。

「リツキ、」

「おら！オスには手加減せえへんからな、覚えておけ！」

無駄にガチギレしたマサキさんは言うだけ言って体力が尽きたのか横へ倒れてしまった。

「こんなポケモンバトル初めてみたな。」

俺もです。あんな理由で攻撃力上がるなんてマサキさんって意外と単純な奴？

「これでアイテムの必要性を感じて貰えたか?」

「はい、あんなにポケモンバトルではボコボコにされていたマサキさんでもやれば出来ることが分かっただけでも前へ一歩進めました。」

「ポケモン達をポケモンセンターへ運ぼう。話の続きはその時に聞くとしよう。」

「はい、(これでマサキさんもレベリングが出来そうだww)」

数分後マサキさんをポケモンセンターへ運び治療してもらうと、一瞬で傷が癒えたらしい。ジョーイさんの使っている機械凄く便利だな。俺はマサキさんをもう一度呼び出して朝ご飯を食べる事にした。

ポケモンセンター

「ねえマサキさん、ポケモンセンターって身近な所にいっぱいあるけど、どうやって便利な機械を手に入れたのかな?」

「ふん、それは大企業のシルフカンパニーやデボンコーポレーションが作って世界中のポケモンセンターに配布してる筈や。実はここだけの話、わいはポケモンを出し入れする為のあの誰かのパソコンはわいが作ったんや。凄いやろ!ぎようさん褒めちぎってええぞ!」

俺はマサキさんがニヤニヤしてる顔がイラついたので無視しようと思ったが、……ん?今誰かのパソコンをマサキさんが作ったって言わなかったか?

「マサキさん、俺と会うまでは何の職業についてたの？」

「なんやいきなり、まあ教えてやるわ。ブルーと会う前はポケモン研究所の機械の設備をやっとつたんや！」

「へえ、そうなんだ。(棒読み)」

「聞いた張本人が棒読みで返すな！」

「でも、それならポケモンの装備アイテムも作ろうとすればマサキさん作れたんじゃないですか？」

「いや、わいはポケモンじゃなくて機械に強かったからその世界で生きてこれたんや。この前の違う地方のポケモンが分かったのも一時期ポケモン図鑑の政策にわいも携わったからや。」

「どうせマサキさんの事だ、そこら辺の雑用を任せただけで終わったんじゃないやねえの？」

「ギク!? まあ、ただポケモンの生態についてパソコンで図鑑に載せただけやけどな。」

「それ殆ど何もしてないのと変わらなくね？」

「わいの苦労も知らんで何言つとんのや! 色々な地方の大企業から結局わいの苦労はお金に変わっていったんや。それだけでも凄い筈やで！」

「ごめん、話長すぎてわいのから聞いてなかった。」

「ふざけんな！」



言ってきた。コダックつて基本ボーっとしてるポケモンにしか思われなけれど、あのトレーナー<sup>ル</sup>は喋るニドキングに変わり者のコダックに変なポケモンばかり捕まえるのね。

「コダッ！（おい、オレは変じゃねえぞ！高貴な性格をしてるだけだ！）」ドヤ

私は胸を張るコダックが可愛くてつい携帯のカメラで連写してしまった。／／／／  
このくらい良いわよね。

「コダック、多分あのトレーナー<sup>ル</sup>は空手大王の元で修行してる筈だわ。邪魔になるから此処で私と一緒に今日の夜までいましてよ。」

「コダッ！（それならオレも一緒に修行する資格はある筈だ、面倒だけどあのタコ<sup>ブル</sup>はオレがいないと何も出来ねえしな！）」

「そ、そうなの？そこまで言うなら行って良いわよ。夕方には帰ってくるのよ！」

「コダッ！（分かったよ姉<sup>チ</sup>ちゃん<sup>メ</sup>）」

私は愛おしいコダックの後ろ姿をただ見守るだけだった。私今日の夜までしかコダックと一緒にいれないのにどうしてコダックのワガママを受け入れちゃったんだろ。もしかすると、子供を見守る母親の気持ちってこんな感じなのかもしれないわね。

〈数時間後〉

コダックが泥だらけで帰ってきた。理由を聞くと、あのトレーナールイの手持ちの喋るニドキングにヘドロ口ばくだんを覚えさせたらしいのだ。それをコダックは「そんなのやろうとすれば誰でも出来る！」と言ったらしく、それにブチ切れたニドキングがヘドロばくだんで攻撃してきたらしい。コダックもコダックでみずてつぼうを使つて喧嘩はヒートアップしたらしいけど、最終的にフシギソウのタネばくだんでニドキングとコダックは吹つ飛ばされフシギソウから喧嘩両成敗をされたそうだ。全く、こんな泥だらけの状態ではねんりきごっこも出来ないじゃない。私はコダックの体を綺麗に拭いて綺麗にしてあげた。

〈数時間後〉

時間はすっかり夕方になっていた。コダックとねんりきごっこをしてジエンガを積み上げたりトランプタワーを作ったりしたが、流石に時間の流れには私の力では対抗出来ないらしい。まあ、そんなの当たり前だが、……私はコダックと別れるのが寂しいのかギョツとコダックの身体を抱きしめて、「またね。」と言ひモンスターボールにコダックを戻した。約束の時間になり私はあのトレーナールイにコダックを返した。そういえば、あのトレーナールイにエリカから逃れる方法を教えるの忘れてたわ。後でポケギアで連絡しときましよう。

そんな事を言っても良いんですか？

俺は、マサキさんと朝の修行の休憩を終えた後またヤマブキ道場<sup>ジム</sup>へ戻る事にした。

ヤマブキ道場<sup>ジム</sup>

「ブルー、戻ったか。丁度良かった、」

「何か俺に用ですか？」

俺がそう聞くと、空手大王は手に持っている楕円形の何かを渡してきた。

「何ですかコレ？」

「知らないのか？ わざマシンだ。わざマシンとは、使用可能なポケモンだけが自由に技を変更出来る便利なマシンなんだ。中身はヘッドロバ<sup>わざマシン</sup>く<sup>3</sup>だ<sup>6</sup>んが入っている。ブルーのニドキングに良いと思って探したんだ。」

「わざマシンはどうやってポケモンに覚えさせるんですか？」

「それはな、コレを使うんだ。」

空手大王が持ってきたのはDVDプレーヤーだった。

「まさか、わざマシンってテレビに映像を写して覚えさせるんですか？」

「まあな、だが1つ使うとわざマシンは消えるんだ。本当は十分に使い道を考えて使う

のが良いんだが、ブルーの手持ちだと一番良いのはニドキングが一番だと思ってるな。」  
「コレ何分視聴するんですか？」

「5時間だ。別に人間への害はないからブルーも視聴して良いぞ。まあ、そこまで面白い内容が映っているわけではないんだがな。」

「分かりました。マサキさん、ヤマブキ道場のテレビを借りてやってみようか。」

「ええ、それ見るために5時間掛けないといけないうんて嫌や！」

「でも強くなれないよマサキさん。」

「わいは元々人間に戻るために一緒におるんや！バトルの為じゃないわ！」

「そんな事言つて良いんですか？今日の夕食をコダツクに全部やろうかな。」

「アホ！なんて酷い奴や、こんなブラツクなトレーナーの元でフシギソウ達がいるのが

可哀想や、今すぐポケモンを野生に返せ！」

「おいおい、フシギソウはフシギダネの頃に俺の元へと自ら来てくれたんだぜ。そんなポケモンが野生に返せる訳がないじゃないか。良いから言うことを聞くんだマサキさん。」

「ちえ、人間に戻った時に色々恩を返させてやるわ！」

「はいはい、わかったからすぐ覚えて来てください。」

〈5時間後〉

俺はポケモンセンターでマサキさんが来るまで待つていた。すると、顔色が真っ青になったマサキさんがポケモンセンターに入ってきた。

「どうしたマサキさん、ヘドロばくだん覚えれた？」

「多分出来ると思うで、それよりもおいしい水を飲ましてくれんか？」

俺は言われた通りおいしい水をマサキさんに渡した。マサキさんは一気に全部飲んで「プハー！生き返ったわ。」とイキナリご機嫌になった。

「わざマシンってどんな映像が映ってたんですか？」

「ただヘドロばくだんの使用の説明を長ったらしく5時間も聞いてただけや。あんなのわいじゃなかったら覚えるまで気力が持たんわ。」

へえ、今度違うわざマシンで見してみようかな。俺がそう考えている瞬間、ナツミさんの方にいるはずのコダックがポケモンセンターに入ってきた。

「コダック！」

「なんや？女の子から良くしてもらったやと!?!ふざけんな、わいなんてこんな奴と一緒にいなきやあかんのやで！羨ましいわほんと。」

あれ？もしかしてマサキさんコダックと意思疎通が出来てる？

「マサキさんポケモンの言葉分かるの？」

「まあな、ニドキングの体になってから色々不便な事もあったがポケモンと話す事が出

来るようになったらしいわ。」

「なら、コダツクは今なんて言ったの？」

「ナツメさんのところで良い事を一杯してもらった後、わいらの様子を見に来たんやと。」

「へえ、因みにナツメさんには言ってるのか？コダツク。」

「コダコダ。」

コダツクはそう言いながら首を縦に振った。

「良く許したな、ああ言う系の変な人達ってなかなか欲しいものを手放さないタイプの人間だと思ってたけど、」

「コダツ！」

「マサキさん、なんてコダツク言ってるの？」

「一緒にわいらと修行する為やて、でも安心せいコダツク。わいはヘドロばくだんを覚えてたさかい、コダツクよりも先に強くなったで！」

「コダコダ。」

「なんやて！ヘドロばくだんなんてやろうとすれば誰でも出来る!?!んな訳無いわ！ヘドロばくだんは体の中の毒素を口に溜めて……、」

「コダ。」

「な!?今どうせ雑魚が頑張ったところで意味はないやて!?ふぎけんな!わいのヘドロばくだん浴びて反省しろ頭に手を当てる事しか特徴のないカルガモが!」

「コダツ!」

「ふん、乗つたるわ!ま、どっちが強いなんて言われなくてもはつきりしてるがな。」

「なんかこの俺つて変わ珍つた奴獣ばつかゲットしてるな。別にゲテモノ集団なんて作ろうと思つてないんだけど。」

「お前には言われとう無いわ!」コダ!」

酷い言われようだな。

その後コダツクとマサキさんはヤマブキ道場へ戻って1v1でポケモンバトルをやるらしいのだ。相性的にはコダツクが有利だけど、どっちもどっちだと思うけどな。そうこうしているうちにマサキさんとコダツクの勝負は始まった。ヒートアップしてきたらフシギソウでも出せば良いかな?



ルーさんはこの世界の主人公責任者として責任を取ってくださいませよね？

「ユミお姉ちゃん、顔怖いよ。大丈夫？」

あ!?なんて事でしよう、オレンジちゃんから心配されてしまいました。そろそろ元の私に戻さないと、私は今日もブルーさんの家に泊まっていた。実はカツラのジジイからはもうクリームゾンバッチを手に入れたんですけど、トキワシテイのジムリーダーがなかなか帰ってこない為ブルーさんの家で泊まらせて貰っています。

「ユミちゃん、今日もごめんね。ブルーの部屋の掃除を今日も頼んじやって、」

「良いんですよ、叔母さん。私もこの部屋に寝泊まりさせて貰っていますからその分働かないと！」

「ユミちゃんはしつかりした子だねえ。ブルーもこんな子だったら良いけど、そうだとユミちゃん、ユミちゃんにその気があるなら良いけど………、ブルーを貰ってくれな……」

何という事でしょう。ブルーさんのお母さんから直接お願いされてしまいました。これは断る理由がありませんね、コレは仕方のない事です。私がこの世界のヒロインに相応しく無くても責めてブルーさんのヒロインになれるんならもう私は何でも構いません。どんなに嘸ませ犬キャラでも残念なオリキャラでもヤンデレキャラでもブルー主人公の嫁になれるのならそれはヒロインですよね。



だと思っていました。私は飛んだ思い違いをしていたようです。私のオリキャラとしての使命、それは主人公を愛せる者なのではないでしょうか。この世界の神は私にそのような使命を私に教えてくれたのではないのでしょうか。良いでしょう、私はブルーさんを愛してみせますよ。オリキャラとしてじゃなく、ブルーさんの彼女として、嫁として、妻として、ヒロインとして、私はその使命を全うする義務があるのなら、私はブルーさんを愛して真のヒロインでいる為に！

「夕食の用意出来たわよ！皆早く食べる準備しなさいー！」

どうやらブルーさんのお母さんが夕食の準備出来たようですね。これからブルーさんのお父さんとオレンジちゃんのお父さんの信頼を勝ち取る為にこの家で努力しなければなりません。いつかこの世界のヒロインでいられる為に私は今日も私はブルーさんの家で一日を過ごした。

なんや、どいつが来るかと思ったら爆弾ボールやないか。

ヤマブキシテイ

ブルーサイド

「ゼエ、ゼエ、まだまだ！」

「コダ、コダ、コダ！」

マサキさんとコダックは意外にも良い勝負をしていた。マサキさんはコダックからねんりきやみずてつぼうを駆使してマサキさんの弱点を突いていたが、しぶとく耐えたマサキさんは負けじと攻撃を繰り返している。

「おら、メガトンパンチ！」

「コダ！」

コダックの腹にマサキさんのメガトンパンチが急所に入ったらしい。コダックはよろけながらもしつかりと踏ん張っている。

「これで最後やコダック！」

「コダッ！（望むところだ！）」

「フシギソウ、2匹に向けてタネばくだん。」

「ソウ！」

「ぎゃー！」「コダーー！」

双方攻撃を合う前に2匹の戦闘に飽きた俺は、フシギソウをだしてタネばくだんで2匹の戦いを終結させた。黒焦げになった2匹は目を回しながら気絶していたのでポケモンセンターに運ぶ事にした。それから数時間が経ち、夕方の時間帯になるとコダックは自分でナツメさんの方へ帰って行った。

〈数時間後〉

その日の夜

俺は、約束通りナツメさんと約束をしたあの場所へと足を運んだ。

「あら？予定よりも遅くないかしら？」

「コダックへの最後の挨拶の時間をあげたんですよ。」

「遅れた言い訳なんて聞きたくないわ。でも、そうね。コダック、またね。」

ナツメさんはそう言いながらコダックを優しく首元に抱きしめると、コダックをモンスターボールへと戻した。

「ありがとね、またヤマブキシテイに来た時はコダックに会いたいわって伝えておいて。」

「分かりました。俺は明日の朝クチバシテイに向かいますので、また今度………ジム戦

で会いましょう。」

「ええ、その時は待つてるわ。」

俺はそう言い、ポケモンセンターでその日を過ごした。次の日の朝、俺は予定通りにクチバシテイへ向かう為、空手大王に声を掛けた後、クチバシテイへ向かった。

クチバシテイ

俺はクチバシテイに着いた後、すぐにクチバジムに向かうことにした。

クチバジム

「ようこそ、未来のチャンピオン！ここはでんきタイプを操る軍人帰りのジムリーダーマチスさんがこのジムリーダーだ。彼の前で挫折した者は数知れず、つい最近ツンツンの頭のグリーンという少年がマチスさんに勝ったが、君はどんな結果を残してくれるか期待して待つてるよ！」

グリーン？確か、ニビシテイのタケシさん相手に手こずっていたと聞いたけど、まさかもう抜かれていたなんて。さっきと追いつかないとあいつ上から色々物言うからな。それに、でんきタイプのジムリーダーって事はジム戦で初めてマサキさんの出番が出で来たという事だ。だが、逆を言うと、俺のポケモンはでんきタイプに弱い傾向があるから気をつけなさいといけないな。俺はそう思いながら、いつも通り奥の部屋へ入った。

「オオ、ヨクキマシタネ！コンカイノチャレンジャーハアナタデスネ。ワタシノポケモンタチハツヨクワタシノマエデヨクチャレンジャーハヒザヲツキマース。アナタハワタシノキタイヲウラギリナイデクダサイネ！」

めつちや喋るなこの人、まあそんな事はどうでもいいか。このジム戦でさっさと勝つてバッチ手に入れてやる。

「でんきタイプ相手ならこいつが有利だよな、マサキさん！」

「おっしやー！ワイに簡単に勝てると思うな元軍人！」

「OOH！シャベルニドキングナンテハジメテミマシタヨ。コチラハ、エレクトリックボールのマルマインヲダシマース！」

「マール！」

「なんや、どいつが来るかと思つたら爆弾ボールやないか。期待して損したわ、」

「ワタシノマルマインヲナメテイタイライタイムミルゾ、トカゲヤロウ！」

「ワイはニドキング……じゃなかった、マサキや！見た目はデカイトカゲだけどトカゲじゃないわボケ！」

「ソレデハ、シヨウブヲハジメマース！マルマイン、ソニックブーム！」

「マール！」

速!? マルマインがただ速く回転してるようにしか見えないが、マサキさんに連続で

0連発もソニックブームを当てて来た。

「なんやこいつ!? ソニックブームのせいではなかなか前に進まへん、どうするブルー!」

「まずはあなをほる攻撃だマサキさん!」

「ワイそんな技覚えてないわ!」

「良いから、その体なら簡単に地面を掘れるはずだ!」

「くそ、仕方なく従ってやるわ!」

マサキさんはそう言うと、地面に掘り進んで行った。

「フン、ジメンニニゲタトコロデイミノナイコトデース! マルマイン、デンジフユウ!」

「マール!」

なんだと!? マルマインが宙に浮いている。嫌、マチスさんはデンジフユウって言って

たよな。まさか!?

「マサキさん、早く地面から出て来てください。このままだと!」

「モウオソイデース! マルマイン、コウソクスピンデスナアラシヲオコスノデース!」

地面からどンドン砂が舞い始めて、マサキさんが地面から顔を出して来た。

「マサキさん、危ない!」

マサキさんは状況を把握出来ずに焦っていた。

「な、なんや!? なんでマルマインが宙に浮いとるんや!」

「マサキさん、早くそこから逃げて！」

「え？」

マサキさんはそう首をかしげると、後ろのマルマインの姿が消えていた。

「マルマイン、ソニックブームヲニドキングニレンゾクコウゲキ！」

ジムリーダーマチスとの悪魔の戦いはまだまだ続く。

ヘタレと童貞は関係ねえだろ!

「ハハハ！コレデオワリデース！」

くそ、見事にマサキさんはソニックブームをダイレクトに食らってしまった。マルマインのでんじふゆうとこうそくスピンで作り上げた砂嵐のこのフィールドだとトレーナーの俺もマサキさんが何処にいるのか分からない状態にもあるし、どうすれば………待てよ、マルマインはどうやってマサキさんに攻撃してるんだ？そもそも、マサキさんが何処にいるのか何故マルマインは分かるんだ？こんな砂嵐ではめをひらくことさえままならないのに………そうか!?

「マサキさん、砂が一番舞っている場所へ突っ込むんだ！」

「な!?!アホかブルー、そんな所へ行ったら自分からやられに行くようなもんやないか！」

「俺を信じろ、必ずなんとかいく！」

「ワイ、ブルー信じれんから嫌だ！」

おい！

「分かった分かった、マサキさんがそのつもりならこっちはこっちで対処法があるんだ

よ！マサキさん、アンタをニドキング好きの変態集団の所へ高額で売り捌く。それが嫌なら俺の言う事を聞け！」

「ブルー、それは自分の首を閉めとるようなもんや。例え変態集団でもニドキングのワイは貴重な存在の筈。そんなワイを変態集団でもブルーよりかは良い奉仕が待ってるに決まってるに違いないわ！」

「ポケギアからネット上で書き込みされているその集団の活動を見ると、雄のニドキングと雌のニドクインを毎日コウビを行わせているらしい。この言葉の意味が分かるかトカゲ野郎！つまり、余程ニドラン♂やニドラン♀の子孫を沢山欲しいらしいぞ。それに、人間の言葉を喋るニドキングなんてのをやると、もつと最悪な結果を招く事にもなるかも知れねえしな！」

「ブルー、やつばお前人間じゃないわ！お前は人間の顔を偽った悪魔や！」

「俺の方がニドキング好きの集団の方がまだマシだと思っけど？」

「そんな奴らの所へワイを高額で売り捌こうと考える事自体ニドキング 好きの集団よりも危ないわ！」

「ツベコベ言わず言う事を聞かないと危ない目に合うぞ。」

「クソ、この鬼畜！、悪魔！、人外！、犯罪者！、ヘタレ！、童貞！」

「ヘタレと童貞は関係ねえだろ！いいからさっさと砂嵐の方向にメガトンパンチ！」

「アーーー! チクシヨウ。ブルー後で覚えとけ、メガトンパンチ!」

マサキさんはそう言いながらも砂嵐の方向にメガトンパンチを放つ。

「ヤットコウゲキシテキマシタカ。マルマイン、コウソクスピンでスナアラシヲオオキクスルノデース!」

「マル!」

「マサキさん、メガトンパンチで砂嵐の中心へ移動出来るか?」

「クソ、砂嵐の壁が厚すぎてメガトンパンチ程度じゃ一瞬しか通る道が作られへん。どうするブルー!」

「だったら、ヘドロばくだんを砂嵐へ出来る限り放つんだ!」

「ナニヲスルツモリカハワカリマセンガムダナコトデース! マルマイン、コウソクスピンノカイテンヲモットモットアゲテクダサーイ、ハリーアップ!」

「ペー! ペー! 口の中に砂が入って来おったわ、こんな事して意味あるんかブルー!」

「嗚呼、そのまま続ける!」

マサキさんは「嘘やろ!」と言いながらもヘドロばくだんを続けて砂嵐に向けて発車している。そろそろ頃合いかな?

「ソロソロキメマース! マルマイン、ニドキングヘカイテンシナガラツツコンデクダサーイ!」

「マル！マ、マル！」

すると、突然マルマインのこうそくスピンの止まってしまった。

「ナ、ドウシタンデスカマルマイン！」

マルマインは、目の下が紫色に染まって目を回していた。

「コレハ、ジョウタイイジョウ!? デモ、アノシユンカンマルマインヲポイズンデオカスコトナンテ……マサカ!？」

「そのまさかですよ、マサキさんにヘドロばくだんを只無駄に出していたわけじゃない。砂嵐のお陰でヘドロばくだんの毒素がマルマインの周りに舞っていたんだ。マチスさん、貴方はそれを気付かずずっとマルマインにこうそくスピンをやらせていたんだ。」

「イツカラマルマインガスナアラシノチュウシンニイタトワカツタンデスカ?！」

「貴方がこうそくスピンをマルマインに命令した時からですよ。俺がもしマルマインなら台風の目と同じようにマルマインが砂嵐の中心にいれば砂嵐のお陰で自分の姿も隠れさせて、もし攻撃して来たポケモンがいるとしても砂嵐を使って返り討ちに合わせれる事が出来る。実はマチスさん、俺は貴方のポケモンの戦い方を俺も昔から考えてました。俺はそれをやろうと思ってポケモン達と練習しましたが、なかなか上手く出来なくて途中で諦めかけていましたけどね。そりゃあここに来るチャレンジャー達が膝をつく訳だ、攻略する方法なんて普通浮かばないからな。」

「シヨウジキアナタヲワタシハナメテカカリマシタ。シカシ、ジツハコノマルマイニング  
ホンメイデハナインデース!」

「「え?」」

俺とマサキさんは口を揃えて首を横に傾げた。

「カモン! ライチユウ、アナタノデバンデース!」

「ライラーイ!」

「あの、さっきのマルマインが本命じゃないってどういう事ですか?」

「ハハハ、マルマインダケデアアナタノヨウナズルガシコイアタマヲモツヒトタチニト  
キドキタオサレテシマイマース。シカシ、マルマインニカツタトコロデコノライチユウ  
ノパワフルナワザニヨツテチャレンジャーノココロヲナンドモブレイクシテキマシタ。  
アナタモソノチャレンジャータチノニドマイトナルノデース!」

マサキさん口だけの野郎になっちゃった。

「マサキさん、ライチュウ相手に大丈夫ですか？」

「ふん、ワイはたかが電気ネズミ程度に遅れを取らんわ！」

「ソノコトバオボエタゾ。オマエラクダケノヤロウニシナイデクレヨ！」

「嗚呼、上等や！」

「先行行くよマサキさん、メガトンパンチ！」

「ライチュウ、アイアンテールデブツブセ！」

マサキさんのメガトンパンチとジムリーダーマサキのポケモンであるライチュウのアイアンテールはライチュウのアイアンテールがマサキさんのメガトンパンチを上回った。

「ラーイ！」

マサキさんは、アイアンテールをダイレクトに食らって一撃で目を回しながら気絶した。

あーあ、マサキさん口だけの野郎になっちゃった。でも、あのライチュウでんきタイプじゃないとはいえアイアンテールの威力だけで空手大王の持ってたヘラクロスのメ

ガホーン以上までとはいかないがかなりの威力が出ていた。でんきタイプ技も持つてあるとすれば、かなりピンチだな。マサキさんだけでも結構アレでも頼りにしていたが、後はコイツしかいないな。

「いくぞ、フシギソウ！」

「ソウ！」

「ホーウ、クサタイプノポケモンデスカ。アイシヨウガドレダケワルクテモワタシノライチユウニハイミガアリマセーン！」

「それはどうかな、フシギソウたいあたり！」

「ライチユウ、ボルテッカー！」

「なんだと!？」

ボルテッカー!?!ピカチュウの最強だと言われる技の1つだ。フシギソウは真正面からぶつかり吹っ飛ばされた。

「フシギソウ、大丈夫か!？」

「ワタシノマエデハイカナルポケモンデモワタシノライチユウニハカテマセーン！」

クソ、どうする。フシギソウの体力はまだあるとはいえまたライチユウのボルテッカーをまともに喰らえば必ず瀕死になるだろう。さて、あのライチユウをどう攻略すればいいのか。せめて近づけなければ問題は無いんだが……

近づけさせない方法・・・クソ、一か八かだ！

「フシギソウ、ライチュウに向かってもう一度たいあたり！」

「ナンドキテモイツシヨデース！ライチュウ、ボルテッカー！」

良し、乗ってくれたか！

「フシギソウ、ライチュウが前に来た瞬間横へ飛べ！」

「ソウ！」

「ナ!?ライチュウ、アイアンテールデシツポヲジメンニサシテクダサーイ！」

「ライ！」

ライチュウはアイアンテールで雷の尻尾を地面に刺したまま身体中の電気エネルギーを地面に逃がしながらギリギリ壁の前で止まった。

「今だフシギソウ、ライチュウに向かってたいあたり！」

「ソウ！」

「ライチュウ、タエテクダサーイ！」

「ライライ！」

ライチュウは体を守るように両手を胸の前でクロスして、ダメージを最小限に減らした。

「ナント、アナタナカナカヤリマスネ。ソノズルガシコイチエグレイトデース！ナマエ

ハナンテイウノデスカ？」

「俺の名前はブルーと言います。どんなにやる事が汚くてもこれが俺のやり方です！」

「ソノオレナイソウルキニイリマシタ。ゼンリヨクデブルー、アナタヲオス！」

「フシギソウ、逃げながらタネばくだんをライチユウに発射！」

「ライチユウ、デンコウセツカデタネバクダンヲカワシナガラトドメノボルテツカー

デース！」

「フシギソウ、伏せろ！」

「!? ナニヲスルキカシリマセンガコレデオワリデース。ソノママフシギソウニツツコン

デクダサーイー！」

「今だ、頭を上げるんだ！」

「ソウ！」

フシギソウはタイミングよくライチユウの体を上に飛ばした。

「ライ!？」

「そのまま真上にタネばくだん！」

「フツシャー！」

フシギソウはタネばくだんをライチユウに至近距離で当てて気絶させた。

「ラ、ライ……。」

「OH NO! ライチユウ、ダイジョウブデスカ?」

ライチユウはジムリーダーマチスさんに体を支えられながらも「ライ、」と言いながら返事をした。今回もギリギリで勝利したが、ホント今回のライチユウがボルテツカーを使つて来たのが驚いたな。3体目がいたら流石にやられていた。

「ブルー、トテモクヤシイデスガワタシニカツタコトヲタタエオレンジバツチヲユーニ  
プレゼントシマース。」

「ありがとうございます。あの、ここに来たグリーンつてチャレンジャーが来た時どんなポケモンを出してましたか?」

「アノツンツンアタマノシヨウネンデスネ。カレハサンドパンイツタイデワタシノポケモンヲオシマシタ。ホント、ドウヤツテアソコマデポケモンヲソダテタノカキイテミタイ!」

サンドパン一体だと、こつちにマサキさんがいたとしてもここまで追い詰められたんだ。どうやったたらそこまで強くなれたんだ?

「コノマチデハサント・アンヌゴウトイウゴウカキャクセンニノレマスノデゼヒノツテミルトイイデース! ソウダ、ワタシジツハサント・アンヌゴウノキャプテントシリアイデフネノチケツトヲモツテマスガコノトオリポケモンジムノジムリーダートシテココデハタライテイルノデナカナカヤスメマセンノデアナタニコノチケツトモプレゼント

シマース。」

「え!?!俺なんかの良いんですか?豪華客船のチケットですよ。」

「アトフタツアルノデヘイキ!サント・アンヌゴウノキャプテンニヨロシクイツテテホ  
シイ!」

俺は、ジムリーダーマチスからサント・アンヌ号のチケットを貰うことにした。

え？俺そんな奴いねえよ。

サント・アンヌ号

俺はブルー、今はクチバシテイのサント・アンヌ号という豪華客船に乗っている。何故そんな船に乗ってるか聞きたい人は前の話を見れば分かります。俺は何故そんな豪華客船に乗っているかと言うと、あるお使いをクチバシテイのジムリーダーマチスさんからお願いされたからだ。と言っても、ただ挨拶するだけなんだが、あれ？あそこにいるツンツン頭で性格までツンツンしてそうな奴を俺は見つけてしまった。ここは、どうか見つからないように何処か安全な所へ避難を……

「そんな所で何やってんだよブルー、サント・アンヌ号にいるって事はジムリーダーのマチスさんに勝ったんだろ。オレンジバッチを持つもの同士ここはバトルしようぜ。」

「話進めすぎだ緑のツンツン、お前ニビシテイでタケシさんに一発目で挑戦して負けた癖にどうやってここまで追いついたんだよ!？」

「色々努力して強くなったんだよ青の怠け者!」

「怠けてねえし、ちゃんと努力して強くなってるし、お前よりも身長高えし、」

「最後の身長は何処で張り合ってるんだよ。それよりもポケモンバトルやろうぜ!」

「お前な、仮にもサンドパン一体であるマチスさんをボコボコにしたんだろ?俺はギリギリで勝てた時点でグリーンとの差は明確だろうが!俺をこれ以上傷つけんなよ!メタルまでボロボロになるだろうが!」

「勝手に喋って勝手にキレんなよブルー、それに今俺の持つてるポケモンの中でサンドパンが一番強い訳でもねえし、そこまで俺を高く評価する必要はねえぞ。」

「それはどうかしら?」

俺とグリーンの会話を途中で割って来たのはグリーンの姉であるリーフだった。

「どうしてお前がこんな所にいるんだよ!」

グリーンは強めの口調でリーフに聞いた。

「あら?久し振りに会ったのに歓迎されないなんてお姉ちゃん悲しいわ。」

「御託はどうでもいい!何故お前がここにいんだよ。ジョウトのお嬢様学校から戻った後研究者になるって散々言ってた奴が普通ここに来る事は無いはずだ。」

え、そうだったの!?

「こう見えてもオーキド研究所の娘としてサント・アンヌ号に招待されたの。ほら、これ招待状。何か文句ある?」

「ちー、そういう事かよ。」

グリーンはそう言うのと、浮かない顔で俺達の前から姿を消した。

「グリーンと喧嘩でもしたのかよ自称研究員の卵さん。」

「煩いわね、グリーンとはそこまで喧嘩する間柄でも無いわよ。それに、あの子があそこまで私と会話したの久し振りにでよく分かんないし、」

「久し振り？ 仮にもアンタの弟だろうが。嫌でも話はするんじゃないのか？」

「生ゴミはいつから私にそんな偉い態度を取れるようになったのかしら？」

「ポケモンバトルして勝ってから。」

「いきなり嫌な思い出思い出させないでよひとでなし！」

「ひとでなしはお前も言えねえだろうが暴力女！ ロケット団に捕まった時危うくポニータの炎のタテガミで焼け死ぬ所だったわ！」

「それはとても良いじゃない。あの時が私の中で一番の良い思い出トップ3に入るほど気持ちが良いかったわ。主に貴方の泣きそうな声で「分かりました！ 分かりました！ なんでも言うこと聞くからそれだけは勘弁を！」って言っただのはサイコーだったわww。」

「俺の中で一番良い思い出になったのはリーフがフシギダネ同士のポケモンバトルで俺が勝った時俺にバトルで何故負けたのかを一々説明した時のお前の絶望した顔が最高だったよww。」

「……………」

今思えば俺達何してんだろう。

「話を戻すけど、他にグリーンの中で思い当たる事は無いのか?」

「無いわけでもないけどさ、でもアレは……………」

「もしかするとグリーンが傷ついた可能性がそれにあるかもしれないねえだろ。何があったか言ってみろよ。」

「別にそこまででは無いけど、ただグリーンが毎年誕生日になる度に私がグリーンの貰ったプレゼントを独占してたくらいかな?」

「はいアウト!野球で言うスリーストライクだよ!そりゃあグレるよ、誕生日に貰った大切なものを身近な姉に取られるなんて可哀想なグリーン。」

「ちよ!?!少し借りただけよ、少し……………」

「どのくらいの間?」

「ジ、ジョウトに留学してた期間…かな?」

「おい、俺が旅に出るまでマサラに引越して来たのはまだ俺が5歳だった。と言う事は5年間この馬鹿女は弟の誕生日プレゼントを借りパクしてたのかよ!やべえよ、この女自意識高すぎだよ!何がちよつとだ、5年間も借りパクすんなよ!どうせリーフの事だ、グリーンに謝ってもいねえんだろ。」

「……………」

「え!?マジで、」

「何、悪い!」

「この女救えねー!」

「何よ急に!私は何処で何をしようがアンタには関係ないじゃない!」

「へえ、そんな事言うんだ。」

「ウザ!……ふん、私知ってるんだからね。貴方のガールフレンドが貴方の家に住んでる事くらい。」

「え?俺そんな奴いねえよ。」

「……………それマジで言ってるの?」

「うん、マジマジ、マジと書いて本気って言うくらいマジ。」

「はあ、ユミちゃんの気持ち分からない奴に私とグリーンの間に入ってこないでよ!

この、鈍感男!」

うるせえ、ぶっ殺すぞ!

あの後リーフと別れて、俺は食堂へ移動した。

「なあマサキさん、アンタはポケモンフーズのコーナーがあるからそこで食って来いよ。ここ人間用だよ?」

「ワイも人間や!」

「ニドキングの間違いだろ、昔は人間でも今はポケモンなんだ。ちゃんルールを守ってくれないとモンスターボールにマサキさん入れて海に落とすよ。」

「何さらつとエゲツない事言ってるねん!まさか、本気じゃないやろな……。」

俺がモンスターボールを片手に持ち、マサキさんに見せつけるように握るとすぐにポケモンフーズを食べに行ってくれた。

「相変わらず変なポケモンゲットするよなブルー。」

俺の前でそう言いながら炒飯を食ってるレッドが言ってきた。

「そうなんだよな、っていつからいたんだよレッド。お前もマチスさんに勝ったのか?」「まあな、ついさつきグリーンとポケモンバトルしてポコポコにされたところだ。アイツただえさえ俺の金が少ない事知ってるくせにおまもり小判をポケモンに持たせて来

るんだぜ、これで俺の全財産は20,000円しかないよ。」

「結構ある方じゃん、どうやってそこまで金を稼いだんだよ。」

「確か、ここに来る前にダンとガンって2人組から肩がぶつかつたってなんかクレーム付けてきてポケモンバトルしろ!とか言われてやったはいいものの2人共俺に惨敗して金がたんまり入ったんだ。最近ジムバッジ持つてるだけでなかなかポケモン勝負の申し出が来ないから少し経済的にもピンチだったんだけど助かったんだよな。まあ、結局俺はジュンサーさんにその事を話すと2人共署へご同行してもらったけどさ。」

あの2人ホント何やってんの?確かにそこら辺の野次馬なんかに声かけてポケモンバトルすればってアドバイスしたけどさ、一般のトレーナーに負けてたらキリないしジュンサーさんに歩道されてたら終わりだよ。その内あの2人は金稼ぎの為にジュンサーさんというサンタさんがパトカーというソリを持ってきて刑務所行きというプレゼントを貰うかもしれないな。まあ、俺には関係ないか。告げ口したのは俺だけど別大丈夫だよな。

「なあレッド、こんな所で持ち手のポケモンが全て瀕死の状態で大丈夫なのか?」

「嗚呼、そういう事なら大丈夫だ。このサント・アンヌ号ではちゃんと下の階にジョーイさんがいるからそこでポケモン達を元気にして貰っている。後でブルーにもバトルするって言ってたから気をつけろよ。多分有り金全部寄越せって言われるぞ。」

「嗚呼、その事なんだけど……、」

俺はついさつき起こった出来事をレッドに話した。

「へえ、ここにリーフさんも来てたんだ。まあ、あの2人が顔を見合わせるなんてなかなか無いからな。マサラタウンではオーキド博士が2人の仲裁をして止めてたけど止まるどころかボコボコになって帰って来てたからなく、」

「なんか想像出来る。それで「孫達がわしを構ってくれん!」とか言つてイジケル姿が目に見えよ。」

「まあ、その内なんとかなるだろう。」

「やけに樂觀的だな。もしかして、2人の仲裁をせずに言い合つてる姿を見ながら楽しむタイプ?」

「お!? 遂にお前もその気持ち分かってくれるか?」

「分からねえし、分かりたくもねえよ。それより、最近俺の実家で俺のガールフレンド? が住み着いてるらしいんだけど何かレッドは連絡あったか?」

「特に何も、どうせ昔のスクールの同級生なんか茶化しに来たけど留守だっただけの面倒な奴等なんじゃねえの?」

「そうだと良いんだけど、まあ今考えられる人は思い浮かばない訳では無いんだけど……ハア。」

「なんだよため息ついちゃって、そこまで嫌な思い出があるのか?」

「まあな。今じゃもう記憶の片隅に眠ってて欲しかったんだけど………やつぱり行かないか?」

「なんかあんのかよ?」

俺は苦笑いをしながらレッドに答えた。

「まあな、」

「隠さずに教えろよ。ほら、誰にも言わないからさ!」

「俺レッドの事信用してないから言わない。」

「そんな事言わずに、教えろよ。まさか!?俺に関係なしで何処の馬の骨とも分からない女ともう一線を超えてるとか!ブルーったら、だ・い・た・ん・。」

うるせえ、ぶつ殺すぞ!

「まあまあ、そう邪険にならないでよ。ブルーの旦那、ここは俺が力になりやすから。」  
「お前段々キナ臭いキャラになって来てるぞ。」

俺がそう言った瞬間船が左右に大きく揺れた。

「「「「うわあー!」」」」」

上から声がする、何があつたんだ?俺はそんな疑問を胸にポケモン達をモンスターボールに戻してレッドと一緒に上へ上がった。外にいたのは、ギャラドスだった。

「何故こんな所にギャラドスがいんだよ!」

「俺が知るか! 誰か、誰か助けてくれ!」

「もうおしまいだー!」

周りの人達がそう叫ぶ中俺はギャラドスをポケモン図鑑のカメラ機能で生態を確認した。

『ギャラドス、凶悪ポケモン。肉食性で、極めて破壊的で凶暴。稀にコイキングの赤い鱗を持ったギャラドスも目撃されている。』

まじかよ、肉食性で破壊的なんて合わさつちやいけない単語が並んでんじゃねえか! 「その君、そこから逃げなさい!」

そう言いながら俺の前に飛び出たマント男はモンスターボールからカイリユーを出した。あれ? この人もしかして……

答えになつてねえよ！

ギヤラドスの前に立ち上がったマント男はカイリユーを出した。

「カイリユー、ギヤラドスをここから遠くに移動させるんだ！」

マント男はそういう言くと、カイリユーはコクンと相槌をしてギヤラドスの側へ飛び迫った。ギヤラドスは、カイリユーが近づいて来た途端にれいとうビームをカイリユーに向けて飛ばすがカイリユーは拳を握りながらまだ追いつかない程のスピードでギヤラドスのれいとうビームを交わして握った拳をギヤラドスの額に向けて放った。

「ブオーーーーン！」

ギヤラドスは攻撃を喰らい叫びながらも、今度はりゆうのいかりを

サント・アンヌ号この豪華客船へ向けて放とうとしている。あれ？これ思ったよりもヤバイ!?俺が一瞬そう感じて慌てている間にマント男は「大丈夫、私のカイリユーは世界一強い。」と言いながら顔をニヤつかせている。「アホ！世界一強いって言うんならチャンピオンにでもなつてから言え！」と、俺はこの時声を上げるとマント男は「それじゃあチャンピオンの力を見せてあげよう！」と言ってきた。あれ、……………今なんて言つた？チャンピオンの力を見せてあげよう？なんかテレビでこの人の衣装見たことあるよなくと俺はぼ

けつとマント男の顔を見ていると、マント男は「カイリユー、雲まで上昇して一気に決めるぞ!ドラゴンダイブ!」

俺は思い出した、現在チャンピオンにして最強のドラゴンカイリユーを扱うトレーナー、ワタルの事を……やべえ、俺チャンピオンに向かつて世界一強いつて言うんならチャンピオンにでもなつてから言えつて失礼な事言ってしまった。許してくれるかな?俺がそう考えてる途端にカイリユーは空高くまで飛び上がり、青いオーラを身に纏いながらギョラドスに接近していた。ギョラドスは、船からカイリユーに的を変えたのかりゆうのいかりをカイリユーに向けて放つた。カイリユーはりゆうのいかりを物ともせずギョラドスに突撃した。

「バツシャーーーーー……」

俺達の乗つてるサント・アンヌ号までカイリユーのドラゴンダイブで作り出した津波に押し寄せられていた。周りの人達は「もうおしまいだー!」とか、「アルセウス様、どうか私達を救ってください!」とか、「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!」など言っている人達が周りにいたが、結果は全員無事だった。何故ならカイリユーが片手でサント・アンヌ号を持ち上げながら飛んでいるからだ。このカイリユー何者?俺がそう考えてる間に、現チャンピオンは俺の元に歩いてきた。

「どうだいその少年。チャンピオンの力を見た感想は、見た感じ君もポケモントレー

ナーだよ。実はお願いがあるんだけどちよつと来てもらえるかな？」

と言ってきた。はあ、なんだろう…俺嫌な予感しかないんだけど。俺は現チャンピオンに連れられるがまま後を追うと、現チャンピオンはモンスターボールを片手に持っていた。

「あの、ポケモンバトルはしませんよ。勝敗は明らかですし。」

「君は変わった子だね、勝負を挑まれたら大抵のポケモントレーナーは俺とバトルがしたいと迫ってくるんだが、」

「俺は勝てない勝負をしない主義なので、お願いってコレですか？なら、もう俺戻りますよ。」

俺はそう言い、この出来事を無かったことにしようと考えていると現チャンピオンは「待ってくれ、ポケモンバトルがしたいんじゃないかと、このポケモンを貰ってくれないか交渉したいだけなんだ！」と言ってきたので、俺はため息をつきながらジト目で現チャンピオンの方へ目を向けた。

「どんなポケモンですか？」

俺がそう聞くと、現チャンピオンは「トレーナーの元を自ら去ったポケモンなんだ。」と言ってきた。コレは珍しい、普通ならトレーナーが弱いと自分のポケモンを決めつけて去っていくがポケモン自らがトレーナーの元を去るなんてなかなかない事だ。

「これから君のトレーナーになるかもしれないんだ。出ておいで、ミニリュウ。」

そう言いながら現チャンピオンはモンスターボールからミニリュウを出した。俺は「何故このミニリュウは自らトレーナーの元を離れたんですか?」とチャンピオンに聞くと、「それは今から話すつもりだ。」と答えた。

「もし、俺の元をこのミニリュウが離れたらどうするんですか?」

「それはないんじゃないかな?」

「何故そう言い切れるんですか?」

「君の事をヤマブキ道場の空手大王さんから聞いてるからだよ。」

「え?」

「いきなり言っても困るよね。このミニリュウ元々は、空手大王さんの弟子のポケモンだったらしいんだ。だけど、そのトレーナーはロケット団の手でこの世を去ってしまった。ミニリュウはその時空手大王さんの元に預けられていたんだけど、いつまで経っても自分のトレーナーが帰って来ないから自分は捨てられたんじゃないかと勘違いしたミニリュウは自らヤマブキ道場を去って行ったんだ。空手大王さんからその事を聞いた俺はそのミニリュウを最近こちら辺で発見したと報告がありクチバに向かうとこの船サントアンズ母でこのミニリュウを見つけたんだ。偶々空手大王さんから君の話聞いていたから俺は君を選んだんだ。ミニリュウのトレーナーにする事を、」

「それと俺からこのミニリュウが離れない事は何の関係が？」

「それは、君が空手大王さんの弟子だからかな。」

俺はこの後「答えになってねえよ！」と現チャンピオンに不満をぶつけたのだった。

やべえ、貰うの断れば良かった。

「それじゃあそのミニリュウの事頼んだよ。」

俺は結局ミニリュウを手持ちに加えることにした。何故ならこのミニリュウ俺の首にまとわりついて離れてくれないから仕方なく了承したのだった。

「なあ、なんで俺の首元に巻き付くんのだ？下手すると俺の首がポツキリいつて死んじまうぞ。」

俺がそう言っても、ミニリュウは俺の首元から離れてくれない。

「仕方がない、こういう時はポケモンになったマサキさんと呼ぶか。」

何故マサキさんと呼ぶかというと、マサキさんはニドキングの体になってからポケモンと会話できるようになっていたらしい。ホント、どこに向かってんだあの人。俺はそう思いながらマサキさんをモンスターボールから出した。

「なんやブルー、こんな時に呼び出してなんか用か？」

「実はマサキさん、……………」

俺はマサキさんに現チャンピオンからミニリュウを託された事、ミニリュウの過去の事、ミニリュウが俺の首元に巻き付いて離れて欲しい事を説明した。

「へえ、また変わったポケモンをゲットのかブルー。あ、一応言っとつけどワイは変わったポケモンの中に入ってあらへんぞ！」

「マサキさんが自分から言い出した癖に自分で否定するのはどうかと思うぞ。それに、俺の手持ちでは良い意味でも悪い意味でもアンタは絶対に変わったポケモンの称号を世界中の人達から貰えると思うよ。それより、このミニリュウなんとかしてくれないか？首元がどんどんしまつていつてそろそろ限界なんだが、」

「という事や、何故この変態の首を締めてるのか聞きたいんやけどええか？」

それからミニリュウは俺の首元から離れてマサキさんの腕に巻き付いた。あゝ、あと少して首が本当にしまつて殺されるところだった。思ったんだが、ミニリュウがハクリュウに進化しても俺に巻きつかないよな？やべえ、貫うの断れば良かった。

「大体の理由は分かったぞブルー、このミニリュウはイタズラ好きでなんでもモンスターボールの中に入るのを嫌つとるそうや。それに前のトレーナーの首元に良く巻き付いて困らせていたらしくて、それ以降何かに巻き付く癖が付いてしもたらしくて今後もよろしくと言つとるぞ。」

絶対によろしくしたくねえ！

「お前進化したら絶対に巻き付くなよ！良いか！絶対だ！何故巻き付いちゃいけないのって目をキラキラさせてお願いしても駄目だ！理由は俺の首が閉まるからだ！ミニ

リュウの状態だったらまだ許してやるがそれ以降俺の首元に巻きつかないって約束出来ないなら大人しくモンスターボールの中に閉じこもって貫うからな！」

「リュウ！」

「このミニリュウ人懐っこい性格しとるから前のトレーナーから離れた途端とても悲しかったらしいさかい、ブルーの体に進化しても首元以外でもいいから巻きつかせてくれって言つとるぞ。」

「ふざけんな！ワガママ言う子はモンスターボールに入つとけ！」

「リュウ！リュウ！」

「そんなくらい良いだろケチンボだつて言つとるぞ。どうするんやブルー、ミニリュウも引く気は無いらしいぞ。」

えー、でもミニリュウならともかくハクリュウだと腹、腰、腕、全て重くて動けないしな。あ、そうだ！

「なら、俺もミニリュウが進化したらテメエ社畜人生が待つてるからな！後悔しても遅えぞー！」

「リュウ！」

「俺強いから問題ないつて言つとるぞ。」

「言つたな、じゃあこれから勝てる可能性が限りなく低いトレーナーとポケモンバトル

させるからな！後で後悔しても知らねえぞ！」

「リユウ！」

「童貞が俺に調子乗るなだつてよ。」

「お前は産まれたばつかの赤ん坊の癖に何言つてんだ！つてか、何処でその言葉知つたんだよ！何、ポケモンは人間を下に見てるの？確かに産まれたばつかのミニリユウに首元巻きつかれたら俺瞬殺される程俺弱いけどコイツ俺の事まさかメツチャ下に見てる？」

俺の質問を聞かずにミニリユウは俺の首元に飛びついてきた。嗚呼、ダルい。俺はその後グリーンを探してポケモンバトルをする事にした。

〈数十分後〉

「なんだよそのミニリユウ、俺にワザと見せびらかしてんのか？トレーナーとの絆を深めたいのか、ポケモンと禁断の恋に落ちたのかは知らねえがあんまり程々にしろよ。」

「どれも違うわ！つてか、コイツと禁断の恋とかもつとねえわ！コイツが勝手に俺の首元に巻き付いているだけだよ。」

「へえ、まあ良い。鬱憤を晴らす代わりとしてブルーはサンドバック確定な。」

「ほら、いい加減離れろ！一番手はお前にするんだ。準備は良いよな？良くなくても出

すけど。」

「人の話を聞け青馬鹿！ホント変わってないなお前。」

「煩いな、今トレーナーとポケモンとでバトルの準備をしたんだよ。いい加減待つと言  
う言葉を覚えろ腐った凡人！」

「テメエ！もう緑でもなんでもねえじゃねえか！お前のアイデンティティである青を  
言つてあげたのになんで俺には緑を付けねえんだよ能無し！」

「どうでも良いだろ、そこまで緑に拘つてるんなら言つてやるよピーマン野郎！テメエ  
は野菜の中で最も子供から嫌われた緑として君臨してろ！」

「上等だよ淀んだ水蒸気野郎！テメエはその野菜から栄養分だけ取られてろハゲ！」  
「ハゲてねえし、モツサリだし！」

俺とグリーンの悪口ポケモンバトルデスマッチはこの喧嘩からスタートした。

マサキさんは危ない目でイーブイを直視している。

そんなこんなでグリーンの一番手はオニスズメを出してきた。

「あんまり酷すぎる結果にしないでくれよブルー、お前のポケモンが可哀想だ。」

「言っとけピーマン、コッチは最近ゲットしたてのミニリュウだよ。実力も覚えてる技も未知数だから気をつけろよ！」

「駄目じゃねえか！って言ってる場合じゃねえか、後で後悔しても遅えぞ！オニスズメ、ブレイブバード！」

「サバア！」

「テメエ、ちつとは初心者 of 気持ちを考えて技を選べよ！ミニリュウ、たつまきで回避しろ！」

「リュウ！」

「真剣勝負に手加減なんて必要ねえだろ！オニスズメ、たつまきの風に沿いながら上昇！」

「ミニリュウ、オニスズメの体にまきつく攻撃！」

オニスズメはミニリュウのたつまきを上手くかわしているが、ミニリュウがオニスズ

メの体に巻き付いた事で地面にオニスズメが落下した。

「オニスズメ、至近距離でなきごえを連発！」

「サバア！」

「甘えんだよピーマン野郎！ミニリュウ、オニスズメの体にりゅうのいぶき！」

「まさか!?!」

りゅうのいぶきは当たると麻痺をしやすと言われる。これでずっと巻き付いていけばオニスズメは動けない状態でジ・エンドだ！

「耐えろオニスズメ、負けずにつつく攻撃をミニリュウに連発！」

「オニスズメの首元を強く締め付けて行動不能にしてやれ！」

「リュウ！」

「サ、サバ……………」ポクリ

オニスズメはどうやら限界が来て気を失い目を回していた。

「戻れオニスズメ、良く頑張った。次はお前だカメール！」

次のポケモンはカメールか、フシギソウと同期に見たゼニガメとは印象が違うな。なんていうか、好戦的だ。

「カメール、甲羅に閉じこもりながら壁に向かってアクアジェット！」

「カメ！」

「ミニリュウ、カメールの甲羅にまきつく攻撃！」

「無駄だよ、カメールはアクアジェットで壁に当たりながら加速している。ミニリュウに捕まえられた所ですぐに引き離されるのがオチだ！」

クソ、カメールのアクアジェットが四方八方から来る事でミニリュウが怯んでいる。一旦交代だ！

「戻れミニリュウ、みずタイプにはみずタイプだ！任せたコダック！」

「コダ！」

「どんなポケモンを出しても無駄だ！カメール、アクアジェット！」

「カメ！」

「コダック、ねんりきでカメールを止める！」

「コダ！」

コダックはその場で頭を抱えながらしやがみカメールを空中に停止させた。

「カメール、尻尾に力を込めるんだ！」

「何をするか知らねえが、当たらなければ意味ねえよ！コダック、壁や床にねんりきで当てるながらカメールで遊んでやれ！」

「コダ~~~~！」

コダックはカメールの体を下へ、前へ、後ろへ、右へ、左へ、勢い良くカメールを壁

や床にぶつけないながら遊んでいるが、カメールは尻尾を使って上手く衝撃を減らしている。

「いい調子だカメール、コダックとすれ違いさまにアクアテール！」

「カメール！」

「コダック、此方もアクアテールで迎え打て！」

「コダ！」

コダックとカメールはお互いの尻尾をぶつけて、大きな煙を発生させた。コダックとカメールは共に倒れていたが、先に立ち上がったのはコダックだった。

「コ、コダ。」

「良いぞコダック！」

「カ、メール！」

カメールも立ち上がって勝負がまだ続くかと思ったその瞬間コダックは目を回してその場で意気消沈してしまった。

「コダック！」

「ふん、今回は俺達も結構やばかったなカメール。カメール？」

カメールは首を下に向けたままグリーンの返事を返さなかった。それは、爆発的な力激流が発動する合図でもあった。

「カッメー……！」

カメールの体から青いオーラが身に纏っていた。アレは、フシギソウの時の深緑と同じ追い詰められる程みずタイプ的威力が上がる激流だ、気をつけないと一発で終わらせる程のパワーをカメールは今持っている。

「コダツク戻れ、今日のポケモンフーズ半分くらいミニリュウに分けてもらおうぞコダツク。お次はフシギソウ、一発で終わらせるぞ！」

「フツシー！」

「俺のカメールには意味ねえよ、コツチも早期決着をつけなきゃやべえんでさっさと終わらせるぞカメール、アクアジェット！」

流石に激流のパワーは強く、カメール自身もさつきよりアクアジェットが加速していた。

「フシギソウ、自分自身にどくのこなを撒くんだ！」

「何？まさか!？カメール、止まれ！」

「もう遅い！フシギソウ、そのままカメールにたいあたり！」

「ソウ！」

フシギソウはカメールに勢いよくぶつかりカメールを毒状態にした。

「カメー！」

カメールは顔が紫に染まりながら毒状態に耐えている。

「後は時間の問題だな。フシギソウ、つるのむち！」

「ソウ！」

「カメール、後ろに避けるんだ！」

「カ、カメ……、」

カメールはフシギソウのつるのむちを食らう事なく倒れてしまった。

「カメール、ここまで頑張ってくれてありがとな。」

「お次は何を出すんだ？」

「ふん、どの地方でもなかなか手に入らない進化ポケモンだよ！行け、イーブイ！」

「イブ！」

「イーブイだと!？」

そう言ってモンスターボールの中から勝手に出てきたマサキさんはイーブイを見て両手をワナワナしている。マサキさんは危ない目でイーブイを直視している。

ミニリユウがとても嫌そうな顔してんな。

「なんだ？その喋るニドキングは、」

グリーンは当たり前の疑問を俺に質問してきた。

「ワイはニドキングがじゃなくてマサキや！色々あってポケモンの姿をしとるがいつか人間に戻ると決意した人間や！」

「元だけどね。」

「へえ、これまた珍しいポケモンをブルーはゲットしたんだな。」

「ワイは珍しいポケモンじゃなくて人間や！」

「元を付ける元を！アンタはどう転んだって今の姿じゃ正真正銘の誰が見ても珍しいポケモンだと思われるよ！」

「そろそろ準備は良いか？イーブイ、フシギソウに向かってスピードスター！」

「ブイ！」

「フシギソウ、つるのむちで向かってくるスピードスターを全て弾くんだ！」

「だったらかげぶんしんからのスピードスター！」

「何!？」

イーブイは10対以上に増えた後にかげぶんしんのイーブイも一緒にスピードスターを放ってきた。

「フシギソウ、後ろに後退しながらつるのむちで向かってくるスピードスターを弾くんだ！」

「ソウ！」

「今がチャンスだイーブイ、ギガインパクト！」

「イツブーイー！」

「何?！」

分身したイーブイ達が一斉に突っ込んで来た。これじゃあどれが本物のイーブイか分からない。

「フシギソウ、頑張って耐えるんだ！」

フシギソウは体を丸めて防御体制に入るが、イーブイに吹っ飛ばされて気を失い目を回していた。

「ふん、こんなもんかよ。ブルーのフシギソウってのは、そんなんじや俺の大将には勝てねえぜ。」

「成る程、サンドパンが一番じゃない理由が少しだけ分かったよ。確かにそのイーブイは手強い。だけど、行動を制限させればどんなポケモンでも弱点は出る！お前の出番だ

ミニリュウ、そろそろ首元から離れてバトルフィールドに移動してくれないか？」  
「リュウ！」

ミニリュウはマサキさん曰く、「仕方ねえな、これだから新人トレーナーに俺は頭を抱えるんだ。もつと頭を使えガキンチョ！」と言っているらしい。

「煩え巻き付く事しか取り柄のない赤ん坊が！そもそも名前にミニが付いてる時点でテメエはもう俺よりもガキンチョなんだよ、バーカ！バーカ！」

「子供過ぎる、見てるこっちが恥ずかしくなってくるわ。」

そう言っただけでまた俺達の前に姿を現したのは最近弟のグリーンと悪い関係であるリーフだった。

「へえ、進化ポケモンのイーブイじゃない！何処で手に入れたのグリーン？」

「俺が何処で何しようがアンタには関係ないだろ。バトルの途中なんだ、部外者は引ッ込んでろよ！」

「何よその言い方、確かに今までアンタにして来た事は悪いって思ってるけどそこまで言う必要は無いじゃない！」

リーフがそう言うと、グリーンはリーフの襟を掴み……

「悪いと思ってる？アンタが？笑わせんなよ！いつもいつも誕生日の時に俺から色々な物を奪って行って学校でも俺に話しかけてくる奴等はアンタの事で近付こうとしてく

る馬鹿な人達ばっかだ！もうウンザリなんだよ！これ以上俺から何を奪うんだよ！ア  
ンタは自分の事ばっか昔から考えていたよな。ジョウトに留学していた時もそうだ！  
いつもアンタと俺を周りの大人は比べてくる、いい加減にしろよクソ姉！俺はアンタの  
分身でも無ければクローンでもねえ！俺はグリーンなんだ！オーキド博士の2人の孫  
の1人で最強を目指しているごく普通のトレーナーなんだよ！俺からこれ以上何も奪  
わないでくれよ！それが分かったらこれ以上俺の前に姿を現さないでくれよ。なあ、  
姉貴。」

グリーンは後から涙目でリーフを睨みバトルフィールドへと戻って来た。

「良いのか？そんな言い方して、」

「ブルー、言っとくがこれは家族の問題なんだ。他人がいくら口出ししようと俺の気持  
ちは変わらねえ。お前も俺の前に立ち上がるんならそんな時は容赦しねえぞ。悪い、バト  
ルの途中だったな。続けるぞ、」

グリーンはそう言ってイーブイの頭を撫でながら言ってきた。一方リーフは驚いた  
表情で暗い顔になり何処かへ行ってしまった。

「なあグリーン、俺がこのバトルで勝ったら一つ聞きたい事があるんだが良いか？」

「ふん、上等だ。まあ、俺に勝てたらの話だな。」

「と言う訳だ、頼むぞミニリュウ、まきつく攻撃！」

「リュウ！」

「イーブ！」

「イーブイ！クソ、ギガインパクトの効果で一時的に動けないんだったな。」

「そのまま尻尾でイーブイのお尻に叩きつける攻撃！」

「リュウ！リュウ！リュウ！」

「イブ！イ、イブ！／＼／」

あれ？なんかイーブイ喜んでないか？

「ミニリュウ、イーブイの体をりゅうのいぶきで痛めつけるんだ！」

「リュウ！」

「イーブイ！耐えろ、反撃の糸口が見つかるまで耐えるんだ！」

「イブブブブ／＼／」

やっぱりおかしいな。何故イーブイが攻撃を食らってんに喜んでるんだ？

「おい、あのイーブイヤバイ性癖持ちやで！」

「嗚呼、もう分かった。言わなくていいよマサキさん。大体想像がついたから。」

「嫌、ただ痛めつけられるのが好きじゃのおて、痛めつけられたポケモンに絡められながら尻を叩かれるのが良いって言つとんのやあのイーブイ！」

ハア、つまりミニリュウの戦闘パターンがともイーブイの性癖にベストマッチし

たつて事ね。よくよく見ると、ミニリュウがとても嫌そうな顔してんな。ザマア！

# 何故アンコールを使うんだ？

「ミニリユウ、まきつく攻撃を継続するんだ、このまま持続させればいつかイーブイの体力も消えるはずだ。」

「リ、リユウ！」

「イブ！／／／」

「おい、イーブイ！何故アンコールを使うんだ？かみつく攻撃だ、早くミニリユウを追い払うんだ！」

「グリーン、お前まだ分かんねえのか？イーブイがアンコールする理由は自分から縛られてたい性癖があるからだよ！」

「何!?まさか、イーブイ！顔を赤く染めるんじゃない！かみつくだ！かみつく！」

「巻き付いてる間はイーブイなんの技も出せねえよ。」

「何?!」

それ以降グリーンの言葉を無視し続けたイーブイは自らアンコールをミニリユウにかけて気絶するまで巻き付かれていた。何故だろう、バトルに勝った筈なのに全然高揚

感が感じられない。それどころかゾツとする恐怖を思い出しそうだ。ああ、頭が痛い！  
〈数十分後〉

「イブ！／＼／＼」

「リュウ！」 ビクビク

今の状態を説明すると、バトルの後サント・アンヌ号のジョーイさんのいる場所まで行きポケモンを回復してもらいポケモンを手渡しでジョーイさんから返される時にイーブイがミニリュウにくっついて頬を擦りつけている。一方ミニリュウはビクビクしながら俺の顔を見て救援を要請している。初めてミニリュウに同情したわ。

「ほら、ミニリュウが困ってるだろイーブイ。モンスターボールの中に戻るんだ。」

グリーンはその姿を見て頭を片手で抱えたままイーブイをモンスターボールの中に戻した。ミニリュウは安堵したのか俺の首元に強く巻き付いてきた。助けなかったから怒って俺の首元をメツチャ強く締め付けて来るんですけど、辞めて、死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！マジで死ぬ！ミニリュウ君分かったから、今度から助けてやるから緩めて！口からりゅうのいぶき放とうとしないで！

「分かった、話し合おうミニリュウ！コダツクのポケモンフーズを分けてやるからそれで許してくれ、……許してくださいミニリュウ様！」

「リュウ。」

ミニリユウはまるで「次見捨てたら殺るぞ。」と言いなながら俺を睨めつけてきた。今度からミニリユウへの態度は気をつけておこう。

「ハハ、どつちがトレーナーだかこれじゃあ分かんねえな。」

「元はと言えばテメエのイーブイが原因だろうが！」

「仕方ねえだろ、俺が何言ってもアンコールしかしねえんだからよ！あ、そう言えば聞きたい事ってなんだ？」

「リーフとの事だよ。何があつたのか一通りリーフから聞いたんだけどさ。もしかしてそれ以上何かされたのか？」

「なんだ、姉貴リーフの事か。別に心配する程の事でもねえよ。ただ昔から自己中な俺より頭の回転が早い姉ってだけだよ。まあ、事の発端はアレから始まったな。」

〈今から7年前〉

グリーンサイド

俺はいつもポケモンスクールに通っていた頃なんだけど、姉貴はポケモンの事が誰よりも好きだと自分から言って将来ポケモン研究所で働くのを夢みて頑張っていた。だからかな、なかなか姉貴は俺に構ってくれなかった。

「姉ちゃん、一緒に外であそぼ！」

「無理、今アンタの絶対に解けないような問題をやってんだからレット君とでも遊んで

なさい。」

「え〜、レットとはいつも勝敗が決してるからつまんないんだよ。それに、姉ちゃん俺と遊んだ事一回も無いじゃん。遊べば楽しいよ！」

「煩いわね、また今度相手してやるから今度にして。」

「はーい、(どうせ姉ちゃん何の事？ って言っ忘れてるんだろうけどしつこく言えばきつと振り向いてくれるかな?)」

次の日

「姉ちゃん今日こそあそぼ！」

「え、何言ってんのグリーン。今私勉強してるの、邪魔しないで！」

姉貴はそう言っ部屋ドアを強く締めた。あーあ、今日も駄目だったな。また今度にするしかないか。

その次の日

「姉ちゃん、今度こそ！」

「しつこい、帰って！」

「そんな!?! 昨日もちちゃんと我慢したのに！」

「煩いわね、ワガママな子は私の弟じゃありません！」

また姉ちゃんから部屋を追い出された。ねえ、姉ちゃん。僕の事嫌いなのか？

〈数ヶ月後〉

「グリーン、誕生日おめでとう。ポケモン大百科をプレゼントしよう。」

「やったー！ありがとおじいちゃん！」

「グリーン、後でそのポケモン大百科私にも見せてよ！」

お姉ちゃんが初めて僕に話しかけてくれた。とても嬉しい！

「うん良いよ！」

その次の日

「お姉ちゃん、ポケモン大百科そろそろ返してもらっていい？」

「今勉強中、静かにしてよもう！」

「え、でもポケモ……、」

「いいから、終わったら返すからあっち行って！」

「……………分かった。」

それ以降俺のポケモン大百科が帰ってこなかった。ポケモン大百科だけじゃない、すごい釣竿や自転車もお姉ちゃんから取られた後帰って来ずにそのまま俺はポケモンスクールに通う事になった。

〈1年後〉

「ねえ、グリーン君！君のお姉ちゃんにコレを渡してくれるかな？」

「誰ですか？姉なら家に居るので自分で届けに行った方が早いと思いますが……。」

「お願い、人の家にかかる勇気が無くて君を頼るしか無いんだ。届けてくれるかな？」

「……分かりました、渡しておきます。」

俺はそう言い可愛くリボンで結ばれた箱をもらった。

自宅

「姉ちゃん、姉ちゃんにコレを渡してくれてある人に言われたから置いてくね。」

「余計な事しないでよグリーン、しかも宛名見るとまたアイツじゃない。しつこい！」

姉ちゃんはそう言っただけ取ってそれ以外はゴミ箱に捨てた。それから多くの月日が経ち姉はジョウトに留学して俺は研究所の大人やポケモンスクールの先生達から「グリーン君じゃなくてリーフちゃんに残って欲しかったわ。」とか、「リーフちゃんはとても勤勉だからグリーン君も学ぶように。」など言われた。なんで俺は姉ちゃんと毎回比べられるの？もう沢山だよ！気づいたら俺は1人ぼっちになっていた。

この世界の男性は何処まで貧弱なんだよ。

「相変わらずグリーン姉はえげつねえな。確かにグレルわ、納得！」

「まあ、姉貴にさっき強く言えたのはとてもスツキリしたしいい気味だ。って俺はグレてねえよ！それに少しだけブルーにも感謝してんだぜ。マサラにお前が引つ越してなかつたら俺はまずトレーナーにすらならなかつたかもしれないねえしな。」

「隕石が降ってくる！グリーンが俺に感謝なんて災いの元だ、逃げる！」

「デメエ後で覚えてろクソ野郎！」

俺はグリーンを置いて逃げ回ってる途中にサント・アンヌ号で迷子になった。

「ここ何処だ？走って疲れて腹も減つたし力が出ねえ。」

「大丈夫かい君、顔が真っ青になってるよ。コレを食べると良い。」

そう言つて、俺におにぎりを渡してきたのは船の作業員さんらしき人だった。

「あの、貴方何処のどなた様でいらつしやいますか？」

「ハ、ハ、ハ紹介が遅れてすまん少年。私はこのサント・アンヌ号の船長兼クチバシテイのジムリーダー・マラスと友達をしているゲロンと言う。よろしウオロロロロ！」

そう言つた船長さんはバケツに顔を突つ込みゲロを出している。船長つて海に酔う

んだ。

「アンタもアンタでとても顔が真つ青だよ。ほら、背中さすってあげますから早く気分治してください。」

「おおすまんね。あら！そのバッチはクチバシテイのジムリーダーであるマチスを倒した時にゲット出来るオレンジバッチ！そうか、君はマチスに勝ってこの船の利用権をゲットしたんだね。」

「はい、マチスさんからも今度一緒に船の上で話したいって言っていましたよ。」

「そうかそうか、コレはゲロしちやいられない！私も船長らしき事をしなければ！でももう少しウオロロロロロ！」

やっぱり吐くのね。

〈数十分後〉

「やあ、助かったよ。一人でパトロールしていたらお客様にご迷惑をお掛けするところだったからね。」

「あの、俺もそのお客様の一人なんですけど。」

「嗚呼、それは失敬。それよりもあのマチスに勝つとはね。君、次の街には気をつけた方がよいよ。ロケット団が潜んでると噂だ。」

「ロケット団？それはまた、その街のジムリーダーやジュンサーさんは気付いて無いん



せば良いんですか?」

『あら、到着まで以外と早かったわね。今私はタママシシティのポケモンセンターで貴方を待つてるわ、その時に教えてあげる。』

「分かりました、それじゃあ着いた時にまた連絡します。それじゃあ、」

『ええ、じゃあね。』

ツー、ツー、ツー。

どうやらもうタママシシティに着いているようなので早速走って行こうかな?と俺が思ってる矢先にガーディの群れが草むらを走っていた。

「お!ガーディみつけ。覚悟ガーディ!」

「待ちなさいそのトレーナー!」

そう言ってきたのは少し歳をとったジュンサーさんだった。

「あの、何か用ですか?」

「用も何も今貴方のポケモンでジュンサー学校のガーディを攻撃しようとしてたでしよ!」

「ジュンサー学校?」

「まさか知らないの?ジュンサー学校はその名の通りジュンサーになる人達に通う学校よ。最近じゃトレーナーよりもポケモンセンターのジョーイさんになりたいと

か犯人を捕まえたり事件を解決するジュンサーさんになりたいって声が各地で上がっているの。」

「え!?でも、ジュンサーさんやジョーイさんって基本的に女性が良く勤めている人達多くないですか?」

「確かに比較的ジョーイさんも私達ジュンサーも女性が多いわ。まあ、別に婚期を遅らせている訳じゃなくて、単純に女の方が男よりもたくましくて強いから女性が配属されてるの。見学してみる?」

「はい、お願いします。」

俺はサント・アンヌ号の船長であるゲロンさんの言っていた通りジュンサースクールの見学を申し出てみた。さっきジュンサーさんが言っていた女の方が男よりも結果が上って事は男性よりも女性の方がたくましくて強いからって言ってたよな。この世界の男性何処まで貧弱なんだよ。

どうやら俺のコダックは女性（若い人限定）にメロメロボディが発動するらしい。

ジュンサースクール

「ここでは、もし犯罪者に遭遇した時の人間同士の戦闘とポケモンバトルを磨いているわ。まあ、殆どポケモンバトルを極めていないとジュンサーにまずならないのだけだね。」

「まあそうですよね。」

「あー！そうだわ、貴方仮にもポケモントレーナーでしょ。だったらこの子達とポケモンバトルで鍛えて欲しいの。頼めるかしら？」

「まあ、構いませんが。どのポケモンを使えば良いですか？」

「そうね、出来るだけじめんタイプやみずタイプをお願いするわ。ほのおタイプでもらいびという特性を持つてるポケモンでも良いわよ。」

「そうですか、なら出てこいコダック！」

「コダーー！」

「皆集合して！ポケモントレーナーが来たわよ！全力でもてなしてあげなさい！」



いジュンサーさんなんて1人もいないわ。まあ、そっちの方がほんと楽で良いんだけど。俺がそう思っている瞬間『警報、警報、タمامシシティからロケット団の残党だと思われる奴等を発見！直ちに出動せよ！同じく繰り返す！タمامシシティからロケット団の残党だと思われる奴等を発見！直ちに出動せよ！』というアナウンスが流れてきた。コダックにメロメロだった見習いジュンサーさん達は何もなかったかのように外へ出て行つた。

### 7 番道路

「クソ、なんなんだあの街は!?本部の近くはジュンサーでも近寄らない筈なのにどうして可愛い子を口説こうとしただけで通報されるんだ!ロケット団だって世界の為に尽くしてるんだ!そんなに差別するなんてあの女の頭が狂ってるんだ!そうだ、方に違いない!早く任務を遂行しないと!」

「何悲しい事言ってるのか知らないけど、貴方を逮捕します。大人しく補導されなさい!」

「な!?サツかよこんな時に!クソ、こんな時に!いけつマタドガス!」

「いくのよガーデイ!」

「へ!ガーデイ一体程度………何!?!」

「ガーデイいくのよ!」

「ガーディお願い！」

「ガーディ、出てきなさい！」

「な!?これ反則じゃねえか!卑怯だぞでめえらサツがポケモンバトルのルールをなんだと思ってるんだ!」

「「「「「ロケット団には言われたくないわよ!」「「「「「」

これぞ数の暴力って言うんだな。

「ふん、だが雑魚がいくら揃ったって一緒だ!マタドガス、だいたくはつー!」

「マーダード!!!ガーリースー!」

その瞬間、出していたガーディは全て目を回していた。成る程、考えたなアイツ。あれ?あそこに一体だいたくはつに耐えたガーディがいる。凄いなあのガーディ、だいたくはつを耐えるポケモンなんて俺初めて見た。

「おら!俺にはまだマタドガスが一体残ってるんだ!俺をこのまま逃してくれるなら命の保証はしてやるよ!それか、そのガーディを俺の元に差し出す事でもアリだぜ。」

「く、そんなのどちらも選ばないわ!どれだけ勝ち目がなくても私達はジュンサーだ!貴方達犯罪者を逃がさない!」

「どれだけ威勢を張っても無駄なんだよ！」

男は傷ついたガーディの腹を勢い良く蹴り檻の中に突っ込んだ。

「そんな、ガーディ！」

「しまいだ！ヘドロばくだん！」

「マタ！」

「く、ガーディ！」

「マサキさん出番だよ！」

「おうってなんでワイを選ぶねん！」

そう言いながらも見習いジュンサーさんをヘドロばくだんからマサキさんは盾になった。

「今は抗議している時間はない！すぐに終わらせるぞ、メガトンパンチ！」

「オラア、喰らえメガトンパンチ！」

「マタ！」ドサ

「マタドガスー！」

「ち、仕方がない。いけコイル、フラッシュュ！」

「ジジジ！」ピッカーーン

その瞬間ロケット団の三下と思える奴はその場から消えていた。

「クソ、後を追うぞマサキさん！」

「その必要は無いわ！」

そう言ったのは最初に出会ったジユンサーさんだった。

「ありがとう、ウチの生徒を守ってくれた貴方には礼を言っておくわ。ただし、深追いは禁止！それはどの部署でも変わらない。貴方はロケット団を仮に崩壊させたとしても、ロケット団の残党から返り討ちに遭うだけよ。それに貴方にはポケモントレーナーとしてここで終わるわけにはいかないでしょ？」

「はい、すいません。でも、ガーデイは連れていかれましたよ。」

「そこは問題ないわ。だってガーデイならここに居るのだもの。」

え？

「何がどうなってるんですか？」

「実はあのロケット団の三下はこのガーデイを置いて行ったのよ。ねえ、次タمامシシテイのジム戦しに行くならこの子を少しの間預かってくれないかしら。」

そう言つて渡されたのはモンスターボールだった。

「あの、何故俺にガーデイを？」

「この子は暴れん坊でなかなか言う事聞いてくれないの。でも、貴方のようなバトルの経験豊富なトレーナーに預けた方が良くなかって思つてね。タمامシシテイはこの道

を超えた場所にあるわ。早くポケモンセンターでこのガーディを休ませてあげて。」

「はあ、分かりました。」

かくして、俺はガーディを預かる事にした。

## 私の愛しの王子様（ブルー）

タママシシテイ

ポケモンセンター

「あーあ、疲れたな。ガーディもポケモンセンターに預けてやる事ねえし、ナツメさんどこにいんだよ。」

「ここにいますわよ。」

「ぎゃー！ー！」

びつくりしたアー、急に背後から話しかけられたら怖いわ！

「それは悪いことをしたわ。ごめんなさい、それよりもこのジムリーダーにバレない状態でジムバッジをゲットする為に私を呼んだんじゃないの？」

「嗚呼、そうだった。いつあの人があるか分からないから、早めをお願いします。」

「了解したわ、此処からは私だけが喋っておくから貴方は心の中だけで呟いとぎなさい。

それと、どんな顔がご指名かしら？」

どんな顔ねえ、出来るだけ今の自分とは違う顔にして欲しいな。

「分かったわ。少し痛いけど我慢してね。」

え、我慢？ ナツメさんはそう言うのと、俺の左右の頬にナツメさんは両手で触れる。何が始まるのか恐怖と緊張で待っていると、顔の中心が一瞬で曲がった。

い、イデデデデデ！ 痛えわ！ 何してんのナツメさん！

「貴方の顔を整形士が顔を伸ばして変えるようにエスパーで筋肉や素の顔の形を変えているの。もう少しだけ待って、もうすぐ終わるから。」

嫌、それ力技で俺の顔を変えようとしてるとあんま変わんねえんじやねえか!?

「大丈夫よ、後は付かないし皮膚の構造を少し変えてるだけだから問題ないわ。」

問題大アリだわ！ それって俺の顔ホントに元に戻るの？ ナツメさんはどんな顔にしようとしたんだよ！

「終わってからのお楽しみまで取っておいて。今話しかけられて集中が途切れると貴方の顔は醜い怪物になってしまうわ。それでも良いなら別に構わないけど。」

良くないです！ 話しかけないんで早く終わらせてください！

〈数十分後〉

「イッテ、まさか顔の完成して鏡見た瞬間ナツメさんかと思ったよ。」

「何？ 悪いかしら？」

「嫌、別に悪くはないけどさ。」

この時の俺の顔はナツメさんによって、ナツメさんと同じ目、鼻、口、つまりまった

く多少違うがほとんどナツメさんと似た顔になったのだ。エスパ―少女おそるべし、  
「此処から出る時また呼んで頂戴。その時もまた貴方の顔に触れながらエスパ―で元の  
顔に戻すわ。」

「了解しました。」

「因みに、貴方は名乗る時……そうね。ナツとでも名乗っておいて、その方が互いの為  
だわ。私一人っ子だから兄弟なんていないし、貴方もそれで良いわよね。」

「はい、それじゃあ行くよみん……、」

俺がそう言う瞬間何かの気配がした。ねつとりとした視線を俺にぶつけて来？この  
街で出会ったあの人の気配、最悪だ。さっきの状態を見られてたら全て水の泡になって  
しまう。なんとか気付かれないようにしないと、

「どうしたの？」

さっきからずつと視線を感じるの、固まってるだけです。

「成る程、それじゃあそろそろ私は行くわね。終わったら呼んで、ナツ。」

「了解です。(シヨッピングモールにでも行って撒こうかな。)」

俺は、ガーディをジョーイさんから受け取った後シヨッピングモールへ足を運んだ。

???  
サイド

「ウフフ、見つけましたわ。私の愛しの王子様ブルーとあの時の続き、私と貴方だけの物語時間を進めるだけですわ。」

ブルーサイド

シヨツピングモール

「そろそろ視線が消えたかな？はあ、良かった。」

首元にいるミニリュウが離れてくれないのは痛い仕方がないか。こればかりははコイツミニリュウは関係ないし、自力で解決するしかないか。それより、ロケット団がこの街に潜伏しているのが気になる。さつきもタمامシシテイから三下だけどロケット団が現れたんだ。なら、此処の何処かに必ずいる。5年前俺が此処にいた時は確かこの街にスロツトなんてなかった筈だ。しかも、ロケット商談っていう会社が経営してるって言うてたから絶対ロケット団が裏で手を引いてるし、あのランスって言う胡散臭いだいばくはつ野郎も何処かにいるかもしれない。ひとまずは、情報収集だな。それにいつアイツエリカに見つかるか分からないし、警戒を怠ったりしないようにしないと。どうせ裏で俺の場所を探して回ってる筈だ。それにタمامシジムのジムリーダーに勝たないとレインボーバッチは手に入らない。早めに挑戦しておくか。俺はそう思いながらフシギソウの仮面を買ってタمامシジムへと移動した。

## タママシジム

「ようこそ、未来のチャンピオン！我ジムは綺麗でエリートで無駄のない動きをするこの街のアイドルエリカ様がジムリーダーだ。ポケモントレーナー達は最初この関門を超えられなければ諦める人達が多いと噂されている。何せ補助技だけでチャレンジャーのポケモンを全て倒す程の実力者だ！舐めてかかると痛い目どころか三途の河まで見ることになるかもしれないぞ！さあファイトだ！」

「分かりました。忠告ありがとうございます。」

俺は流れるように挨拶を済ませていつも通り奥の部屋へと行った。

扉を開けると、一面原っぱが広がる高原と見間違えた。此処ポケモンジムだよな？そこらの高原じゃないよな。よく見ると、太陽の代わりに馬鹿でかいライトが草むらに当てられている。

「それは、LEDを利用した不可視光線でこの一帯の植物を育てているんですわ。」

「確か、虹色の7色と同じように可視光線はあつてその内の赤と青の光線もと言い不可視光線を浴びさせるだけで植物の一部は成長するんですよ。確かソーラービームも同じ赤と青の不可視光線で光合成をしながら行う技だと言われていますよね。」

「流石ですわ。フシギソウの仮面をそろそろ取つたらどうでしょうかブルー君。」

「生憎と俺はブルーと言う名前じゃ無いんだ。このフシギソウの仮面は此処のシヨツピ

ングモールで買った物で……、その写真は何処で撮ったんですか？」

ジム<sup>エ</sup>リー<sup>リ</sup>ダー<sup>カ</sup>が俺に見せてきた写真は、ポケモンセンターで俺の顔を変えようとしている姿のナツメさんに両手で俺の頬を触れられている絵だった。

「貴方がブルー<sup>ナ</sup>君じゃ無いつていうなら顔を見せて下さい。その顔がヤマ<sup>ナ</sup>ブキのジム<sup>リ</sup>リー<sup>ダ</sup>ーと同じ顔じゃ無いなら筈です。」

俺は恐怖のあまりここから逃げ出すところだった。

## 成る程、面倒だ。

「ウフフ、さあ貴方の顔を見させてくれますか？愛しのブルー君。」

「あの、俺の名前は」

「ナツではなくて？」

「もうそこまで知ってたんですね。」

「当たり前でしょう。貴方がトキワの森から全て行動を把握させて貰いましたわ。まあ、途中でお邪魔虫が貴方の実家に泊まつたりしてらしいですが所詮は私の敵ではありません。それよりも、早くそのフシギソウの仮面を取つたらどうですか？貴方の体に発信機が付けられている事くらい、今の説明で理解できたでしょう。」

「一体いつから俺の体にそんな物を取り付けてたんですか？」

「あら？あの日私が貴方に振られた時からですわよ。あの頃はただ純粹に貴方だけを考えていたのに、何故貴方は私を見てくれないのか不思議でなりませんでしたから。貴方の体に発信機を取り付けさせて貰いました。どんな性格の子が好きなのか？どんな体系の子が好きなのか？どんな子が理想なのか？私は貴方を振り向かせる為に貴方という人間にまで干渉したのですよ。ブルー君、もう私は貴方しか愛せない。嫌、愛された

「いー私があの時貴方に惚れた時から！」

「エリカさん、そう言う事を言うから俺が遠ざかるといふ事が分からないんですか？」

「いくら離れても貴方は私の物ですから、構いません。この機械がある限り貴方は私から逃げられませんしね。」

「はあ、これじゃあ隠してた意味がないじゃないですか。顔を変える為に痛みを我慢した俺の努力がエリカ先輩のせいで水の泡になりましたよ。」

「私のせいにするなんて酷い言い草ですわ。ブルー君、でもポケモンバトルは別口ですわよ！」

「はい、分かっています。行くぞプテラ！」

「デイーラ！」

「頑張つて、ワタツコちゃん！」

「ワタツ！」

「聞きましたよ。とんでもない補助技使いつて呼ばれてるそうじゃないですか。」

「ウフフ、ブルー君に知ってもらえて嬉しいですわ。これからもっと知ってもらいましようかね？」

「必要ありませんよ。プテラ、つばきでうつ攻撃！」

「デイーラ！」

「ワタツコちゃん、タネマシガン！」

「ワタツココココ！」

「何か畏があるかもしれない。プテラ、タネマシガンを避けながら上昇！」

「あら、良いのですか？そんな事して。ワタツコちゃん、にほんばれ！」

「ワタツ！」

「な!? プテラ、」

「ディーラ!?」

プテラは上昇した瞬間ににほんばれの光を強く浴びすぎて空中落下している。

「ワタツコちゃん、ソーラービームを浴びせてあげなさい！」

「ワタターーーー！」

プテラはソーラービームに命中し、意識を一瞬で刈り取られてしまった。

「プテラ、ありがとな。」

「お次は雌<sup>昆蟲いシユンサー</sup>プタ共から譲ってもらったガーディですか？」

「はい、よくご存知で。」

「言つたでしょう、ブルー君の事はなんでも分かるつて。」

「まさか、盗聴器も俺の体に仕込んでたんですか？」

「ご名答ですわ。」

「成る程、面倒だ。」

「面倒で収まると思ってるのですか？ブルー君。」

「思ってませんよ、行くぞガーディ！今がチャンスだ！」

「ワウ！」

「確かににほんばれの効果ではのおタイプの威力は上がってますが、ブルー君のガーディが私のワタツコちゃんに勝てる要素が100パーセントある訳ではないですよ。ブルー君！」

「それはどうでしょうか。ガーディ、ニトロチャージ！」

「成る程、スピードを上げるつもりですか。なら、ワタツコちゃん。ふんじん！」

「ワタツ！」

「何!?!」

「ワフ!?!」

突然ワタツコの前を走っていたガーディの方に爆発が起きた。

「ふんじんって確かむしタイプの技ですよ。それってまさか!?!」

「この子は卵から孵らせた私のワタツコちゃんです。学生時代に使っていたハネツコちゃんではありませんよ。」

「面倒な事やってくれますね。ガーディ、はじけるほのおでワタツコの周りのコナを狙

うんだ！」

「ワフ！」

「はじけるほのお、ワタッコちゃん逃げて!?!」

ガーディがはじけるほのおを口から出し、ワタッコの前で爆発した瞬間ほのおがあちこちに弾けてワタッコの体に付いていたふんじんもろとも爆発した。ワタッコは爆発に耐えきれず目を回して気絶してしまった。

「ウフフ、やりますわねブルー君。バトルはこうでなくっちゃ！行きますよフシギソウ  
！」

「ソウ！」

「2体目はフシギソウですか。俺も持つてるからこそ面倒なんですよね。」

「ええ、私もそれを分かっててこの子を出しました。貴方がフシギソウの脅威を一番知ってるこのポケモンに。」

「良い性格してますね、エリカ先輩！」

「ブルー君程ではありませんわ。」

「別に褒めてませんよ！ガーディ、ニトロチャージ！」

「ワフ！」

「フシギソウ、せいちょうですわ。」

「気に入るなガーディ、ニトロチャージでスピードを上げまくるんだ！」

「ウフフ、私の前でどれだけ走ろうと無意味ですわ。」

「ガーディ、ここで終わらせるぞ！フレアドライブ！」

ガーディの体が一瞬で青いほのおで染まりフシギソウに突撃した。

「フシギソウ、ソーラービームを放って下さい！」

「行け、ガーディ！」

2つの攻撃が勝負を決した。

## 私とデートしてくださいさる？

2つの協力的な技がぶつかり合った結果、ガーデイが横に倒れていてエリカ先輩のフシギソウが立っていた。

「な!？」

「ウフフ、良くやったわフシギソウ。」

何故負けた？フレアドライブはほのおタイプの中でも強い技の筈だ。それに、もし反動を受けたりソーラービームを直で食らってもまだ余裕があつた筈なのに……まさか!？」

「やつと分かりましたかしら？」

「持たせている道具ですよね。」

ジムリーダーエリカは片手を口に当てながら「正解。」と答えた。でも、それだけじゃない。確か、フシギソウが使ったのはソーラービームとせいちょうの筈だ。後の2つは……!？」

「もしかして、持たせていたのはきせきのタネでフシギソウの覚えている技はせいちょうとソーラービーム、後はどくのこなとやどりぎのタネですか？」

「大正解です。空手大王さんのところで修行した成果が出ていて先輩としてはブルー君の成長が見られてとても嬉しいですよ。」

「やはりですか、俺のフシギダネの頃の良く使った戦法ですね。」

「はい、まあ私個人も良く使わせてもらう十八番なんですけどね。」

「でも、いつの間にもどくのこなとやどりぎのタネを使っただんですか？」

「それを教えて貰いたいなら、今日私とデートしてくださいさる？」

ジムリーダーエリカはニヤニヤしながら聞いてきた。やはり俺はこの先輩が苦手だ。だが、それ以上にエリカ先輩は俺の反応を見て楽しんでる。とても良くない傾向だ。多少危険だが、この人に弄ばれるのは気がすまない。俺はデート挑発にのる事にした。フシギソウの仮面を取り笑顔で答えながら、

「はい、お願いします。」

「その顔でブルー君に答えられても嬉しくありませんわ。今のブルー君の顔は見たくは無いので早く元のブルー君の顔に戻してくれないと一緒に行ってあげませんわよ。」

この人ホント面倒だな。

俺はナツメさんに電話を掛けて全てが水の泡で終わった事と元の顔に戻してくれるようにまたタمامシシテイに来てくれとお願いすると、「コダックをレンタルしてくれるなら良いわよ。」とコダックナ好きが言ってきたので仕方なく同意してやった。その後

は、俺の体にある発信機と盗聴器を外してもらおう。

〈数十分後〉

「はあ、成る程。エリカもジムリーダーに入った頃は「ある方を捕まえて私と愛のランデブーをする為に入ったんですわ。ジムリーダーなんて私からするとそのため準備がしかりませんわ。」って言ってたから誰のことかと思えばやはり貴方の事だったのね。何故貴方はエリカを避けるの？ 言ってしまえばなんだけど、あの子は結構顔もスタイルも私よりも良いし、将来的にもうってつけだと思うのだけど。」

そんな馬鹿な事をナツメさんは言うてきたので、俺は5年前の悪夢を話す事にした。「何故俺がエリカ先輩を避けるかって言うと、雲よりも大きい事情があるんですよ。少し時間がありますし、聞きますか？」

「ええ、お願い。」

〈五年前〉

俺はタマムシシティに家族で引越して、ポケモンスクールで3年の歳月が流れた頃の話です。丁度その頃、エリカ先輩も生徒として在籍していたので、最初の頃は学校も違いお互いの顔だけは知っていました。まあ、顔だけですけど、

ポケモンスクール

「みんな、隣のクラスにユミって名前の子が入ったららしいぜー！ 見に行こうよー！」

「それ良いねー!」

「さんせい。」

クラスの馬鹿共はよく女子が転校してきただけでこんなにはしゃげるんだ?やはり最近の男子の頭の中はお花畑なのか?それとも発情する植物でも脳に植えてるのか?ま、俺には関係ないからいいや。

「なあブルー、お前も行こうぜ!」

「やめとけよ、ブルーはなかなか俺達と行動してくれない奴だからほったらかそうぜ。」

「お好きに言えば、俺はお隣の転校生なんかに一々見に行く程暇じゃ無いんだ。てめえらだけで噂の可愛い転校生でも見に行ってる発情期共。」

「うるせえ!ブルーとはもう一生遊んでやんねえからな!」

「分かった分かった、お前らと俺も遊ぶ気ねえから早くどっか行ってくれ。俺は昼休みのお昼寝タイムを満喫したいんだよ。」

「ち、もう行こうぜ。」

発情期共はクラスに俺を残して出て行った。

「ブルー君、ちよつと良いかな?」

俺を呼んだのは担任のナナカマド先生だった。

「なんですか?先生。」

「実はこの地区とは違う学校へ今から論文を提出しなくちゃならないんだが、上級生の教室にこのダンボールを運んでくれないかな？」

ナナカマド先生は睨むような顔して言ってきた。この先生元はいい先生なんだけど見た目が怖すぎて俺は心の中で「なんで俺なんだよ！」と叫んでいた。結局俺はナナカマド先生の頼みを受けて6年生の教室へやってきた。

「あの、このダンボール何処に置いとけば良いですか？」

「嗚呼、ナナカマド先生の生徒ね。廊下の前に置いといて、それより聞いてよジユンコ！私さ……………」

なんて言うか、俺いつも通り空気だな。まあ、いいか。どうせ人生なんてそんなもんだ。

「その君、ちよつといいかしら？」

俺に話しかけて来たのは、着物を着た上級生の先輩だった。

まだ出会って数時間しか経ってませんけどね。

学校で着物を着た先輩は何処かの誰かさんを読んでいたのかは知らないが俺には関係無いのだろうと自分で解釈してクラスへ戻ろうとした。その時、ムスツとした顔で俺の前に着物の先輩が立ちはだかる。

「どうして無視するんですか？」

「逆に聞きますが、何故俺を？特に着物先輩と知り合いでも友達でも無いのに声を掛けられるのは不自然かと思いますが。」

「へえ、最近は生意気な後輩がいるんですね。この学校の生徒がこんな捻くれていたなんて、生徒会役員として見過ごせませんわ。」

「で、結局俺になんの用事があつて声を掛けたんですか？」

「この書類を職員室まで運んでもらいたいのですが、手伝ってもらえますか？」

「そこら辺の男子に声かければ勝手に運んでくれると思いませんか？」

「貴方は私をなんだと思ってるんですか？」

「馬鹿な男子に色目使つて周りの女子に良く喧嘩を売る野蛮人ですかね。」

「な!?私そんな酷い人間じゃありません!それに男子に色目使ってる?私はただ周りの

殿方に普通に接して居るだけですわよ。」

「それが駄目なんですよ。まあ、俺にとつてはどうでもいい事ですけどね。」

俺がクラスへ戻ろうとした瞬間肩にポンと手を着物の先輩が置いた。

「何逃げようとしてるんですか？」

「俺関係ないですよ、それに手伝うとは一言も……、」

「この書類お願いしますね。」

俺が言い終わる前に前が見えないくらい紙の束を一気に持たせられた。嗚呼、こういうのを社畜って言われているのか。俺は面倒な仕事を片付けた後、昼寝をしようと考えていたが教室に戻ると次の授業の予鈴が鳴った。最悪だ、今日は付いてないな。

〈数時間後〉

帰りのホームルームが終わり、俺はいつも通り家に帰ろうと玄関には着物の先輩が立っていた。

「あら、やっと来ましたか。待ちくたびれましたわ。」

「なんですか着物先輩、俺を追っかけても何も面白い事なんてありませんよ。」

「失礼な、今日書類を運ぶのに手伝ってくれたのでご褒美として何か奢って差し上げようと思っていましたのに、それは残念ですわ。これは、またの機会に……。」

「待たせてすいません、何処へ行くんですか？荷物もお持ち致しますよ。」

「現金な人なのでね、少し見損ないましたわ。」

「勝手に言っただけでいいですよ。俺はサイコソーダが飲めればなんでも良いんですから。」

「そんな高い買い物はしませんわ。それに、貴方が選ぶのではなくて私が選ぶんです。それと、荷物持ってきてくれるんですのよね？」

「なんの事か記憶にございません。」

「ハア、元々期待して無いので別に構わないのですが貴方って将来損しますわよ。」

「大丈夫です、将来はニート生活を考えているので働こうとも思っていないです。すよ。」

「それは、貴方の両親が可哀想ですわ。」

「なんとでも言えばいいじゃないですか。着物先輩には関係ない事ですよ。」

「その着物先輩って辞めてもらっていいですか？私の名前はエリカです。せめてエリカ先輩と言いなさいブルー君。」

「いつから俺の名前を知ってたんですか？」

「これでも生徒会役員なんです、貴方の学年の生徒名簿を見れば一発で分かりますわ。」

成る程、この人あれだ。疑問に思った事全てを理解しないと納得しない人だな。

「それでは、ショッピングモールへ行きますわよ。」

「え、今から？」

「はい、今から。」

「絶対に？」

「絶対に。」

エリカ先輩は俺の希望を同じ言葉で砕いてきた。あーあ、これじゃあ夕方方に放送されるドラマの再放送が見れないな。

タママシシヨツピングモール

「こうして見ると、カップルと思われそうですわね。」

「エリカ先輩と？は！」

「今鼻で笑った意味をお聞かせ下さい、解答によつては貴方をタダで帰すわけにはいきませんわ。」

「えー、だったらいいです。先輩から俺に告白してくれたら考えてあげてもいいですよ。」

「ウフフ、やけに上から目線で言いますわね。その言葉に今回は乗ってあげますわ。そうですね、この後このシヨツピングモールの屋上にある観覧車に乗りませんか？そこ

で貴方の理由を聞いてあげますわ。」

「え、冗談のつもりで発破かけただけなんですけど。」

「良いですわよね?」

ハア、言わなきやよかった。

タママシシヨッピングモール 屋上

「さて、利用権も買いましたし早速観覧車に乗りましょうか。」

「本当に乗るんですね。分かりました、ここは腹を決めて告白されますよ。」

「ブルー君が腹を決める必要は無いのでは?」

「エリカ先輩が解答によってはただで帰さないと言ったんでしょうが。」

「勿論ですわ、半端な理由で私を笑うのでしたらブルー君の裸を学校の国旗校旗と一緒に晒すのもアリと考える程には、」

「意外とエゲツない事考えますね。そろそろ順番が回って来ましたよ。」

「ええ、そうですね。私に告白されるなんて人生で一度あるかどうかも無いのですから無下にしたら許しませんわよ。」

「はいはい、」

俺は適当に首で2回相槌をした。観覧車の中に入ると当然の事だが街が小さく見え

た。誰でも高い所から見ると街は小さい筈なのに、ちよつとした感動が自分の中に残る。

「私よりも外の景色の方が好きなのですか？」

「はい、観覧車に乗るのがなかなか無い為タママシの街を此処から見えたのは少し感動を覚えました。」

「……………私もこの景色が小さい頃から好きでした。いつも通りに並んでいる商店街やポケモンスクール、ポケモンセンターにフレンドリーショップなどいつも通りの風景が私も好きで、いつのまにかブルー君もその一部に入っていました。」

「まだ出会って数時間しか見れてませんけどね。」

俺がそんな事を言うと、エリカ先輩は俺を睨みながら目で「黙ってなさい。」と訴えてきた。

「そんなブルー君を誰よりも愛していますわ、……………これで良いでしょ／＼早く笑った理由を言いなさい。」

「え、しようがないな。」

「貴方ねえ、……………!?!」

エリカ先輩が言う途中で「ガタ！」と音がして、それと同時に観覧車の中が傾いた。え？これ……………俺達閉じ込められたって事だよな。

ブルー君がヘタレなだけじゃないですかww。

「それで、私を鼻で笑った理由をお聞かせ願いますわ。」

「今この状況で聞きますか？」

「はい、この観覧車はもうすぐ止まる筈です。その時にポケモンレスキュー隊の人達が来てくれるでしょう。それよりも、さつき約束通りにブルー君に告白しましたわよ。うやむやにして無かった事にしようと思っただけじゃありませんわよ。逃がしませんわよ。」

エリカ先輩はそう言いながら、俺の元に迫って来た。

「ちよ!?! エリカ先輩が近づくと観覧車もつと傾くでしょうが!」

「いいから答えてください、あの時な、わ!?!」

エリカ先輩は脚を滑らせて俺の体に押しかけてきた。側から見れば俺の上半身に跨るような形でエリカ先輩はマウントポジションで押し倒しているようだった。

「イッター! 言っただけでしょうが、もうちよつと考えて行動してください!」

「そんなの言われなくて、も………// //」

近くでエリカ先輩と視線が合った瞬間、エリカ先輩の顔がどんどん紅く染まった。

「大丈夫、大丈夫、心臓の鼓動を整えて深呼吸をしながら頭の中をクリアにするのですよ

エリカ、これは吊り橋効果であつてブルー君に決してドキツとした訳では無いのですわよ！」

「いいから離れてくださいよ、後輩の俺からするとちよつと重たいんですよ。」

「ちよ、ちよつと重たい!!? そんなムードもへつたくれもない言葉を何故選択するんですか！これじゃあちよつとドキツとした私が馬鹿らしくなるじゃありませんか！」

「あー、はいはい分かりました。すいません、これで良いですか？」

「良くありませんわ！貴方は昼間もニートになるだとか言つてもう少し将来の事を考えた方が良いのではなくて！」

「ちよ！俺の体にかかつてる状態で説教しないで下さいよ、わ!!」

また、観覧車から「ガタンー」と揺れる音がした。そろそろここもヤバイな。早くレスキュー隊の人来いよ！これじゃあ今日のデザートプリンが食べれないじゃねえか！

「ハア、これじゃあへたに動くよりもこの状態で静止している方が安全ですわね。変な所触ると承知しませんわよ。」

「この状況でそんな事する人がいるなら尊敬しますよ。……少し脱線したけど

、また文句言われるかもしれないから先に理由を言つておきますね。」

「ええ、そうしてくれると此方も有難いですわ。じゃないと私が告白した意味がありま

「せんの、」

「俺が鼻で笑った理由は、エリカ先輩と付き合ってる姿が似合わないと思ったんですよ。」

「え!?それってどういう事ですか?」

「言葉の通りです。数時間一緒に居るだけでエリカ先輩も俺の性格が大体理解出来たでしょ。」

「ええ、特に面倒な事があると嫌な顔をブルー君は良くしますわね。」

「そんな人間がエリカ先輩のようなりアルで沢山友達と喋るような人と一緒にデートする光景なんて似合わないでしょ。」

「なんだ、そう言う事でしたか。もつと馬鹿にされたように感じられましたわ。でも、確かに私達がデートする姿なんて似合わないですわね。」

「でしょ、だから笑ってしまったんですよ。」

「そうですか、そういうえばこの状態でレスキュー隊の方々に見つかるとう見ても私達が付き合ってるように見えますか?」

「まあ、そうなんじゃないですか?あの、何故段々顔を近づけて来てるんですか?ちよつと、近い近い!吐息当たってますっつて!」

「ウフフ、ブルー君って突然起きる状況は弱いんですね。」

そう言いながら、エリカ先輩は俺の抗おうとする両手を壁に押し付けた。

「ちよつ?!後輩をからかって恥ずかしく思わないんですか!」

「あら?ちよつと重たいなんて言うブルー君が言えた事では無いと思うんですが、」

「あのですね、普通の男子ならここまで来ると落ちてますよ。良かったですね、俺がガラスのハートの持ち主で!」

「(ブルー君がヘタレなだけじゃないですかwww。)」

「あの、わざと聞こえるように言ってますよね。これで間違いでも起こしたらエリカ先輩は年下好きの変態という称号が学校中で広まりますよ!」

「今のブルー君にはそんな広める勇氣ありませんよね。」

「そうですよ、それがどうしたんですか!そんなに俺を虐めて面白いですか!」

「もう、イジけないで下さいよ。仮にも男の子でしょう?」

「それセクハラですよ!先輩だって女子だからってだけで固定概念を押し付けられるのは嫌でしょ。」

「それとこれとは別問題ですわ。」

そんな話をしているうちに、周りから「ガン!」と支えが切れた様な音がした。なんか嫌な予感がするんだが、気のせいだろうか?

「あの、ココ落ちてませんか?」

「え？」

その瞬間下から凄い衝撃が下から感じて、その瞬間エリカ先輩の頭が思いつきりぶつかり俺はそれからの記憶が無い。

〈現代〉

「そこから俺の記憶がぬけていて、その次の日からエリカ先輩は俺の顔を見る度に顔を赤くしてどんだんアプローチがエスカレートしていったんですね。ホント、エリカ先輩と俺が付き合うなんて今でも考えられないのに。」

「うん、それを理由に振るのはエリカを女として同情するわ。ホント、恋する乙女は苦勞するのね。それよりも、コダックは何処にいるかしら？早くねんりきごっこの続きをしたいのだけど。」

「自分から聞いて来たくせになんか何気に手の平を返しましたね。あ、そういえば俺の体に仕込まれた発信機と盗聴器をとってもらえませんか？」

「人間が取り付けた物は取り付けた人がなんとか出来ると思うからエリカにお願いしたら？」

「コダックの使用制限を5時間に増やしますが、どうしますか？」

「それを早く言いなさい！」

エリカ先輩ってあく・ゴーストタイプじゃないのだろうか。

翌日

今日はエリカ先輩とデートをする約束になっっている。そういえば、ずっと気になっっていたんだがジムリーダーの年収っていくらなんだろう？まあ、肩書き上この街のリーダー的存在でもあるから色々なテレビに出てお金持ちなんだろうな。そういえば、エリカ先輩って昔から着物着てたよな。もし家の作法とかで着てるのなら元々金持ちの可能性もあるし、ポケモンスクール時代は高嶺の花だって言われるくらいのお嬢様って言われてなかったっけ？もう5年前の話だから忘れてしまったけど。俺がそう考えている内に、後ろからトントんと肩を誰かが叩いてきた。どうせエリカ先輩なんだろうなって思いながら振り向くと、ニビシテイのジムリーダーであるタケシだった。

「やあ、久し振りだなブルー君。」

「はい、タマムシに来てどうしたんですか？」

タケシは苦笑いをしながら「まあ、ジムリーダー同士の繋がりを大事にしようと思っ  
て色々な街に顔を出しているんだが、ここのジムリーダーであるエリカさんは何処にも

居なくてな。追い返されて来たんだ。」と言ってきた。

「すいません、何故見つからない理由は多分俺のせいです。」

「え、どうしてブルー君が謝るんだ？」

「実はですね、って言ってる間にタケシさんの探<sup>エリカ</sup>し人が来たらしいですよ。」

「遅くなつてすいま……あら、どうもタケシさん。お久し振りですわ。ニビシティのジムを開けてまでタママシになんの用事ですか？」

エリカ先輩は、タケシを見た瞬間目の色がドンドン真っ黒に染まつて、真っ黒なオーラをエリカ先輩の体から激しく感じた。エリカ先輩ってあく・ゴーストタイプじゃないのだろうか。俺はそんな事を考えながらタケシを見ると、顔が引きつっていた。

「すいません、実はロケット団<sup>ロケット団</sup>の事で聞きたい事がありました。」

「嗚呼、この街に潜む<sup>ロケット団</sup>ネズミの事ですか。だったら私よりもジュンサーの方が詳しい筈ですが、」

「この近くのジュンサーさんに聞いたところ、ロケット商談というスポンサー会社その後押ししたゲームコーナーがこの街にあると聞きました。エリカさんは何か知っている情報があればと思ひ伺ったのですが、」

「すいません、あのゲームコーナーは中々隙を見せてくれなくて社内を見せられないと言っているのです。機密情報がどうだこうだ言って入らせてくれない、という所までし

か知っておりませんの。すいません、力になれる程の情報を持っていなくて、  
「いえいえ、そこまでの話を聞けるだけでも有難いですよ。あ、後ブルー君。君にニビ博  
物館の白衣を着た研究員の方からこんな石を渡してくれて頼まれてね。俺にはこの  
石の利用価値がなんなのか分からないが、君なら使いこなせるかもしれないし、一応言  
われた通りに渡しておくよ。」

そう言つて、タケシから謎に輝く石を貰つた。

「それでは、」

「はい、」

タケシはそう言つと、街の出口の方へと歩いていった。俺は謎に輝く石をバックの中  
にしまった後、エリカ先輩に連れられながらタマムシの街を歩きまわる事にした。

「ショッピングモールの屋上にある観覧車に乗りませんか？あの景色をまたブルー君と  
眺めたいです。」

「俺は構いませんけど、いきなりどうしたんですか？」

「ほらほら、そう言わずに行きますよ。」

エリカ先輩は俺の体を手で押しながらショッピングモールへと足を運んだ。

ショッピングモール 屋上

「さて、次は私達の番ですわね。ブルー君、行きますわよ。」

俺は、エリカ先輩に手を引かれながら観覧車の中に入った。なんか懐かしいな、この感じ。どんどん街が小さく見えていく感じが少し心の何処かでドキツと感じた。俺が外の風景を見ている間に、エリカ先輩が声を掛けてきた。

「5年前も同じでしたわね。私の事より外の風景を好む人なんてブルー君くらいしか居ませんわ。」

「で、本題はなんですか？俺をデートという形で何を教えたかったですか？」

「ウフフ、まさか私がブルー君をデートに誘った事をずっと疑っていたのですか？」

「当たり前です、だから外で聞かれないように観覧車へ誘ったんでは無いんですか？」

「その答えだと50点です、半分はブルー君と一緒にまた観覧車に乗りたかった事もちゃんと入ってるんですよ。そこまで気づかないなんて、まだまだブルー君も子供ですね。」

「で、何を話したかったですか？」

「ブルー君はロケット団を何故追っているんですか？」

「その言い草から察するに、タケシさんへ言った情報はアレで全部じゃないんですね。」

「話を逸らさないで、ブルー君はどうしてロケット団を追っているのですか？本音<sup>眞実</sup>を話さなければロケット団の居場所を教えませんわよ。」

「そうですね、……………エリカ先輩はジムリーダーだから聞いた事はあるんじゃないです

か？トキワシテイのジムリーダーがロケット団のトップを務めているって噂、」

「ええ、毎年全員集合するジムリーダーの会議にも出ないので顔も名前も不明でしたから単なる噂だと思っただけです。」

「ただ、その噂が本当だとすると……どうなると思いますか？」

良い子の皆は虫除けスプレーを人の顔面に向けないでね。

「それは、どういう事ですか？」

「今まで俺がロケット団と対面してきた中では、ニビ博物館にオツキミ山、そして7番道路にあるジュンサーズスクール、特にニビ博物館で奪われた古代のポケモン達が奪われた道中でロケット団を追っていくうちにオツキミ山で俺はこんなのを見つけました。」

俺は、エリカ先輩にRという文字の書かれたモンスターボールを出した。

「これは、モンスターボール？」

「はい、ロケット団が作ったと思われるモンスターボールです。アイツらは古代のポケモンだけを回収して化石を置いていきました。そして、俺の前でロケット団はトングラして多分アジトへ向かったんだと思います。」

「それで、その話がロケット団の目的とどう関係があると考えているんですか？」

「それは、………まだ分かりません。ただ、1つだけ言えるのは古代のポケモン達を捕まえるだけじゃ収まらない連中だと俺は考えています。」

「なるほど、………分かりましたわ。そろそろ観覧車デートを終わらせて、ロケット団の居

場所を教えてあげますわ。タケシさんの言っていたゲームコーナーの話は聞いてますわよね。その中にあるポケモンバトルのチラシの裏が怪しいと考えていますの。ワザワザ見張っているロケット団の服装をした男がいるのですと疑問に思っていました。多分そこがロケット団のアジトへの入り口が隠されていると思いますわ。十分注意して行動してくださいね、あのロケット団のアジトに忍び込むなんて自殺行為にも等しいのですから。」

「はい、分かりました。それはそうと、今日のデートって元々ジム戦で俺が負けた敗因を教えてくれる為に誘ってくれたんじゃないんですか?」

俺がそう言うと、エリカ先輩は「あ!」と声を出した。絶対に忘れてただろアンタ! 「まあ、そうでしたわね。またの機会にヒントを出しますわ。」

「ヒント? 教えて貰うならデートしてくれって言ってましたよね。」  
「時には自分で考える事も大事ですわよ。」

エリカ先輩はそう言いながら、俺に向かってニコツと笑いかけた。クソ、根っこはこの人5年前から変わんねえな。全く、この人といったら調子が狂う。

ゲームコーナー

俺はエリカ先輩に教えて貰った通り、ゲームコーナーに来ている。特に目立った所と言え、やはりチラシと睨めっこしているロケット団の服装をしている男性がいる。も

し一般人なら趣味悪いな。俺はそう考えながらパチスロをしている。今のところ3戦0勝という悲しき結果を残してメダルコーナーを徘徊していた。このパチンコなかなか当たんねえな。ロケット団がスポンサーをするだけあつてぼったくりだなこのゲームコーナー。それにしても、なかなかあのチラシから離れてくれそうにないな。そうだ!?

「あの、すいません。ここのパチンコなかなか当たらないんですけどコツつてありますか?」

俺はチラシの前で立っている男性に問いかけた。

「あん?知らねえよ、そんなの運だろ?当たるまで引いとけばいつか当たんのさ。」

「なら、お手本見せて貰つて良いですか?お金なら奢りますよ。」

「……………一回だけだぞ、それ以上は受け付けないからな。」

「はい、ありがとうございます。」

俺は、なんとかチラシの前に立っている男性をチラシから遠ざけると男性が背中を向けてスキが出来たのでミニリュウを俺の首から男性の首に移動させて巻きつかせた。男性はミニリュウから首を締め上げられて呼吸困難になった瞬間俺のじごくづきで男性のみぞおちを殴り、意識を刈り取った。誰も見ていなかったようなので、ロケット団の服装をパクつて、口、足、両腕をあなぬけのヒモで縛ると、声を出されては困るので

洋式トイレに男性の顔面を突っ込んだ。その後にはチラシを壁から剥ぎ取ると、何かのボタンが設置されていたので人差し指でポチッと押すと、「ガガガガガガガ！」という音が聞こえた。周りの店員さんやお客さんは皆慌てていたが、俺は気にせず奥に現れた階段を下っていった。

### ロケット団アジト 地下F1

中の様子を見ると、中にはエリカ先輩の予想通りロケット団が潜んでいた。もしかすると、ニビ博物館の化石ポケモン達はここに保管されているのかもしれないな。そんなことを考えている間に下へ下へと階段を降りていった。幸い、見張りの男性が来ていたロケット団の服装が丁度俺のサイズとぴったりだったので周りから怪しまれずに済んだ。どんどん奥に向かっていくと、大きな赤い扉を発見した。その扉の前には見張りが2人ついていたので、大方ロケット団のボスがいるのか、奪った化石ポケモン達が閉じ込められているかの2つだろう。俺は見張りの前に行き、「侵入者が入り込んだぞ、気をつけろ！もう中に忍び込んでる可能性がある！」と俺は嘘を言い、その言葉に騙された見張りの2人は部屋に入ろうと俺に背中を向けたので背中から抱きつく形で二人に虫除けスプレーを顔面に浴びさせた。すると、かなりの異臭がしたのか2人共気絶してし

まった。  
良い子の皆は虫除けスプレーを人の顔面に向けないでね。

どうも、侵入者です。

赤く大きな扉を開けると、中には2人の男性が話していた。

1人は水色の髪で黒いセーターを着ている。少し暗い雰囲気顔で目が細く、手には虹色に輝く少し大きめの石が付いた指輪を付けていた。セーターの左胸にはRのマークがある。一方もう1人は、奥の椅子に座っている歳老いた男性で黒いスーツで身に纏っていた。とても悪人面をしていて少し顔が怖かった。

「結果はどうだ、アポロ。」

「は！サカキ様。今のところヤマブキシテイのシルフカンパニーをラムダが制圧した様子です。そこで、こんな物がありました。」

「これは？」

「シルクスコープという、見えない物に見えるようにする機械のようで御座います。」

そこで取り出されたのは、少し大きめの双眼鏡？のようだ。

「ふん、ロケット団はこんなオモチャを追い求めていた訳ではない。我々の目的は……誰だ、許可なくこの部屋に入ってきた者は！」

あちやー、バレちゃいましたか。まあ扉開いてたから気づくよね。俺は着ていた口

ケット団の服装を雑に脱ぎ捨てて2人の前に顔を出した。

「どうも、侵入者です。」

「ふざけているのか？ 貴様何者だ。」

「俺？ 俺はごく普通のトレーナーだよ。アンタ達ロケット団を潰すためにね。それにしても驚いたよ、まさかシルフカンパニーまで乗っ取るなんて今までで一番ビックリしたニュースだね。」

「此処に来たという事は、私に用があつて来たのではないか？」

後ろに座っているオッサンが言ってきた。あの人ヤケに上から目線で話してくるな。まあ、こんな大きな部屋だからトップクラスの人で違いないだろうけどさ。

「うん、ニビ博物館で奪った古代のポケモン達は何処にいる？」

「私が話すとしても？」

「聞いてきたのはそっちだよ。」

「偉くサカキ様に馴れ馴れしい小僧だ。此処は俺が痛めつけてやる。」

「へえ、確か名前はアポロさんだっけ？ ランスの時と言い、また面倒な人が出てきたな。」  
「ランス？ 嗚呼、あの愚か者の事か。そういえばランスから報告があつたな。ブルーという名前の駆け出しトレーナーが割り込んで来たと言った情報があつた。」

「誰の事ですかね。」

「惚けても無駄だ。因みにそのトレーナーは紫のシャツで灰色の短パン、そして髪と目の色がカントーで一番多い黒だと聞いている。」

アポロはニビ博物館での俺の写真を見せてきた。顔バレてんのかよ、それにここまで知ってるって事は、顔バレしてんのは俺だけじゃないな。

「へえ、ロケット団つてもしかして俺のファン？ごめんね、俺サインの書き方練習してないんだ。」

俺の言葉を無視して、アポロはモンスターボールを取り出した。

「さあ、ブルーと言ったか小僧。お前の命は此処で尽きる運命だー！」

「それはちよつと俺を舐めすぎじゃないのアポロさん。今の俺からしたらさ、アンタと奥にいるサカキって名前のオッサンを捕まえてジュンサーさんに放り込めば万事解決なんだよね。つという事で、ジュンサーさんが来るまで制限時間は後10分も残ってないよ。なにせすぐ近くにある7番道路のジュンサースクールの講師に連絡したんだ。まだ未熟なジュンサーさんならともかく、200人以上いる生徒を取り仕切る現役のブロ<sup>ジュンサー</sup>が来たら、流石のロケット団も焦るんじゃないの？」

「なるほど、そうやって我々の顔色を伺いながら楽しもうとしているのなら筋違いも良い所だな。」

「何？このゲームコーナーは立ち入りが難しいって言いたいの？ならば、この写真を送

「られれば関係ないんじゃないの？この部屋で寛いでいるアポロさんとロケット団のトップであるサカキさん。顔バレしてんのは別に俺だけじゃないだろ？」

「何!?まさか、貴様！」

「此処からが本番なんだけど、化石ポケモンは何処にいんの？それを教えてくれたら逃してやつても良いよ。」

俺がそういうと、サカキはニヤッと笑い見透かしたような目で言ってきた。

「ほう、わざわざ逃してくれるのか。それなら、私達を捕まえてから聞き出した方が早いのでは？」

「何、では、今のは!？」

「全部フェイクだよ。あーあ、せっかくアポロさんが面白い顔をしてくれたのに見破らないですよ。まあ、こんなごく普通のトレーナーがそんな凄い現役ジュンサーさんなんて呼べるわけじゃないじゃん。馬鹿なの？」

「クソ、お前はタダでは済まさんぞ小僧！」

「来いよ嘯ませ犬！アンタは俺の敵じゃない。」

「言ってくれるな、なら負けた時後悔しても遅いぞ！」

「すぐに終わらせてやるよ、いくぞコダック！」

「コダック！」

「ふん、舐めてかかった事をあの世で後悔させますよ。マタドガス！」  
「ドツガー！」

出た瞬間に虫除けスプレー以上の悪臭が部屋に充満した。なんだコイツ!? メツチャ臭え!

「マタドガスはドガースの進化系でどちらかがしぼんで体内の毒ガスを混ぜてより有毒な毒ガスを作っている。私のマタドガスは特に特殊防御が高いのでそのコダックじゃ傷一っ付けられませんよ！」

「説明どうも、なら普通の防御が弱いつて事だろ。コダック、しねんのずつき！」

「コダック！」

「マタドガス、ヘドロばくだん！」

「ドツガー！」

マタドガスは噴き出しているガスが多く噴き出され、口から勢い良く放たれたヘドロばくだんはコダックの体に当たり、後ろの壁にまでコダックを吹っ飛ばした。

「これはまだ準備運動程度なんですがねえ。」

舐めやがってこの野郎!

アンタの負けだ。

「コダック、もう一度しねんのずつき！」

「コダック！」

「何度やっても無駄ですよ、ヘドロばくだん！」

「ドッガーー！」

「コダック、技を中止して後ろへ飛べ！」

「コダック！」

コダックはしねんのずつきを出来ずにヘドロばくだんを避けてなんとか回避した。しかし、今の状況ははつきり言つて最悪だ。確かに特防よりも防御が低くても相手は遠距離で攻撃してくる。なんとかあのヘドロばくだんを対処しないとこの状態が続いてしまうな。

「それならコダック、メロメロ！」

「コッダ！」

「何!？」

コダックはこう見えても雌なんだ。だから、大抵のオスポケモンはこれに引つかかっ

てメロメロ状態になる。マタドガスの周りにコダツクのウインクで発生したメロメロは見事に的中したらしい。

「マツタ〜♡」

「コダツ?!」

どうやら、マタドガスはコダツクに好意を持つ事で近づいてきたマタドガスの匂いが強烈でコダツクは鼻の辺りを両手で抑えながらマタドガスから逃げている。

「コダツク、マタドガスの後ろに回り込め!」

「コダツ!」

「マタドガス、気をしっかり!」

「マツタ〜♡」

マタドガスが近づいて来た瞬間をコダツクは狙い、下からスライディングで抜けた。

「そこからしねんのずつき!」

「コダツ!」

「マタドガス、耐えるんですよ!」

「マツターーー!」

マタドガスは壁にめり込み気絶した。

「クソ、次は貴方ですよゴルバット!」

「ゴル！」

「コダック下がれ、次はお前だプテラ！」

「デイーラ！」

「プテラ？まさかそのポケモンは！」

「嗚呼、そういえば言っただけでなかったな。このプテラはニビ博物館の白衣の研究員が懸命に守ったプテラだ。盗まれた古代のポケモンを取り返す為にも俺はロケット団に負ける訳にはいかない。」

「タイプ相性で語る場所だけがポケモンバトルとは言わないのですよ！ゴルバット、どくどくー！」

「ゴル！」

「プテラ、相手のスピードを下げるぞ。がんせきふうじ！」

「デイーラ！」

相手のゴルバットはがんせきふうじを避けながらプテラに向けてどくどくを使うが、プテラは紙一重で交わしてゴルバットを足蹴りした。

「いいぞプテラ、かみなりのキバ！」

「デイーラ！」

プテラはゴルバットに噛みついて弱点を突かれたゴルバットは怯んでいるようだ。

「悪いが、次で最後だ。ストーンエッジ！」

「ディーーーラー！ー！」

プテラは上に上昇しながら天井に向けて咆哮した。その瞬間下から幾多もの尖った岩がいきなり飛び出てゴルバットは体に当たり目を回しながら床に倒れた。

「ふん、なかなかやるではありませんか。ですが、此処からが本番ですよ！ ユンゲラー！ー」

「ゲラー！ー」

「いくぞミニリュウ、次はお前だ！」

俺はミニリュウを首から離れて地面に着いた。

「リュウ！」

「ふん、カイリュウ ならまだ分かりますがミニリュウですか。まだ発展途上の赤ん坊を出してくるとは貴方も酷いトレーナーですね。まあ、ユンゲラーの経験値としてしか役に立てないポケモンには少し酷だと思えますが恨まないで下さいよ、ミラクルアイ！ー」

「ゲラー！ー」

「今だミニリュウ、まきつく攻撃！」

「リュウ！」

「ゲラー!？」

「成る程、まきつくで少しの時間何もさせないという事ですか。しかし、時間の問題ですよ。いくら時間稼ぎしたところで！」

「うっさい黙れ頭テツカチ！テメエの相手は俺なんだ、ちまちま言つてないで対抗策でも考えてやがれ！ミニリユウ、まきつきながらりゅうのいぶき！」

「リユウ！」

「ゲラー!？」

「なるほど、確かに面倒だ。お陰でユンゲラーが麻痺状態になってしまいましたよ。でも、だからなんだと言うのですか？このまままきつくだけで時間を稼ぐのであれば時間の無駄ですね。」

「へえ、時間の無駄ねえ。でも、その時間がコイツのリーチなんだよ！ミニリユウ、いばる！」

「リユウww」

「ゲラー!!!」

ミニリユウのいばるでユンゲラーは力技でミニリユウのまきつくを押し退けた。

「良いですよユンゲラー、これで終わらせましょう。マジカルシャイン！」

「ゲラー！」

「ウンゲラーは壁に自分の体をぶつけてダメージを負った。

「まさか、この状態は!？」

「そう、混乱状態だ。元々いばるは相手の攻撃を上げる技だが、その怒りに任せたポケモンは何をするかわからねえよ。ミニリユウ、これで終わらせるぞ。りゅうのいかり!」

「ウンゲラー、サイコカッターで止めなさい!」

「ゲラー!」

「リユウ!？」

「な!?!ミニリユウ!」

ミニリユウはサイコカッターをモロに受けて体を引きずっていた。

「ハッハッハ!これは傑作だ。自ら相手の攻撃力を高めておいて攻撃技を相手にさせるなんて無意味に等しい!」

クソ、しかもサイコカッターは急所に当たりやすい技だ。ここまでミニリユウに効くとは予想外、嫌ここはトレーナーとして俺が迂闊だった。そう悩んでいる時だった。ミニリユウの体は光輝きますますデカくなって体がどんどん伸びていったのだ。この現象はまさか、進化!?

「まさか!この状態で?あり得ない!そんな馬鹿な!」

「呆れたよ、アンタはまだ理解出来ないのか?だったら教えてやるよアポロさんよ

！アンタの負けだ。大人しく認めろ咬ませ犬！」

いくらなんでもトレーナーにやってはいけない行為だと思う。

「オッス、おらブルー。イヤ、今ロケット団のアジトにいるんだけど、しかもボスと幹部が入ってる部屋でポケモンバトルしてんだ。相手は幹部の1人と思われるアポロっていう名前の人なんだ。今のところ2戦2勝なんだが、3戦目にしてユンゲラーの攻撃にミニリュウがピンチになってんだ。その瞬間ミニリュウがハクリューに進化しようとして、幹部のアポロを絶望の淵に落とせると思うとオラワクワクするぞ！って事で前置き終了。」

「誰に向かって話してるのかは知りませんが、ポケモンバトル中に余所見などあまり関心しませんね。それに、この私を絶望の淵に落とす？落ちるのは貴方ですよ小僧！」

「大丈夫だつて、ちゃんとアポロさんは俺がトドメを刺してやるからさ。ハクリュー、もう一度まきつく攻撃！」

「リュウー！」

「ユンゲラー、また力でねじ伏せてやりなさい。サイコカッター！」

「ゲラー！」

しかし、ユンゲラーは壁に攻撃して傷を負った。ハクリユウはその隙を見逃さないで、ユンゲラーの腰にまきつくをした。

「クソ、まだ混乱状態が続いてますか。」

「これからもつと苦しくしてやるよ、りゅうのいかりをユンゲラーの体にぶつけてやれ！」

「ハクリューーークク!!!」

ハクリューはユンゲラーに巻きつきながら口元にエネルギーを溜めて吐き出そうと  
していた。

「ユンゲラー、なんとかしてハクリューを追い払うのです。」

「ゲ、ラーラー！」

ユンゲラーは、アポロの声が届いているのかは知らないが壁に体をぶついたり体の至る所にスプーンの先を当てて攻撃している。ハクリューはそんな攻撃に耐えながらユンゲラーの顔面に目掛けてりゅうのいかりを放った。口から放たれた赤い砲弾はユンゲラーの体を包み、ユンゲラーに特大ダメージを喰らわせたのだった。

「リユューーーーーーーーー!!!」

ゼロ距離でりゅうのいかりを喰らったユンゲラーは後ろにもたれるように倒れて気絶した。ハクリューは気絶したユンゲラーから離れて俺の体に巻き付いてきた。

「な!? ユンゲラー!」

「ぐは! ハクリュー、ミニリュウの時よりも重たくてとても動けそうにないんだけど。離れてくれない?」

「ハク! (怒)」

もう何言ってるのか分からなかったのでマサキさんと呼ぶことにした。

「なんの用かブルーってここ何処や!」

「ロケット団のアジトですよマサキさん。それよりも、コイツの通訳お願いします。」

「ええと、なにになに? セっかく頑張ってポケモンバトルに勝ったのにこのトレーナーが甘えさせてくれなくて怒ってるっていつとるそうやで。」

甘えてる? これが? どう考えても甘えてるんじゃないやなくて俺を殺しにきてない?

「っていうか、進化したら重くなるから離れろって言っただろこの野郎! テメエ人の約束覚えてねえのかよ!」

「リュー!」

「その分バトルで頑張った分だけ巻き付いても構わないって言っただろって言つとるぞ。」

「んな約束覚えてません。いいからさっさと離れろよ! っていうか、この首筋に付いている玉はなんだ?」

「嗚呼、ハクリューの玉には天候を操る能力が備わっているんや。だから、期限を悪くさせると、」

「悪くさせると?」

「その人間の頭上に雲を集めて雷を落とすと言われてあるんや。」

俺は、その瞬間身体中が黒焦げになり口から黒い煙が出てきた。髪は天然パーマで骨が軋む音がハクリューの巻き付いている腰の部分から聞こえてくる。これは、いくらなんでもトレーナーにやってはいけない行為だと思う。

「なあ、ハクリュー。お前は俺の体に巻き付く事を許してやるから、今後一切俺に雷を落とさないって誓えるか?」

「リュー。」

隣からアポロが口出ししようと前へ出てきたので俺達は無視する事にした。

「今度モンスターボールに戻そうとしない限りは大丈夫だと言っとるぞ。良かったなハクリュー。」

「おい、そろそろ!」

「おい、ちよつと待て!?!マサキさんはどっちの味方なんだよ!」

「そりゃあハクリューの味方に決まっとるやろが。」

「尺が本当に少ないんだよ、人の話を!」

「ふざけんな！トレーナーに人権無くすならテメエらポケモンの飯の量を俺の気分次第で変える事が出来るんだよ！それが嫌ならフシギソウのようにテメエらも忠実に従ってれば良いんだよクソ野郎共！」

「いい加減人の話を聞け小僧共！」

「咬ませ犬がなに喋ってんだ、きゃんきゃん吠えてないで向こう行ってるカス。(リユウ)。」

「お前から絶対打ち合わせしてただろ！って言うか、さっきからなんなんだその喋るニドキングは!？」

「今更突っ込んできたよマサキさん。」

「ほんま、周回遅れも良い所や。ワイを知りたければ30話くらい見直しとけタコ！」

「あんまメタイ発言辞めてよマサキさん。怒られるの俺なんだからさ、」

「主人公になったブルーが悪いんやろ。文句ならこの世界の神にでも言つとけ。」

「出来るわけねえだろ！ただでさえ最近ハッチャケて行動してんだ。もう少し行動を自重しろって注意を最近されたんだから文句言つた瞬間バンだよ！俺主人公としていられないわ！」

「そろそろ俺の話の聞こうか馬鹿共！」

誰よりもエリカ先輩の目の色は濁っていた。

「それで、次は誰が俺の相手をしてくれるんですか？」

俺が挑発的に聞くと、後ろでずっと座っているサカキが立ち上がった。

「威勢の良い小僧だ。」

「なりませんサカキ様！この者の相手は私が、」

「既に勝負に負けてるなら割り込んで来るなよ下つ端。」

「おのれクソガキ！貴様なんて精々サカキ様の準備運動程度で負けるのが関の山だ。」

「そこまで言うなら徹底的にやってやるよ。いくぞコダツク！」

「コダツク！」

コダツクは両手の指先を前に出して何か集中していた。指を向けている方向はマサキさんを指している。

「な、なんや？どんだん眠たくなってしもうたわい、……zzz。」パタン

マサキさんは床にうつ伏せになりながら眠ってしまった。これ、さいみんじゆつか？コダツクなら覚えることは知っていたが、少々覚えるのが遅くないか？ま、どうでも良いや。モンスターボールの中にマサキさん戻そう。

「コダツ！」

コダツクは胸を張って『どうだ！』とばかり俺に主張してきた。はいはい、後でナツメさんに預けてやるから今はもうちよつと集中してくれ。その瞬間、サカキはクスクスと笑い出した。

「面白いポケモンを連れてきているじゃないか。喋るポケモンを見たのはさっきのニドキングで二度目だ。」

「二度目？他にどんなポケモンが喋るんだよ。」

「そこまでは言えないな、計画の柱を聞かせることになる。それに、小僧。お前は一生そのポケモンを見つける事が出来ない。見ることが出来るとすれば、私達ロケット団が世界を滅ぼす時だ。」

「なら、その計画を全力で止めさせてもらうよ。」

その瞬間、サカキが前に歩くに連れて『ドン！』と衝撃が建物の中で響いた。

「な、なんだ!？」

「アポロ。」

「はい、今の衝撃は何者かが侵入してきたようです。」

「ふん、1匹や2匹程度の鼠も捉えることが出来ないとは………失望したよアポロ。」

「申し訳ございません。今すぐ対処して参ります！」

アポロがそう言うのと、部屋を直ぐに出て走って行った。俺以外にも侵入してきた？誰だろう？まあ、この人さえ倒せばなんの問題も無いんだけど。

「どうやら私は思った以上に舐められているようだ。良いだろう、少しだけ本気でやってやる。いくぞペルシアン！」

「ミャオ！」

「ふん、ペルシアン如きで俺のコダックは倒れない！コダック、さいみんじゅつ！」

「コダ〜〜。」

コダックはペルシアンに向けて両手の指を向けて何かを念じている。

「ペルシアン、ねこだまし。」

「ミャオ！」

ペルシアンはコダックに正面から前足の2つを勢いよく当ててコダックを怯ませた。

「コダ！」

「つめときからのきりさく攻撃で終わりだ。」

「ミャーオー！」

コダックはペルシアンから攻撃を受けた瞬間壁にまで吹き飛ばされていた。なんて威力なんだ、これ絶対普通のペルシアンが出せる威力じゃ無い。だとすれば、

「何か道具で補強してるな。」

「当たり前だろう、ポケモンバトルの基本だ。私のペルシアンは何を持っているか当てて見るんだな。」

きりさくはノーマルタイプの技で急所が出やすい、しかもつめとぎで攻撃力と命中率が上がっている。それに威力を上乗せするなら、やはりノーマルタイプの技の威力を底上げをするアイテムの筈だ。なら、ペルシアンの持っている物は！

「コダック、この部屋中にみずてっぼうをかけまくれ！」

「コダッ！」

「何をしても無駄だ。ペルシアン、つめとぎからのシャドークロー。」

「ミャーオー！」

「悪いが、そのペルシアンが動いた時点でアンタの負けは確定してんだよ。コダック、水浸しにした部屋の水分も尻尾に集めながらアクアテール！」

「成る程、この狭い空間を使って強制的に部屋の温度を下げたのか。確かにあまごい状態に出来るが、俺のペルシアンは負けない、何故なら………」

その瞬間、コダックのアクアテールとペルシアンのシャドークローがぶつかり合った。2体同時に床へ背中を預けたが、立ち上がったのはペルシアンだった。コダックは仰向けのまま気絶している。

「何故なら、私はロケット団のボスであり、トキワシテイのジムリーダーでもあるから

だ。因みにさっきの勝負でもう気づいていると思うが、ペルシアンにはシルフのスカーフを身につけさせている。次に小僧、お前と会うとしたらシルフカンパニーで会おう。そこで決着を付けてやる。」

そのままサカキはペルシアンをモンスターボールに戻して、この部屋から出ていった。俺は目の前が真っ暗になり、コダックをモンスターボールに戻して、急いでポケモンセンターへ向かった。

ポケモンセンター

「どうぞ、ポケモン達は元気になりましたよ。」

「ありがとうございますジョーイさん。それでは、」

俺はそう言いながら外へ出ると、目の前にはエリカ先輩が立っていた。

「ウフフ、どうでしたか？ロケット団の基地は、」

「一言で言うと、俺にはまだ早かったです。だから、もっと強くないといけない、もっと強くなってジムリーダーのエリカ先輩もロケット団のサカキも現チャンピオンのワタルも、倒せるようにならなくちゃいけない。だから、俺はアンタを倒すよ。エリカ先輩、」

「よく言えました。それでは明日、ジムで待ってますわ。全力で貴方をお相手してあげ

ます。因みに、負けたら私と一緒にブルー君の実家へ行って逆プロポーズする荊で良いですわよね。」

「すいません、やっぱさつき言った事無しで！」

その瞬間、誰よりもエリカ先輩は目の色を濁っていた。

# 私の負けですわ!

タママシジム

「待ってましたわ、ブルー君。」

「俺、絶対嫌ですよ。自宅に逆プロポーズされる為に帰りたくありませんからエリカ先輩を本気でやりますよ。」

「全く、どれだけ私が苦手なんですかブルー君。でも、そんな私から避けようとするブルー君も好きですわ。」

「なんかどんどんエスカレートしてるから早めに始めますよ!」

「ウフフ、いいでしょう。行きますわよ、ワタツコちゃん!」

「ワタツ!」

「リベンジを果たさずプテラ!」

「デイーラ!」

「先行どうぞ。」

エリカ先輩が先行を譲ってきたという事は何かトラップを発動させるつもりだな。

「それじゃあ遠慮なく!プテラ、がんせきふうじ!」

「デイーラー！」

「ワタツコちゃん、みがわり！」

「ワタツ！」

「みがわりなんて無駄ですよ。出すだけ俺のプテラで破壊するだけです！」

「私は意味のある行動をします、この言葉の裏をとれば意味のない事はしません。この事の意味が分からないとブルー君、貴方は私に勝てませんわ。」

「なら見せてくださいよ、プテラ、かみなりのキバ！」

「デイーラー！」

「接近戦ですか。なら、タネマシンガン！」

来た！

「いくぞプテラ、急上昇！」

「デイーラー！」

「ウフフこれじゃあ前と同じですわよ。ハネツコちゃん、にほんばれ！」

「プテラ、目を覆うように急降下！」

「まさか!?!ワタツコちゃん、みがわり！」

プテラのかみなりのキバが決まったと思った瞬間プテラが口に啞えていたのはハネツコじゃなくてみがわり人形だった。

「何!?!」

「ワタツコちゃん、タネマシンガン!」

「そうだ!?! プテラ、もう一度急上昇!」

「無駄ですわよ、ワタツコちゃん。ソーラービーム発射準備!」

「無駄だ。プテラ、がんせきふうじ!」

「デイーラ!」

「その程度でソーラービームは防げませんわよ!」

「別に防ぐのが作戦じゃないさ!」

「え、なら何故?まさか!?!」

そう、ソーラービームを防ぐ為にがんせきふうじをしたのではない。がんせきふうじを使ったのはみがわり人形を破壊してスピードを遅くする為だ!

「プテラ、急降下しながらつばさでうつつ攻撃!」

「デイーラ!」

「ウフフ、随分舐められたものですわね。近づいたのが運の尽きですわよブルー君! ワタツコちゃん、プテラを惹きつけてソーラービーム発射!」

「甘いよジム<sup>エ</sup>リー<sup>リ</sup>ター<sup>カ</sup>ター<sup>先</sup>ター<sup>輩</sup>! プテラ、日の光をワタツコに浴びせるんだ!」

「それって!?! ワタツコちゃん、ソーラービーム発射中止!」

そんな事をエリカ先輩が言ってもワタツコは急に日の光を浴びてめをつぶった状態でソーラービームを放った。

「悪いけど、この勝負俺達の勝ちだ！ プテラ、ストーンエッジ！」

「ディーラー——！」

ワタツコは急所に当たったらしく一発で気絶した。

「ウフフ、あんな方法で私のワタツコちゃんをやるなんて……これは期待出来そうですわ。」

「プテラ、このまま行けるか？」

「ディーラー！」

プテラは親指の爪を出してグットポーズをとった。

「あら？ にほんばれの状態ならガーディの方がいいのでは？」

「実はそう言いながらそう来るのを誘ってるんじゃないんですか？」

「バレましたか、なかなか引っかけりませんわね。」

「どうせフシギソウに弱点を突かせた瞬間に特性の新緑を発動させるつもりなんですよね。貴方の考えなんて大抵思いつきますよ。」

「ウフフ、でもそれだと98点ですわ。」

「それ殆ど正解じゃないですか。」

「いいえ、私のフシギソウはフシギバナへと進化したのですからとても違いますわ。」

「進化!？」

「ええ、行きますわよフシギバナ!」

「バーナ!」

クソ、進化していたなんて予想外だったが、確かにフシギソウとフシギバナでは全く同じ技をしても威力が違うだろう。短期決戦で行くしかないか。

「悪いけど、一瞬で終わらせるぞプテラ! つばさでうつつ攻撃!」

「デーーーラ!」

「ウフフ、出来るといいですわね。フシギバナ、のしかかり!」

「バーナ!」

フシギバナは大きい体でどっしり構えてプテラに向かって思いっきりジャンプして地面にプテラを踏みつけた。

「デーーーラくくく。」

「プテラ!？」

「ウフフ、これで一勝ですわ。次は何を出しますか?」

「勿論、ガーディ! お前も行くんだ!」

「ワフ！」

「フシギバナ、やどりぎのタネ！」

「ガーディ、やどりぎのタネに向かつてはじけるほのお！」

フシギバナの蒔いたやどりぎのタネを全て炎で炙りフシギバナにはじけた炎の一部がフシギバナの顔に当たり叫んでいる。

「ガーディ、とおぼえ！」

「ワオーン！」

「今更攻撃力上げても今は無いですわよ！フシギバナ、しびれごな！」

「バーナ！」

ガーディはしびれごなを食らって体が思うように動かないようだ。

「ガーディ、フレアドライブ！」

「フシギバナ、はなびらのまい！」

「バーナー！」

フシギバナは両足を高く上げて地面に勢いよく落として背中のでかい花から大量の花びらが飛んで来た。ガーディは避ける事も出来ず食らってしまった。

「ワフ」(◇人へ；)

「ガーディ、立ち上がるんだ！フレアドライブ！」

「ウウウワオオーンン！」

その瞬間、ガーデイはフシギバナを睨め付けながら体を青い炎で纏い突撃した。フシギバナは壁に体を叩きつけられる程吹っ飛び気絶した。一方ガーデイは、産まれたてのシキジカのように4本足でギリギリ立っていられるのが限界のようだったが、途中でフレアドライブの反動が来たのか床に体を横に倒して気絶した。

「はあ、俺の負……」

「私の負けですわ！」

俺が言う前にエリカ先輩が笑顔で言ってきた。

「ブルー君、ガーデイは反動技で気絶しましたがバトルの判定では相手をその反動技で倒すと話は別なのですよ。」

「つまり、俺の勝ちですか？」

「はい、レインボーバッチをプレゼントしますわ。おめでとうございますブルー君。」

## 2人きりで仲良くしましょう。

俺はレインボーバッチを手にした後、ポケモンセンターで休んでいたらポケギアが鳴り始めた。連絡先はあの母さんだった。何の用か知らないけど、一応出ておくか。

『あーやっとうたわねブルー。いきなりで悪いけど今どこいるの?』

「タمامシシテイのポケモンセンターにいるけど、どうしたの?」

『マサラに来るまで秘密よ。』

「え、俺マサラタウンまで戻らなきゃいけないの?やだよ面倒臭い。」

『大丈夫よ、ブルーならそう言うと思つて今お父さんがそっちに向かつてる途中だから、すぐにマサラに着くはずよ。じゃあね。』ツ、ツ、ツ、

相変わらず忙しい人だな母さんは、マサラに来るまで秘密って言つてたけど少し嫌な予感がするな。ちよつと自己防衛の為に虫除けスプレーとあなぬけの紐を持つていつとこ。ポケモンセンターから出ると、赤い流星のような物がこっちに向かつて飛んで来ていた。数十秒もしないうちにだんだん近づいてきて、7番道路の方へ「ドカン!」と着地音がした。多分お父さんかな?

## 7 番道路

タマムシティから出ると、ジュンサーさんに注意されているお父さんを発見した。乗っていたポケモンはリザードンのようだ。着地後に地面が2メートルも抉られていた。

「次からこんな空中運転したら空を飛ぶ権限を剥奪しますよ。今度から注意して下さいね。」

「すみません、今度から気をつけます。」

「お父さん何しに来たんだよ。」

「お！ブルーじゃないか、久しぶりだな。所で何故お前の腰にハクリューが巻きついてるんだ?」

「あはは、それはかくかくしかじかあつて。」

「何、チャンピオンワタルから捨てられたミニリュウを手持ちに加えた頃からずっと体に巻きつかれているだつて!」

え、マジで!? w w w ホントに w w w かくかくしかじかで通じたよ w w w

「それよりも早くマサラへ戻るぞ。早く行かないとブルーの未来のお嫁さんさんに時間を掛けさせては大変だしな。」

「おい今なんつった馬鹿親父！未来のお嫁さん？それどう言う意味!?!」

「まあまあ、マサラに着けば分かるよ。」

「分かりたくないわポケ！絶対行かねえからな、どうせ父さんと母さんの事だ。勝つてに逆プロポーズしてきたどっかの女トレーナーに俺を押し付ける気だろ！」

「そこまで分かっているなら話は早い。すぐに向かうぞ！」

「嫌、俺行かないって！」

「リザードン、両手でブルーを抱えて運ぶぞ。」

「おい離せリザードン！テメエの顔に虫除けスプレーぶっかけるぞこの野郎！」

「たく、仕方ないな。スリーパー、ブルーにさいみんじゅつ。」

「何人間に向かってポケモンの技……を……。」 バタン

「悪いけどブルー、本当に急いでるんだ。文句なら後で聞いてあげるから今は暴れないでくれよ。」

〈数時間後〉

自宅

うう、なんか腰回りがとても苦しい。多分ハクリューが強く巻きついているのだろう。そういうええはどうして眠ってんだ？そろそろ起きよう。俺はそう思いながら両目を開くと、懐かしい顔が俺の顔の目の前で馬乗りになりながら俺の顔を覗いていた。

「おはようございますブルー君。久し振りに顔を見て良かったです。」

俺は今の状況を掴める事が出来なかった為周りを見渡すと、どうやら俺は自分の部屋のベッドで寝ていたようだ。両手両足を縄で拘束されている状態にいるようだ、

「説明してもらっていい？ ユミさん。」

「あれ？ 話聞いてませんか？ 未来のお嫁さんが今ブルー君と一緒に居るんですけどね。」

俺は真顔になりながら、「別に顔染めなくていいから腕と脚の拘束を解いてくれない？」と聞くと、ユミさんは「ブルー君のご両親が暴れられては迷惑だから多少強引でも初めてを奪って来いと言われたので、私とブルー君の初めてが終わらない限りは拘束を炊きませんよ。」と言ってきた。クソ、そういう事かよ。あのクソババア、よりにもよって年頃の女の子に向かって初めてを奪って来いなんて言いやがったのかコンチクシヨ。

「オレンジーー！ お兄ちゃんが帰ってきたから一緒に遊ぼうー！」

「無駄だよブルー君。オレンジちゃんは今ポケモンスクールに登校してるから帰って来るのは夕方、つまりブルー君とは夕方までこの状態を保つ事になるね。」

「この野郎！ 俺に救いつて無えのかよクソシヨー！ あ、そうだー！」

「出来ないと思うけど、ポケギアも外してるから連絡手段は取れないよ。諦めて私と一緒に初めてを味わいましょう。大丈夫、優しく接してあげるから。」

「何処も大丈夫の部分が見えないんだけど！ そうだ、ハクリュー今こそ出番だ。俺の拘束を解いてくれ！」

「あ、因みにブルー君と一緒にさいみんじゅつで寝ているからきつと起きて来ないよ。」

「なら、コダック！ お前の晩飯好きなだけ食わせてやるから俺の元に来るんだ！」

「それも無駄だよ、あのコダックは確かにモンスターボールから勝つてに出てきたけどブルー君のご両親がコダックを買収したらしいから此方へ逸れないわよ。」

ホントに手詰まりかよ！

「それじゃあそろそろ、2人きりで仲良くしましょう。」

## 勝手に始めんな!

「それでは覚悟して下さいね、ブルー君。／＼／＼」

「嫌だと言ったら?」

「私一人でブルー君の体を癒すだけですよ。」

嫌、そんな事微笑みながら言われても困るんですが。

『何をやっているのですか? その雌豚。』と、俺の衣服からエリカ先輩の声が聞こえた。

「あら、この声はエリカ先輩じゃないですか。まだブルー君を諦めて無かったのですね。いい加減にしないとブルー君から飽きられますよ。まあ、今のエリカ先輩じゃ私とブルー君の恋路を邪魔出来ませんけど。」

『何を世迷言を言っているのですか? 私なら後輩、貴方の目の前にいますわよ。』

「何を?」冗談を、機会音声を使われては私への説得力が足りませんよ先輩。」

その瞬間、ドアからエリカ先輩が入ってきた。

「はあ、発信機が無いブルー君を探すのに苦労しましたわ。」

「あら、まだそんな変態じみた事をやってたんですね。でも残念、ブルー君の意思に構わず私はブルー君のご両親と妹のオレンジちゃんを味方に付けている。これ以上私達に

絡んでくるのでしたら、私達の前から消えて下さい。」

事の発端はアンタかよユミさん！

「ウフフ、ブルー君。誑かされては駄目よ、今助けるから少し待つて下さいね。」

いいえ、手元の縄を解くだけで良いので！後は遠慮します！

「ほら、ブルー君もこんな怖がつているんですから私達の前から消えて下さいよエリ先輩。じゃないと、どうなつても知りませんよ？」

その瞬間ユミさんは俺の首元に手を回した。顔が近い近い近い！

「早くその薄汚い両手をブルー君から離しなさい。憎たらしい泥棒猫め！」

「あら？昔からストーカーもどきをしていた先輩には言われたくないですよ変態！」

「ウフフ、私はただ一途なだけですわよ。それを横から割り込んできたのは貴方後輩でしよう。」

「私が？忌々しいアマが私の前に顔を出さないで欲しいですよ先輩。そうだ、口で言つても分からないならポケモン勝負で決着をつけましょう。まあ、勝つのは私ですけどね。」

「ウフフ、私が10分の1程度でジム戦の時にあしらつたのを覚えてないんですか？」

「私をあの頃と一緒に考えない方がいいですよ。」

2人はそう言いながら部屋を去っていった。

「え、俺ここで動けないままずっと縛られてるの? 嫌だよ。誰かここから俺を出してよ。」

その時、ドアの前に人影が見えた。俺の部屋に來たのはお父さんだった。

「お前一体何人の女を誑かしてんだ? 将来のお嫁さんは苦勞しそうだ。」

「誑かしてねえし、嫁を作ろうとも考えてねえわ! いいからこの繩解いてよ。現在ユミさんは外でエリカ先輩とポケモン勝負してるはずだから早くここから俺もうここで縛られてる意味ねえだろ!」

「まあ、確かにそうだな。ちよつと待つてろ……、」

「お父さん、それはそこにブルー転がしといて構わないわ。私いい事思いついちゃったの。」

「おい、息子をそれ呼ばわりすんじゃないやねえよこの野郎!」

「フツ! どうせならブルーも愛されるお嫁さんが欲しいでしょ。」

「いつ俺が結婚したいと言った! 愛されるどころか後ろから刺されそんな人しかいねえよ!」

「でもそれ程ブルーへの愛は大きいという事じゃない。私はいつでも恋する乙女の味方でありたいの。ブルー、諦めなさい。貴方の意思は関係無くこの話を進めるつもりだから肝に命じておくといいわ。美しい女の子に尻を引かれる生活がね。」

「ふざけんな! 俺の人権無視さんじゃねえよコンニャロ! テメエは人間の顔を被った悪

魔だよアンタ！」

「それを実の親に言うブルーもどうかと思うけど？」

「アンタが原因だろうがお母さん！」

「ま、そこでババアと言わない辺りまだましな方ね。」

「何処で基準を測ってんだよ。」

「それよりも、お父さん！あの2人のポケモン勝負を止めて此処へ呼んで来て！」

「え!?でも母さん。近づけそうに無いほど外が荒れてるんだけど、」

「良いから早くする！今月のお小遣い無しでいいの？」

「出来るだけ善処しま……止めて来ます。」

お父さんお母さんの前では相変わらず貧弱だな。これを尻に引かれるって事なんだろうな。

「ギャーーーーーーー！」

そんなお父さんの叫び声が外から聞こえてきた。オーキド博士ですらあんな叫び方しねえよ。一体どんな攻撃をお父さんは受けたんだ？

〈数十分後〉

「よ、呼んで来まひた。」パタン！

お父さんは身体中傷だらけで何処が致命傷か分からない程手足や顔、衣服が傷だらけ

になっていた。

「待ってたわユミちゃんにエリカちゃん。」

「あの、どうして先輩も呼んだのでしょうか。」

「確かに私はブルー君のお母様と話した事などありません。一体何を？」

「そう緊張しなくてもいいわよ2人共。今から私が2人を直々に面談をするわ。そこで、私が良いと思っただ方にブルーとの交際を認めるわ。ポケモン勝負で決着するよりもこっちの方が恨みっこ無しの勝負ができるんじゃないの？」

「ウフフ、確かにそうですね。私の方が後輩よりもブルー君に相応しい彼女だと思いませんか？」

「へえ、そんな事言っただけで私が選ばれたら何も言わずに私達の前から消えて下さいね、先輩。」

「今ここで、ブルーの嫁に相応しい女子力対決を宣言するわよ！」

「勝手に始めんな！」

哀れコダツク、お前の事は忘れない。

お母さんサイド

「それで、面談というのはどのような事を話すのですか？」

「確かにそれを知らなければいくらブルー君への愛があっても伝わりませんからね。」

「それは個人の思いの強さを私に表現して欲しいわ。ブルーって旅立つ前はスクールにも行かずずっと自室でゲーム廃人と化していたから出来るだけブルーをリードしてくれる子が私的に評価は高いわ。まあ、まずはユミちゃんから面談を開始しましょうか。エリカちゃんには悪いけどブルーのいる部屋で待つてもらえないかしら？ 勿論、先駆けは無しよ。」

「……はい、分かりましたわ。」

エリカはそう言うのとブルーのいる部屋にスキップしながら移動した。

「それじゃあ、ブルーとの過去……はもう聞いたわね。それじゃあブルーをどうして好きになったのか聞いて良いかしら？」

はつきり言つてユミちゃんは側から見ると大人しそうに見えるけどすつごく純情でブルー一筋なところがあるから私の中では期待の星だわ。

「そうですね、それは個人の思い出と言うよりもこの世界の設定システムでそうなっているからと言うのが私の中で一番の理由ですけど……流石にそれはお義母様には通じませんよね。」

「当たり前よ、それは大企業の会社に面接する時『私はこの会社に働く運命なので働かせて下さい。』と言ってる事と同じだよ。そんなの面接官側からすると虚言にしか聞こえないの。何をすることもそれ相応の理由があるわ、ユミちゃんならブルーと古い付き合いだし好きになった理由があるんじゃないの?」

「それなら、私は過去に………」

〈一方その頃〉

「あの、そろそろ手首と足首に縛られている縄を解いてくれないかな?」

「ブルー君が逃げる可能性があるのに何故、それをすると私にとってデメリットでしかありませんわ。」

う、確かに母さんの事だからちよつと逃げたところでジュンサーさんに搜索願いを出すと思う。

「出来ましたわ。ブルー君、そろそろお昼にしましょうか。」

「え?もしかしてお昼ご飯をエリカ先輩料理してくれたんですか!?(マジかよ、絶対俺に食わせる気だなコイツ。クソ!ただでさえエリカ先輩の作った料理は1つだけでも腹

の中でだいぶくはつをするのにあのセリフから察するに軽く20〜30俺の腹の中に突っ込ませる気だなこの人！このままじゃ意識が持たずに死んでしまう。考えろブルー！何か解決策がある筈だ！」

「今日は私の得意料理であるコロツケを作りましたわ。男の子だから一杯食べると思い沢山作ったのでお代わりは沢山ありますわ。あ!?そういえばブルー君って両手両足が縛られていましたわね。これは仕方のない事、食べさせるのに口渡しでやっちゃいけないとは言われていない。これはブルー君の両手両足が使えないから仕方の無く私はブルー君にただコロツケを食べさせる事であって先駆けではありませんわ。」

「何言ってるのこの人。口渡しじゃあ直接口に突っ込まれるって事だよな。やめろ！俺の腹を爆心地にする気か！あ、そうだ!？」

「エリカ先輩、俺の手持ちのコダックにも食べさせて良いですか？俺じゃあこの量を食べれないし腹ペコ虫のコダックなら喜んで食べてくれると思いますよ！」

「ブルー君がそう言うなら仕方ありませんわね。それじゃあ台所でポケモンフーズを食べているコダックに味見をしてみましょう。」

「フ、フハハハハ！勝った！勝ったぞ俺は！食欲盛んなコダックならどんな食べ物でもブラックホールのような胃袋でコロツケなど一瞬で俺の分まで食べ終わるだろう。今のうちにマサキさんをモンスターボールから出してコダックを回収しながら逃げる

か。）」

その瞬間台所から「コダーーーー!?!」と大きい鳴き声が聞こえた。しかし、エリカ先輩は台所から帰ってくる気配がない。もしかするとコダックに無理矢理コロツケを口の中に突っ込まされてるのでは無いだろうか。

「(哀れコダック、お前の事は忘れない。)」

俺はこっそりとニドキングをモンスターボールから出して縄を解いて貰った後コダックを回収する為に狭い所もぬるりと倒れるハクリューを向かわせると一緒にエリカ先輩まで連れてきた。

「おい、お前を呼んだのは見つからないように行動して欲しかったからだけど何さらつと要注意人物招いてんだよウナギ野郎。」

俺の言っている言葉を察したのかハクリューは俺の体にほこりまみれの体で這い上がって来た。

「ちよっ?!悪かった!悪かったからお前一旦離れる!」

俺がハクリューと格闘しているうちに何か口に突っ込まれ柔らかい何かを押し付けられた。その瞬間口元に残った感触はヌメヌメとした具が喉元に通る感じだった。その瞬間、俺は後悔した。何故なら俺の頭の中がコロツケの味を拒絶して意識を失ったからである。人間って辛い事を忘れる理由が少しだけ分かった気がする。

「ウッフ、気絶する程美味しかったですか？ブルー君。」

あのクソ野郎、今に覚えている。

〈数十分後〉

「ラフレシア、アマノセラピー！」

「ラフ〜。」

体中から痛みや苦みが消えていくのを感じた。まるで外に干したてであるフカフカの布団に眠っているような心地よい気持ちだ。お腹の中の異物は流石に残ったが、それによってお腹の中でだいたいはつを起きる事は無かった。俺はまぶたをゆつくりと開けると、やはり見た事のある天井が目の前に広がっていた。そこから俺の顔を覗くように上から俺の顔を伺ったのは少し心配そうに俺の顔を見ていたユミさんとラフレシアだった。何故かコダツクがユミさんの右足に抱きついていて、が此処は気にしないでおこう。

「あの、エリカ先輩は？」

「今お義母様と面談中ですよ。それよりもどうしたんですかブルーさん。ベッドの上で苦しそうな顔をしながら頭からダラダラと汗が流れていましたのでラフレシアのアマノセラピーを使用しましたが、具合悪くないですか？」

「大丈夫です。少し楽になれたと思います。嫌、思いたいです。（最後の記憶がエリカ先輩から口移しで食わされた異物のコロツケ？を飲み込んだところがまでしか思い出せない。まあ、そんな事言うとそのを繰り返す可能性もあるのであまり言わない事にしよう。）」

「そうですか、そういえば手足の拘束が外れています何があつたのですか？」

「え!? 嫌、ハハハ…エリカ先輩がコロツケを作ってくれたので食べる為に手足の拘束を解いてもらいました。駄目でしたか？」

俺は目をウルウルしながら甘える作戦を実行した。今までそれに引つかかったのはエリカ先輩しかいないが、

「そんな目をウルウルさせても私には通じませんよ。ちゃんと手足を自分で拘束して下さい。」

「え!? つてしかも自分で自分の両手両足を拘束しなきゃいけないの!？」

「無理なら私がやりますから安静して横になって下さい。」

「安静にする事はまだ分かりませんがどうして手足を拘束されなきゃいけないんですか!？」

「お義母様の命令です。」

あのクソ野郎、今に覚えている。

「じゃあ、ブルーさんは静かに横になって寝ていて下さい。看病は私がしますから。」

「嫌、大丈夫です。自分の体の事は自分が一番よく知っているのでお気になさらず。（この人も俺が拘束されてる間何かしようと考えているのは目に見えてるんだ。悪いがホントに此処から出ないと命の保証は何処にもない。それどころかさっきのように不意打ちされてまた沈められる可能性だってあるんだ。ユミさんには悪いけど俺の事は忘れてもらって違う人生を歩んでもらおう。」

「駄目です！安静にしていして下さい。じゃないと、力尽くでブルー君を襲いますよ？」

「嫌、襲うのは辞めて下さい。…そういえばコダックが他の人に自分から興味を示すなんて久しぶりに見たな。どうやってコダックを餌付けしたんですか？」

「餌付けなんてしてませんし、このコダックは元々私のコダックですよ。」

「え、それどういう事ですか？そのコダックはトキワシティの町外れにある草むらで見つけたポケモンの卵から孵ったポケモンの筈ですけど、…まさかあの草むらにポケモンの卵を捨てたのはユミさんだったんですか!？」

「……………はい、あの時は確かレッドさんと共にブルー君が行動していた頃でしたね。」

「思い出を振り返るよりもどうしてコダックを捨てたのか聞いていいですか？」

「そうですね、あの時はタマムシシティにあったポケモンスクールを卒業した後でジム巡りをやっている途中でした。」

〈数ヶ月前〉

私は実家に帰れないある事情がありヤマブキシティのジム戦をやっていた頃でした。シルフカンパニーという会社にロケット団が侵略していたのでポケモンやシルフカンパニーの社員さん達を助けるべく会社に乗りに込んだ時の事から始まります。

「(ジムリーダーのナツメさんや空手大王さん達の目を欺いてどうやってこの会社を攻め落としたのかは知らないけど何が目的でロケット団はこの会社に来たの？まあ、もしかしなくても最強のポケモンを作る為だとか幻や伝説と呼ばれるポケモン達をゲットする為に来たとかそんな感じだろうな。まあ、自称悪の組織なんてそんなものか。）」

私は地下から女戦闘員のロケット団の制服を剥ぎ取って忍び込んでいた。悪の組織だからこんな事しても良いとは思ってないけど今はポケモンの為だ、仕方がない。

「おい、その下っ端！何をやっている!?!そこはもう見終わったから上の階へ移動しろ！此処にいるポケモンを運んでタمامシシティにあるロケット団本部に移動させるんだ。」

「分かりました！(焦った)、見つかったから正体がバレたと思った。それにしてもロケット団本部がタمامシシティにあるって本当？これが事実だとすればロケット団はとても頭の悪い連中ね。確か7番道路にジュンサースクールが建っていた筈、あその

ジュンサーさんならロケット団の本部をとつくの昔に襲撃してると思うけど……ま  
あ、今は自分と此処に捕まっているポケモンの心配をしておきましょう。」

## 涙のオーダー

私は3階のポケモン達を檻に入れて監禁して（ように見せている）から途中でワイプ出来る便利な機械を使い路地裏にロケット団に捕まったポケモン達を逃していた。

「（それにしても、3階でこの量のポケモン達がいるとすれば上の階にはまだ多くのポケモンが捕まっているかもしれないわね。）」

私は次々と捕まっていたポケモンを路地裏やポケモンセンターに運び逃したが、そろそろロケット団も私の存在を嗅ぎつけてくるかもしれないので、占拠しているロケット団の幹部を倒してシルフカンパニーからロケット団を追い払おう。そう思った矢先、1階まで上がり社長室で捕まっている社員さん達を助けようと部屋を覗いた瞬間、「侵入者発見！侵入者発見！」とブザーが鳴った。

「そこにいるのは誰だ！お前ら、捕まえてこい！」

「！！！！は！承知しました。！！！！」

と言って、下っ端達は扉の前まで移動してこちらに迫って来た。

「（仕方ない、此処は正面突破して中に入るしかないか。でも、5人相手をするのは流石にキツイ、此処は下っ端5人をなんとかしないとイケない。頼むわよラフレシア！）」

私はモンスターボールからラフレシアを出してねむりごなをドアの前に沢山頭の花から出して、勢い余ってドアを開けたロケット団員達はねむり状態となり5人とも眠ってしまった。

「誰だ、このシルフカンパニーの社長室に来てなんの用？まさか、捕まえたポケモン達を定期的に外へ出してたのは貴方？」

「そうだとしたらなんですか？」

「ふん、その時はポケモンを逃した場所を教えてもらうまでよ！私の名前はアテナ、ロケット団幹部にして幹部の中では私が一番ポケモンバトルが強い。後悔しても遅いわよ！」

「なら、私は貴方に勝つだけです。肩書きなんて関係ない、この場で勝った人がこの空気を変えられる。なら、私を変えてみせる！」

「夢見がちな年頃だから仕方ないかしらね、そんな簡単に私に勝とうだなんて10年早いわよ！いきなさい、アーボック！」

「シャー！」

「ゴルダック、貴方に任せたわ！」

「ゴル！」

「悪いけど時間がないの。早く終わらせるわよ！ポイズンテール！」

「ゴルダック、まもるで防ぎなさい！」

「シャー!？」

「ゴル！」

「ゴルダック、今度はこちらから行くわよ！アクアテール！」

「ゴルダック！」

「シャー——!!」

アーボックはゴルダックのアクアテールで壁に勢いよくぶつけられて怯んでいた。

「しっかりしてアーボック！」

「ゴルダック、畳み掛けるわよ！しねんのずつき！」

「ゴダー——！」

アーボックは今度こそ瀕死になって倒れたようだ。

「く、こんな強いトレーナーがいるなんて！今回は引き返すわよ貴方達！」

そう言つて幹部であるアテナはロケット団員の下っ端達をかかとのヒールで踏みながら起こしていた。私は両手両足に口を縛られている人達を解放する事に成功した。

「た、助かったよ。君はなんて名前なんだ？事態が安定したらすぐ君に感謝状を送りたい！」

「大丈夫です、私自身ロケット団に恨みを持っているのでやっただけですから気にしな

いで下さい。それではー！」

私は言うだけいうとシルフカンパニーから離れようとした。その時、モップを持った事務員の格好をしたおじさんに呼び止められた。

「その君、ちよつと来てくれんかいのう。」

「……………なんですか？」

「そう警戒せんでも、実はそのゴルダック見覚えがあつての。そのポケモンは育て屋さんでワシが預けたゴルダックにそっくりでな。もう預けて5年になって、ワシはこの体でなかなか迎えに行けないんじゃないや。だから、いつまでも預けておくわけにもいかんで君がもらつてくれないか？金とモンスターボールなら此処で渡す。」

「え!? そんな、第1に私はその子のトレーナーじゃありませんし、つい最近そのゴルダックは育て屋さんで息を引き取つたんです。そのモンスターボールを貰う訳にはいきません。」

「何故その事を嬢ちゃんが知つとるんか？」

「私、育て屋さんのお婆ちゃんのお孫なんです。今はちよつと喧嘩してて会っていないけど風の噂でそのゴルダックが死んだと聞きました。トレーナーが来るまで何も食べずにずっと同じ預けられているポケモン達を見送りながら生き絶えたって聞きました。」

「そうか、なら尚更じゃ。このモンスターボールと金でゴルダックの墓を作つてやつて

くれんかのう？」

「分かりました。しかし、お金はいりません。もうお墓をお婆ちゃんが作つてるのでモンスターボールだけ引き取っておきます。」

「すまんのう、もしそのゴルダックが卵を産んでいたら……その子を野生に返してやつてくれんかのう。」

「どうして野生に返すんですか？人間の庇護の下で暮らした方が安全かと思いますが、」  
「君は『涙のオーダイル』という本を読んだ事はあるかな？」

「はい、確かいつも仲の良いポツポを寝ている時に食べたオーダイルが泣いて自分を恨みその涙から怒りの湖が出来たと言ひ伝えられてる有名な本ですよね。」

「嬢ちゃん。もし、その本の通りなら怒りの湖に住んでいるポケモンはオーダイルの恩恵で住んでいる事になるじやろ。なら、オーダイルは何の為に存在していたと思う？」

「……………分かりません。」

「ハツハツハ、難しい話をして悪かったな。ワシは周りの生物に生きる場所を与える為だと考えている。今の世の中、なかなか相手の事を思う事が難しい中で最も重要な事でもあるんじゃない。人間もポケモンも助け合わないと生きていけない存在、そんな一つ一つ小さな存在でも誰かを助けて、誰かを幸せにする事でその小さな存在が存在した理由になると感じたんじゃない。怒りの湖に住んでいるポケモン達がオーダイルの涙でその湖が

作られたのを知らなかったとしても、そのポケモン達が生きているのはオーダイルが流した涙のお陰、人やポケモンはそのような存在に感謝をして暮らしている。ならば、ゴルダックはどうじゃ？周りにいた預けられているポケモン達を最低限見守っていた筈じゃ。確かに人間の庇護の下で育てれば卵から孵ったコダックは安全かもしれん。しかし、今回のようにいつロケット団のような悪の軍団が野生のポケモンをさらうか分かったもんじやない。だから、野生のポケモン達を見守って欲しい…

そんな願いを込めてお願いしたんじや。最後まで老いぼれの話聞かせて悪かったの。」

「いいえ、凄く為になる話になりました。」

その後私は、育て屋さんに帰ってゴルダックの卵をトキワシテイの外れにある草むらに捨てたのだ。

## 女子って怖いな。

「っていう事でコダツクの卵をトキワシテイの外れにある草むらに捨てたの。まあ、そこで貴方に拾われたコダツクだなんて前にポケモンセンターで聞いた時はどうしようもない憤りを感じてしまったんだけどね。今じゃコダツクのトレーナーは誰がなんと言おうとブルー君である事に変わりはないし、私自身の不満も解消出来たわ。」

「ん、やっと話終わった？」

「……………」

「嗚呼、ごめん。自分で聞いててなんだけど長い話にはあまり得意ではなくて途中でぼーっとして聞いた話を流してしまうんだ。」

「はあ、まあそこら辺はおいおい説明するわ。」

「まあ、最終的にゴルダツクの卵を野生に返して欲しいって育て屋さんに預けたおじさんが言っつてそのまま捨てるって俺が拾ったって事だろ。」

俺が早口で話すと、ユミさんはジト目でこちらを向いてきた。

「なんだらう、今まで好きだった気持ちを持つてた自分が馬鹿らしくなってきたわ。何故私はこの男を好きになっただらう？」

「おい！自分で言うのもなんだがそこら辺しつかりしないで俺のところへ来たのか？」

「やっぱり私にはブルー君への好きって気持ちは無かった事に、」

「そう、そうですわ！」

俺達の会話を聞いていたのか、エリカ先輩が目を輝かせながらユミさんの手を取った。

「貴方にブルー君は勿体ない！人生損しかしていませんわ。こんな男を追いかけるのは私だけで十分です！ユミさん、自分の人生はちゃんと見切りをつけて時には諦めも肝心なのですよ。」

「そうですね。目を覚まさせてくれてありがとうございませ先輩。先輩もいつかこんな駄目男なんかほつといて違う人生を歩んでいる方が一番良いと思いますよ。」

「あの、さっきまで俺へのアプローチが嘘のような会話してんだけど、女子って怖いな。ちよつと見限っただけでこんな反応するだなんて凄い諦めの早さだ。まあ、俺にとつてもそれはそれで嬉しいんだけどさ。」

その瞬間、エリカ先輩は俺の片腕に両手でぎゅつと掴んで来た。

「何を言ってるんですかブルー君。貴方を私が諦めると思ってたんですか？」

「嫌、あのう……。やべえ、最後の最後に面倒な人が残ってしまった。という事は、」

「という事ですので私とブルー君の交際を許してくれますよね、お義母様？」

「うん、末永くブルーをよろしくお願いね。エリカちゃん。」

「は!？」

「私はこれで、すいません。ブルー君のお母さん。せつかくの誘いを断ってしまったて、」  
「いいのよ、あの子を尻に敷く子が現れるなら誰だつて歓迎なの。ユミちゃんも応援してただけけど、途中で愛想が尽きるのも女の取り柄でもあるのよ。だから、気にしないでユミちゃん、それと、いつでもここに泊まりに来て良いわよ。どうせブルーのベット空いてるし、使わないよりかはマシだわ。」

「はい、トキワシテイのジムリーダーが帰ってくるまでここでお世話になろうと思いません。」

「あ、あのう。それより末永くつてどういう事？さつきも言つたけど俺の意思は？」

「無いわよそんなの。ブルーを大切にしてくれる彼女がいるなら誰でも構わないでしょ？エリカちゃんを愛想尽かされないように頑張る事ね。」

「嫌、愛想尽かされたいんだけど！つていうかいい加減離れてくれないかなエリカ先輩！」

「え、ブルー君とは長い間柄でやつと手に入れた彼女粹を手放すなんて私には出来ませんわ。そうだ、これから一緒に暮らす為の家を建てましょう。周りの人達に迷惑が掛からない大きな部屋でダブルベットを置いてブルー君と夜のひと時を……／／／」

「過ごさねえよ！っていうか話は着いたよね。って事で俺旅の途中だからまた今度ねエリカ先輩！」

「誰が一人で行かせるって言いましたか？」

「え？嘘だよ。今後の旅に付いてくる訳では無いよね？」

「流石にジムを置いてブルー君と旅なんてありえませんか。なのでひとまず私の家に移動しましょう。話はそこからですわ！トロピウスちゃん、出てください！」

「ピース！」

「それではお義母様、ご機嫌様！トロピウスちゃん、タمامシティまで飛んでください！」

俺はエリカ先輩からお姫様抱っこで担がれてトロピウスに乗り移動した。なんかとても複雑な気分だな。

「騒がしい人達でしたね。」

「そうね、あ！そろそろオレンジが帰って来る時間だね。夕ご飯の用意をしないと、」

「私も手伝いますよ。」

「それはとても気が利くわね。助かるわ、それとお父さん？とつくの昔に起きていますんでしょ？早くオレンジの迎えに行ってきて。」

「ハハハ、わかったよ。(ブルー、未永く幸せにな。)」

〈一方その頃〉

ヤマブキシテイ

「後はあのトレーナーを待つだけだ。この町のジムリーダーが帰って来るのをな。」

「貴様らのような奴等はジムリーダーが出なくてもこの私だけで十分だろう?」

「お前誰だ? 見かけない顔だな。老いぼれはさつさと消えないと痛い目見るよ?」

「私の名前は空手大王、この町のジムリーダーだった男だ!」

「へえ、少しは楽しませてくれると嬉しいんだけど。」